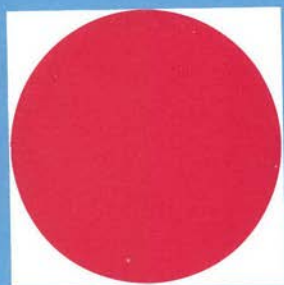


日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第 7 集



日本への回帰
(第七集)

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編

は し が き

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」とは、既に言い古された孔子の言葉である。しかし、この淡々たる言葉にこもる異常な決意をくみとることは、それほど容易なことではない。道とは人間が禽獣ではなく、まさに人間であるための正しいありようは何かということであろう。その問を解くためには、生命を賭けても悔いないという、断乎たる、さわやかな宣言である。しかし、教養とは道を身につけることであり、学問とは聞信のよろこびを目指しての精進であるという時代は去つてしまった。知識の体系のみが、学問のアルファであり、オメガであるという状態の中では、青年は情熱を失つて傍観者となるか、過激なイデオロギーの盲信者となるしかないのである。ゲバルトとポルノの時代だといわれる。歴史の歯車が一サイクル逆転して、原始の蒙昧に帰つたような奇怪さである。この底知れぬ退廃にも、人々はもはや余り異和感を抱かないように見える。内面の空虚とはうらはらの、仇花のような文明が、人々の刹那的な生をかるうじて支えているからである。

横井庄一さんがグアム島から二十八年ぶりに帰つて来た。「はずかしながら生きながらえて

おりました」という第一声とともに。「私は天皇陛下さまからいただいた小銃はちゃんと持って帰ってまいりました。陛下さまにそれはお返し申し上げます。陛下さまに対しては、私は十二分にご奉公できなかつたことを、私としては恥ずかしい次第でございます。」ここには、天皇に直属した一人の兵士がいる。その帰依感が、二十八年の孤独なジャングルの生を支えたのだ。こういう言葉の重みは一切のしたりげな進歩的言辭を封殺する。ナンセンスと言おうと、時代錯誤と言おうと、天皇陛下への信が彼の魂を支えたことは「事実」であつた。そして、それは決して狂信ではなかつた。狂信が二十八年もの永い歲月一人の人間の心を支え続けることはできないからである。天皇や国家という個人を越える「価値」のために献身する心情、それはまさしく戦前にはあつて戦後には全くなくなつたものだ。それが硬化し、イデオロギー化したのが故に犯した罪を糾弾することと、超個人的価値そのものを否認することとは、全く別の問題である。献身の対象を否認し、抹殺することは、人間を個の枠に閉じこめることであり、人間性の名において、無制限な、むき出しのエゴの横行する修羅を許すことにもなる。中共の山村ゲリラの方式を真似て、主婦を人質に軽井沢の山荘に閉じこもつた「連合赤軍」なる一派は、説得の母親の乗つた装甲車に向つて発砲したという。人間の「道」にはずれた、恩愛の情などナンセンスとせせら笑う多くの若者を生み出した元兇は誰か。「戦後教育」は今こそその無残な成果を問われているのである。

二月二十一日、ニクソン訪中が実現した。昨年の中国の国連加盟以来の異常な中国ブームに更に拍車がかけられるであろう。しかしジャーナリズムの甘い論調とは逆に、国家はおのれの国益のためには何でもするという当然のことが実現したに過ぎない。両国とも力を背景にした徹底的な現実主義。狡智と冷静な打算と、確乎とした国家意志の貫徹。そういう姿勢の見事な成果である。永い革命戦争と権力闘争の中で鍛えぬかれ、生き残って来た中国の要人たちは例外なく「力」の信仰者である。微笑し、もみ手をし、母国の政府の「軍国主義化」を批判する共同声明に喜んで署名する政治家たちを、彼らが対等の交渉相手とする筈はない。身を挺して「内政不干渉」の原則の遵守を迫る政治家が一人もいないのか。危機はまさに深刻である。

このように停滞した状況の中で、われわれは日本の文化と伝統のもつ意味を虚心にふりかえってみたい。それが合宿の目標であった。今ここに合宿記録の出版に当り、原稿掲載について深いご配慮を頂いた木内、戸田、村松の諸先生に厚く御礼申し上げる次第である。

昭和四十七年四月

目次

はしがき……………1

一、講義

物を思い、感ずることと生き甲斐と……………国学院大学講師 戸田義雄……………3

世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省

……………文芸評論家 村松剛……………33

世界の転機と東洋思想……………世界経済調査会理事長 木内信胤……………81

二、日本のいのち

天皇政治について——歴代御製を中心に——

……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………113

歴史の見方——明治維新をめぐる——

……………神奈川県立横浜翠嵐高校教諭 国武忠彦……………145

事を論ずるには己れの地、己れの身より見を起すべし

——松陰、玄瑞の往復書簡——

福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎……………163

国を支える力 ——孝明天皇「御述懐一帖」について——

……………亜細亜大学教授 夜久正雄……………183

短歌創作の手びき……………熊本市立藤園中学校教諭 北島照明……………207

短歌全体批評……………福岡教育大学講師 山田輝彦……………219

年間活動報告

一年の歩み——雲仙合宿より霧島合宿まで

……………早稲田大学政経学部四年 山口秀範……………237

第十六回「合宿教室」のあらまし……………九州大学医学部四年 前田秀一郎……………269

歌集…………………………301

あとがき…………………………320

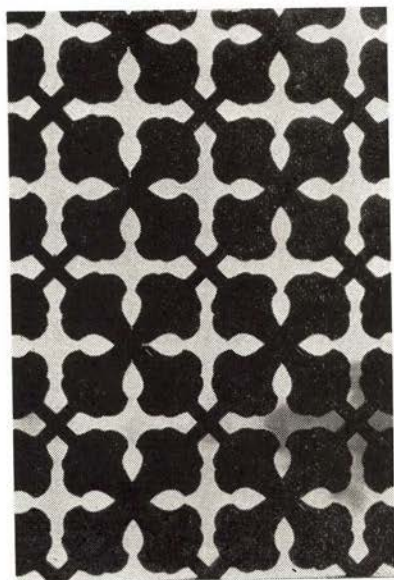


講

義

物を思い、感ずることと生き甲斐と

戸田義雄



現代の思想状況と「生命」をとらえる視点

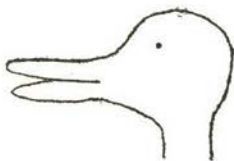
生き甲斐の問題

占領軍の教育文化政策

日本人の心

建礼門・花狭間

現代の思想状況と「生命」をとらえる視点



まず上の図をご覧下さい。何か得体の知れない絵が描いてございます。この図の左の方に注意を向けてご覧頂きますと、多分これはアヒルに見えると思います。それから、右の方の局面に注意の眼をおきますと、多分これは兎に見えるはずです。ユダヤ系の哲学者でイギリスに帰化しました現代哲学の革命を劃したと言われる、ヴィトゲンシュタインの書いた「哲学的探究」(一九五三年・初版)という本に載っている図でございますが、もともとはジャストウという人が「フアクト・アズ・ファイン事実と寓話」という題目の本の中で使った絵なのです。それをヴィトゲンシュタインが借用し、自分の本に使ったのでございます。一体この図形から、彼は何を言おうとしたのでしょうか。

それでは、今度は上下に注意の眼を向けたらどうなるでしょう。丁度私が米国オハイオ州のケニオン大学におりました時に、哲学科の優等生だけを集めてやるセミナーがございました。五、六人の優等生と哲学科の教員が全部出席して、徹底的なディスカッションをやるのです。その時一人の学生が、上下に注意の視点をおいたならば、これはステッキの頭じゃないかと申しました。アメリカには、そういう不細工なステッキが事実ございます。それで成程そういう

意見もなり立つかとその時思ったわけです。

一体、右の図形とそれを見ての話は何を意味するかということを中心とて考えてみます。すると、こういうことが言えます。それは、一つの図形が何であるかということは、これを見る人が、どの局面に注意を向けるかによって違ってくるということなのです。従って物を見るということは、実は、そのものが何々であるとして見る、あるいは何々だとして解釈するということになるわけであります。ですから、この絵はある意味において、形はありますけれども、形はないともいえるのです。人間が物を見るというのは、実はある特定の局面から物を見て、何々だと解釈しているということになります。物を見る働きは、或る種の解釈活動だということになります。

およそものを考えるという場合、古い大和言葉では、「もの思う」と申しました。単に思うのではなくて、「ものを思う」のです。思う対象の「もの」がある。その「もの」は、形のある物、自然的な物であったり、形のないもの、抽象的なものであったり、観念であったりします。いまこの場合は図形ですから形があります。私どもはそれを目に見ることができました。

ものを思うというのは、必ずその物について、見るとか、嗅ぐとか、さわるとか、聞くとか、そういうわれわれの持っている感覚、即ち、五感の働きを通して、私どもはそれを何々だとして扱っているのです。さて、例えば、この図形のように形のある物の場合はよいのです

が、形の見えないものの場合はどうなるでしょうか。たとえば、命いのちだったなら、これをどう見るのか、どう捉えるのか。命を捉える局面は何か、これが重大な一つの問題なのです。

いろいろな命の動きの中で、たとえば「命が苦しむ」という一番ぎりぎりの場面を一つ想定します。苦しんでいる、悩んでいる、喜びがない、そういう場面を考えてみます。そういう命の状態をどう捉えるのか。ある人は「それは人間の性衝動が満足されていないからだ」と申します。これは一つの局面からの見方です。苦しむ命の捉え方として、その源をたどりたどれば、性衝動、専門的にはフロイドはリビドーと申しましたが、それが満足されていないからだというのです。ウィーン大学の精神病理学者であるフロイドというこのユダヤ人が、人間の人格に歪みを与えている一番の原因は性衝動の抑圧にあると云ったのです。そう



いう考え方の人をフロイディアンといいますが、これは一つの局面に立つて命を捉えている系列の人達をさします。

また、命に対する次のような捉え方もあります。私どもは毎日こうして真剣に物を考える。意志的に動こうとしている。実際は自分自身が主体的に、力強い意欲を持ってやっているようにだけでも、生産力という下部構造に動かされているのであって、人間の主体的な意志構造というものはないのだ。こういう考え方を打ち出したのはご承知の通りカール・マルクスです。彼がまた不思議にドイツ系ユダヤ人なのでした。

戦前よくユダヤ人問題でいろいろなことが論じられましたが、私は別の意味で、二十世紀の思想界を全世界的に動かしている根源的なものが、なぜこうもユダヤ人から出ているのかが不思議でならないのです。ユダヤの宗教は、ただ一つの神を立てる、いわゆるモノセイズムです。これが悲しいユダヤの亡国の歴史の中から、激しい「神と選ばれた民との間の契約宗教」として生れて来たのです、

ユダヤ人の物の捉え方は、普通の人と言わないような、一皮むいたことをいうのです。人間はきれいごとを言っているが、最後は性衝動の満足だとか、人間の主体的な思想、芸術その他すべての上部構造は、経済的な生産力によって決まるんだとかいう、一皮むいた考え方です。もしそうならば、われわれは主体的に思考したり、意欲したりする余地はなく、影として生起さ

れたままに動くだけの生き物ということになるのです。従ってマルキシズムでは人間の主体性の問題Vが解けないのです。古在由重という唯物論哲学者が、マルキシズムの最大のウィーク・ポイントは人間の主体性を論ずることができない点だといっています。どうしてそういうものに酔っている人が今日多いのか、僕には分かりません。ところがおかしなことに唯物論を奉ずる人に、人間の主体的ないきいきしている様子が時にみられる。しかしこれはまた別の問題なのです。ご承知かとも思いますが、あのロシア革命が起きたあとで、戦闘無神者同盟というものが出てきた。しかし黙っていても変化する下部の生産力が動いて、それに即応して上部構造は変わってしまう。このことは歴史の必然性であって、唯物論哲学では人間が主体的に行動する余地はないというのですから、歴史の必然性を、より革命的に早めるために意志的に、主体的に行動せよと呼びかける余地はどこにもなく、どこからも出て来ない訳でしょう。それを敢てするのは、だからそれは論理上の矛盾であり、飛躍である訳です。論理を埋めて飛躍させる、それは合理的には大きな破綻があるのですが、むしろ非常な非合理である。そこを科学的社会主義の名において、破綻を飛び越えていくところが魅力を生んでいるんですから、おかしいのです。

それから、近ごろの人々は前時代の人々とは違って、伝統というものから生き方やふるまい方を学ぶことができなくなりました。ふらふら横を見て、他の人々がする通りにしようとする

あなた任せのコンフォーミズム、適応主義という生き方をします。国民性格研究の大きな業績「孤独な群衆」（一九六一年新版）の中で、デヴィッド・リースマンの用いた言葉を用いるなら他人志向型がそれに当るといつてもよい。要するに、あらかじめダイヤルが決っていて、与えられるダイヤルだけをひねって聞いているが、自分から自主的に発信することがないのです。こういう適合主義が自由主義社会に旺盛です。そこからは主体的な人間の意志の問題が出て来ない。適応すべき相手のものが上の方から独断的に決められる。その決められたお仕着せに易々諾々として従い、乗っていく。これがトータリタリアニズム、全体主義なのです。

それに加えて、例えば人間は裸の猿に過ぎない、人間は計算機に過ぎないというように、一切を或る一つのものに帰一させるリダクシヨニズム、還元主義という思考法があります。これらを一括して、機械的決定論と呼んだらいいだろうと思います。この綜括の仕方について、私はウィーン大学のV・E・フランクル教授から示唆を受けました。

人間に関する事が、人間の本质とは全くかわりのない一つの事柄によって決定し得るとみる考え方が機械的決定論です。こういう考え方が、自由主義社会と共産主義社会とを問わず、いつてみれば全世界を覆っているのです。要するに命というものが、そういういのちの本质にかかわりのない一つの事柄で決められるという、まことになげかわしい考え方なのです。本当だったら、いのちが反撥するはずです。反撥のないのがおかしいのです。このような現代の思

想的状況を、まず認めてかからねばなりません。

実は命の本質についてすぐれた考え方を持っている人を私は知っております。「夜と霧」の作者として有名なフランクフル教授がその人です。彼はフロイドの三代目の弟子になるのです。フロイドの批判者なのです。彼の家族は、第二次大戦において、ポーランドの Auschwitz イッツの収容所のガス室で全部死にました。ご自分は精神科の医者として収容所の仕事を助けていたのですが、ドイツの敗戦によって辛じて助かりました。収容所では明日知れぬ命を前にして、ある者は動物のごとくわめいている。ある者は天使のごとく清らかである。一体同じ人間でありながら、死という限界状況の中で、何がそういう違った二つのタイプを生むのだろうか。彼は精神病理学者として、自分をも含めてその問題をみつめたといふのです。そして今までの精神分析では駄目だと考えるに至りました。そもそも人間には、人間らしい人間としての誇りというものがあるじゃないか。それは何だ。それは同じく命をもっているものへの連帯責任だといふのです。彼はそのような実存にある人間を責任性存在と呼んでいます。自分も例外なしにガス室へ入るのだが、しかし、自分を見ている別の、いのちある者の目がある。多くの肉親や遠い先祖や、それらのいのちのつながった人達のまなざしを考えた時、自分は同じ命をもった者として、雄々しくあらねばならない、いさぎよくあらねばならないと思つたといふのです。人間の命というものが、その本質にかかわりのないもので決められているという機械的

決定論が一般化している現在、フランクフル教授の体験は実に貴重なものでした。

生き甲斐の問題

私の話はこれから本論に入りますが、まず申し上げたいと思つてゐることは人間の命というものを機械的決定論のように決められて、それで黙つてゐるような考え方は断じて承服できないという、非常に端的なことなのです。承服どころか、歓迎するまでになつてゐる今の日本の思想状況、学問の状況は到底納得しかねるものがあるといふことを申し上げたいのです。

命の問題を考えると、命は当然自分の命の拡充をはかろうとします。生理学的にもエンテレキーと申します。「自己完結性」を求めて、はてしなく拡大するのです。それは自然です。しかし、命というものは非常に不思議な法則を持つてゐます。いどしく、恋しいわが身というものにかかずらわつて、その命の拡充と完結だけを考へていたならば、実は本当の命の喜びがないといふ、そういう矛盾した構造を持つてゐます。これが、何か特別に修行したとか、思想訓練を受けた人が、いったのならば、それは修行の結果だとおっしゃるかも知れません。私の恩師で東大の図書館長をしておられた岸本英夫教授が、停年でやめられる一月前に上顎癌で亡くなられました。恩師のことを、そういつてはいけませんが、お坊ちゃま育ちで、お人はいい方でしたが、病氣なざる前、特別な死生観を持つておられた方にはお見うけしませんでした。

信仰的にはユニテリアンでした。その先生が悪性の癌に蝕まれて、明日ない命というものと直面しながら、自分一人で戦っておられるうちに、誰をおいても自分だけとは思ふ、そのいとしい自分のいのちを捨ててこそ、本当の喜びがあるのだという命の不思議な矛盾した構造が始めてわかったということを出されたのです。毎日新聞の出版文化賞をもらった「死をみつめる心」にそれが書かれています。それを書かれる前に私は電車の中でそれを聞かされて感動しました。先生にしてよくこの言ありと思つたのです。そうある命の本質を、かりにも決められた機械論で片付けられては、私どもが承知するはずはないのです。

最終的には、つながる命のために、自分の命を捨ててゆくとところに本当の命の喜びがあるという、これが生き甲斐となるのです。私が調べたところ、生き甲斐という言葉はそう古い言葉ではないようです。ドイツ語でも、英語でも、ズバリ生き甲斐というようにない方は余りないように思います。ともあれつながる命のために自分を捨てるところに生き甲斐があるということは普遍的原则であるということ、私はいろいろ調べた上確信しました。昭和十三年に武者小路さんが書かれた「人生論」も、実は外ならぬ生き甲斐論でしょう。ところが、最近の生き甲斐論は、今述べたようなタイプのものではありません。生き甲斐論一つ考えてみても、そこに断絶があるような気がするのです。

そこで、命あるものが、命あるものへ、命を捨てていくという形の一步手前に、たとえば親

に対し、恩人に対し、あるいは自分の所属する共同社会に対し、どんな意識を持っているかについて大変面白い結果が出ています。左の図をご覧ください。

これは九州大学の牛島義友教授が、六年がかりで調査したもので、ドイツでは、ボン、ハンブルグ大学、イギリスではロンドン、マンチェスターをはじめ、フランスでは国際教育研究所をはじめ、ユネスコの後援を得た世界的な調査なのです。大変惜しいと思うのは、これにアメリカとソ連が入れば面白かったと思うのですが、それでも六年もかかった調査です。たとえば①です。「お父さんやお母さんを助けるために自分はどうなってもかまいませんか」という質問です。ドイツ、イギリス、フランスは、父母のためにどんな犠牲になってもかまわないという回答が九〇%以上になっています。イギリス、フランスは九七%以上、同じ敗戦国という条件を持ちながらドイツでは九一%になっています。日本は五六%、半分近くの比率でしょう。一体どうしてこういう差が出たか、これをもって、日本人は親不孝者だと速断するのは早計に過ぎます。この統計は客観的データであって、嘘はないのですが、何か事情があってこういう数字が出たと考えなければなりません。次に②「自分のことはどうしてもよからまず恩人のことについて考えますか」という質問です。ここでも、イギリス、フランスは九〇%以上、ドイツですら八五%以上です。ところが日本は四三%です。半分以下です。この統計からいくと、日本人は恩知らずということになるのですが、直ちにそうとはいいい切れない事情があって、こ

ういう数字が出たのだといわざるを得ないので。次に③④⑤の項はいずれも一種の国防意識に関係してまいます。③「あなたは自分の国の自衛のために強力な軍隊が必要だと思いませんか」という質問について、イギリス、フランスは五〇%以上、ドイツですら四〇%以上の人が必要と答えています。ところが日本人の解答は二四・八%です。どうしてこういう結果が出たのか。これは、やはり憲法第九条というものがあって、その解釈について教えられているからだ、私はみます。

次に④「あなたは徴兵制度をしても国を守る必要があると思えますか」という質問です。この場合、真中の「いいえ」という否定のところを見て下さい。「守る必要なし」という答えが日本では六八・九%です。七〇%に近いのです。同じ敗戦国でありながら、ドイツでは二五・五%です。それから五番目の項目ですが、「もし、あなたの国がやむを得ぬ事情で他の国と交戦した時にあなたは左のどれを選びますか」という質問です。「絶対に参加せず」というところをご覧下さい。日本は四八・七%です。百人のうち半分は参加しないで逃げてしまうのです。ドイツは一四・九%です。百人中の十五人は逃げるけれども、あとの七十五人は戦うといっているのです。日本とはちよつと違います。

そこで最後の⑥の質問です。「国のため、個人の尊い生命を投げ出すことはいかなる場合にも馬鹿げていると思えますか」という極めて大切な質問です。この質問に対して、「いいえ、

馬鹿げていない」という真中のところの解答をご覧下さい。日本は四一・五%、ドイツが四二・〇%、イギリスが七三・九%、フランスは二五・〇%です。フランスに至っては「わからない」という答えが六六・七%になっています。フランスには本当にわからないところがあります。この数字は、もちろんイギリスよりは低いですけれども、ドイツと殆んど同じ数字を示しています。これは今までの集計から見たら、ちよつと意外な現象と見られないでしょうか。

私は、この数字は卒直な意識の反応だと思ふのです。日本の青少年の半分は、国のために命を捨てることは馬鹿げていないと云つてくれているのです。この事実をこの数字は語つて呉れています。しかし、それが、いざ具体的に自衛隊とか、徴兵制とか、交戦の時の態度決定とかいうことになる、ガタツと数字が下つてしまふ。これは憲法第九条というものについて教育されているからではないでしょうか。皆、人情としては、国のため命を捨てることは馬鹿げていないといつて居るのです。それが、素直な感じとしてここに出ているのです。素直な心が青少年の心にまだまだ生きて居るのです。アウシュビッツにおけるフランクル教授も、私の恩師の岸本教授も、ここに出て来る青少年の心も、本当の生き甲斐は同じつながるのちあるものための自己献身にあることを示しているのです。ところが、それを具体的な国防の問題の場面につき合わせる、パツと憲法第九条が出てくるようになって居るのです。そういうように教育されているのです。それを私は人考え方の枠組みVと呼ぶのです。そういう強い枠組みが

どうして出来て了ったかということをお願いしたいと思います。

占領軍の教育文化政策

みなさんが受けられた、俗にいう六三制という新しい教育制度、これは昭和二十二年四月に始まったのです。四月に始まる新学制を何と三月の第九二特別帝国議会で、しかも、わずか二週間の審議で衆議院と貴族院を通過させてしまったのです。この間の事情は、進歩派学者といわれる鈴木英一氏の「教育行政」という本の中の「教育基本法の立法過程」という章をご覧ください。なるとよく分ります。わずか二週間で、四月から始まる新学制を強行採決させてしまったのは、占領軍の強制であって、いかんともなしがたかったからです。当時の文部大臣で現在の中央教育審議会の会長である森戸辰男さんが、この六月に戦後教育を大幅に改革しなければならぬという答申案を出されました。その直後、朝日新聞で「教育改革」という特集をやりましたが、その中で森戸さんは、自分が文部大臣の時には、日本的な教育をやるということについて、全く交渉の余地がなかった。だから時を待っていたといっておられます。たしかにそうだったとは思いますが、せめて昭和二十七年、独立した直後になぜその事をいわれなかったのかとそれが残念です。今度の改革案の本音は教育基本法というものもっている非日本的な性格を何とか是正しようということなのですが、誰もそれをはっきりはいわないのです。そして、

情報化社会や技術革新に伴う世界的な教育体制の改革に合わせるという形で、それが行われているような感じになってしまっている。

ところが、一番肝心なことは、教育基本法というものの性格なのです。それを内容的に是正するということが眼目のはずですが、それがいわれていないのです。私は大変憂慮しているのですが、恐らく今度の改革は駄目でしょう。機構いじりに終るのではないでしょうか。日教組の反対とは全然違う意味でいっているのですが、憂慮にたえないのです。一体教育基本法がどうして非日本のかという点、それは第九二帝国議会の議事録を見ればわかります。そこでは、日本的な良風美俗を生かすべきだとか、ただ漠然と文化の創造などといわずに、日本の文化とうたわなければならぬとか、天皇の地位を教育基本法の中にうたわなければならぬとか、論議されたのですが、そういう意見は全部抹殺されて了ったのです。二年ほど前の「ジュリスト」という法律雑誌の教育特集号がありますが、その中で鈴木英一氏が「戦後教育の諸問題」の冒頭論文を書いています。その中に、いわゆる戦前における良風美俗をもちこめという修正案が一切敗退して採用するところとならなかった。これらと一切訣別したところから新教育が出発したことをはっきり書いています。これは進歩派の学者が書いているのだから間違いはないのです。こういう教育によって教育された青少年が、今見たような集計の数字を示すのは当然でしょう。

教育改革と共に、もう一つの驚くべき措置が神道指令というものです。神社神道に対する政策です。たとえば、戦前においては官国幣社は国家の補助を受けていた。そういうものが国家から分離せしめられるというのはわかるのです。教会と国家の分離なのです。教会という宗教的組織と国家の関係の分離なのです。ここで問題になるのはあくまで宗教組織であって、人間の心情の中に入っている宗教的なものの感じ方、意識ではないのです。占領軍は宗教そのものをこわそうとしたので、私どもはハーグ条約違反ではないかというのです。

一九〇七年、ハーグにおいて国際陸戦法規の条項ができたのですが、その六十四条に、被占領国の持っている宗教を尊重しなければならないと書いてある。占領軍は神社神道を宗教と考えたのです。西洋で考えるような、教会という宗教組織とは考えなかつたのです。神道指令には「すべて宗教、神道の儀礼、祭祀、教義等に現われた軍国主義的、超国家的イデオロギーの宣伝及び公布を排除し、直ちに停止すべし」と書いてあるのです。教会と国家の関係を分離するというのはなしに、神道的な物の考え方、感じとり方、そういうものを漠然と「神道の中に現われた軍国主義的、超国家主義的イデオロギー」と規定し、その正体は何も説明しない。一体何が軍国主義的イデオロギーで、何が超国家主義的イデオロギーなのか、何もわからな

い。ところが、それを日本の進歩派の学者はみな抵抗なしに受取つたのです。その最たるものが丸山真男氏であり、家永三郎氏です。要するに彼らもナシヨナリズムが悪いとはいえないで

しよう。だから、ウルトラ・ナシヨナリズム（超国家主義、超民族主義）と書いた。更にそれだけでは弱いからミリタリズムと書いた。それを馬鹿の一つ覚えのようにくりかえすのです。

それでは、その実体は何かというと、それは天皇様の問題になります。神道では神社で祝詞があります。その祝詞の中に、天皇の御代を寿ぐ言葉があるのです。その削除を命ぜられたのです。これは大変な問題で、明らかにハーグ条約違反です。それを防ぐことができなかったのは、日本の学者が弱かったのです。いかにも残念ですけれども、そこまでやられたのです。マーク・ゲインの「ニッポン日記」の中で、終戦の年の十二月十五日の情報で、急激な根本的変革が進行しているが、それが今日発表される。それは神道指令である。もし日本が最後の反逆を試みるとすれば、この期をおいてない。われわれ記者はそれを注目している。もしこれに反撃しなければ、日本は永久に反撃しないであろうと書いています。事実その通りになってしまいました。

それでももう完全に日本人はその魂を奪われてしまったのです。それにしても、よくここまで来たものです。本当に不思議です。

ところが、三島さんのあの事件以来、私には何か不吉な予感がします。正直なところ、大切ななにかがポロポロこぼれていくような感じを持っているのです。先祖以来の遺産でやっと持ちこたえて来た日本が、もう楽観的にはいかぬということです。複雑な国際政治と、今の思想

界の動向とを考えながら、日本人の生命の問題を本当に考えなければいけない。今は、日本人の生命というものを八つ裂きにされるようなことが行われているのです。占領というものが残した戦後の教育路線によって、ガッチリした枠組みができてしまっている。だから、日本人の感じとり方は決ってしまったのです。こうしてエネルギーのはけ口はレジャーしかないということになったのです。つまり、本当に生命が燃えて、生命が感動するという場面が問題になっていないのです。それでは一体どうしたら生命はその本質を得て感動するようになるのか。いくつかの証拠をあげて、それを検討して見たいと思います。

それはやはり素直に生命の動きをみつめる、あるいはそういう生命の動きに直接することだと思えます。左のユングの証言をご覧ください。

「すなわち、無意識の領域が照らし出されると、すぐさまわれわれは、混沌たる個人的無意識の領土にはまり込むのですが、そこには、われわれが出来たら忘れたと思うようなもの、どんなことがあっても自分自身や他人に対して白状したくないようなもの、そもそも本当だと考えることすら嫌なようなもの、一切合切が含まれています。それゆえわれわれは、うまく逃れる道は、この暗い隅っこの方を出来るだけ見ないようにすることだと思ひ勝ちです。」

(ユング「東洋的瞑想の心理」、一九四三年にはじめて発表さる)

ユングはさきほど申しましたフランク先生の先輩筋に当る人です。驚くなかれ、私ども日

本人が静かにわが心に沈潜して、魂の内省をするというようなことが、彼ら西欧人にはでき難いといっているのです。これは単に正直な告白だということに済ませてよいこととは違うのです。

西洋人というのは、そういう意味で動物的なバイタリテイが激しいのかも知れません。彼らにとつては本当に魂の底をみつめるということは恐ろしいのです。そういう魂のパターンをもつたものに囲まれて、そういうパターンの文化の中で、われわれは学問をして来たのです。西洋史学などというものは、殆んどヨーロッパ中心主義の歴史です。従つてそこではアラブもオリエントも正確な位置づけができない。本当にグローバルな歴史というものは彼らにはできない。何といつても、彼らにはヨーロッパ中心のエゴイズムがある。それは、のぞかれたら困るような、恐ろしいような心らしいのです。それを告白したユングは、やはり正直といふべきでしょうか。

日本人の心

ところがそういう型の文化からは決して出て来ないものがあるのです。もちろんゲテなどは例外ですが、一般的な文化のパターンとしてはやはりユングの告白の通りです。そうでないものが日本にはあるのです。魂の本当の置きどころは何か、それは素直な心、ありのままの心

ということですが、A考え方の枠組みを持たないVということですが。生命の本質と無関係な機械的決定論でもって、複雑な生命の疼きというものを決定しようとするのは傲慢です。そういうことをしないということですが。最近私が大変心を打たれたのは、三島さんが最後に残して行った作品の中にそれが出ているということなのです。

三島文学については、ずいぶん研究者もいるし、特に「豊饒の海」については、輪廻転生の物語という形で長篇小説が形成されていると申されますが、三島さんが一番狙ったのは、やはり生命の喜びの問題なのです。それにふれた評論のないのが残念です。三島さんの次の証言をご覧ください。

「奥底にあるものをつかみ出す。さういう思考方法に、われわれ二十世紀の人間は馴れすぎている。その奥底にあるものとは、唯物弁証法の教へるものでもよい、精神分析学や民俗学の示唆するものでもよい、何か形あるものの、形の表面を剥ぎ取ってみなければ納まらぬ。」（三島由紀夫「古事記と万葉集―日本文学小史の内―」、群像、昭和四十四年八月号掲載）

ここには唯物弁証法、精神分析学、が出ています。さらに民俗学が出ています。これは凄くと思いました。下手をすると民俗学も一種の決定論になるのです。民俗学では「常民」ということをいいます。コモン・ピープル、常民という漠然としたところに、日本文化の形成力を見るところという考え方が、一種の決定論になってしまうわけです。何か形あるものの底をえぐって、

皮をはいで、そしてそこにあるものを引き出していく。フロイドはリビドー、マルクスは生産力、民俗学は常民の文化形成力だ。何かそういうように一皮むいて、底の方にある決定的な力を引き出して来て、それで済むという考え方、これが近代人の通弊だといっているのです、ところが、三島さんは、そうした底にあるものは、性情や文化の素材の一であるが、洗練されて癒やされる手続きをもたなければ、不健全な種明しを喜ぶ顧客ののぞき見根性に通ずるとみたのです。そういうことをやめにした。そのような、力はどこに発するか。次の資料をご覧下さい。

『自分は今日はもう決して、人の肉の裏に骸骨を見るやうなことはすまい。それはただ観念の想である。あるがままを見、あるがままを心に刻まう。これが自分のこの世で最後のたのしみでもあり、つとめでもある。今日で心ゆくばかり見ることもおしまひだから、ただ見よう。目に映るものはすべて虚心に見よう』と、車が走り出すや否や、本多は固く心に決めた。

(「豊饒の海」の第四卷「天人五衰」の最終章 昭和四十五年十一月十五日)

この部分は主人公の本多が齢八十になり、もう死ぬ間際の告白なのです。ただあるが儘に見よう。目に映るものはすべて虚心に見ようということです。型にはいって、枠組みをきめて、色眼鏡をかけて見るのではない。素直に、虚心に見ようということです。何だ、結末がそんなものかとおっしゃるかも知れませんが、それが容易に気付かれず、なかなか出来ない所の心境なのです。私は若くしてこういう思想の問題に目覚めて今日まで来ました。そして、求めに求めて

来たのは、人類は一体最後に何を求めているかということでした。それはさきほどからいっている本当の生命の幸いであるといえるようです。その生命の幸いという場合に、日本のために死ねた三島さんが、こういうことを最後に書き残された訳なのです。

虚心に見得るものは何か、それは幼な子の心です。それが日本の伝統です。ユングのいうように、西洋の魂の伝統の中にはそれがありません。西洋には幼な子の心が象徴的に鏡になるという、そういう文化のパターンはないのでしよう。

吉田松陰が最晩年に深く傾倒して啓示を受けた李卓吾という明の儒者がいます。私は李卓吾のことはよく存じませんが、河上徹太郎さんの「吉田松陰」を読んでこの点を多く教えられました。

松陰が卓吾と出会ったのは松陰が強いられた刑死の直前ということ、年齢的に円熟したからというのではないのですが、全人格的に惹かれていったということ、注目すべきなのです。

松陰の思想、人格の形成の上に大きな力となったのは孟子や山鹿素行であって、それらが宣長流に言えば一見して「漢心の学問」であると考えられます。漢心の学問をした松陰のどこに、「大和心」があるのか。謂わば、漢心から大和心への通路というか、もっと適確に言えば、漢心の文字表現をかりて、ずばり、本来の「しきしまの大和心」を表出したものは何かという問

題をつきつめて考えた時に、松陰の李卓吾への傾倒——中でも、李卓吾の「童心論」に対する傾倒が重くみられることなのです。

安政六年正月二十三日以降という日附の、入江杉藏宛の手紙に、

コノゴロ李卓吾ノ文ヲヨム、面白キコト沢山アル中ニ童心説甚ダ妙。

とあります。ここで言われる童心とは、無垢の心と解せられ、到らない稚なさは違ふものなのです。

人間の真実の心、誠心は純一無雑なこの無垢の心であり、それは真の国士の志に通ずると松陰は見たようでありました。

ソレ童心ハ真心ナリ、モシ童心ヲ以テ不可トセバ、コレ真心ヲ以テ不可トナスナリ。ソレ童心ナルモノハ仮にせヲ絶チテ純真ナリ。

最初一念ノ本心ナリ。

とも卓吾は言っておりまして、童心即ち真心を振りかざして、真と仮、本物と偽物、実と虚を、時代について批判したのが卓吾だったのでした。忌憚なく前代の腐儒の虚と偽りをついたのであります。その批判の激しさのために、卓吾は官学派から異端とされました。そこで、却って卓吾も、松陰もすすんで「狂狷」という言葉を同じに使う位でした。「狂者ニ非ザレバ興スコト能ハズ、狷者ニ非ザレバ守ルコト能ハズ」とは、講孟余話にあらわれた松陰のこの思想

です。

世間の人がスタイルよろしく、嘘の言葉をはき、嘘を事とする。そうした仮（にせ）と嘘の人であふれた世情の中にあつて、純真の人、素直な童心の人が行動した場合には「衆の悪ムモ尤モノナト」と松陰自らいっております。

そういう意味で、童心が人として在るべき指標の姿となると同時に、それに徹する人が、「狂狷」でなければならぬという悲劇的な状況をば、この二人の偉人から吾々は学ぶので

す。

その点、私はかねてから明治天皇御製を拝誦いたしましたして、幼な心というものについての、み教えを得ているものでございます。ここにあげましたものは、すべて「心」という題で詠まれたものであります。

もてあそぶ手にとらすれば幼子がうちゑむ顔のうつくしきかな（明治三十六年）

かざらんと思はざりせばなかなかにうるはしからん人の心は（明治三十七年）

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな（明治三十八年）

つくるはむことまだしらぬうなゐ子のもとの心のうせずもあらなむ（明治三十九年）

その「もとの心」こそ大切です。そのもとの心を持ち得た時に、はじめて人間にとって至極の歓喜がある、最後の喜びがあるといつて、三島さんはその最後の作品を残して死ねたので

す。私は期せずしてゲーテを思うのでした。

ゲーテは一八三二年の三月十二日に亡くなったのです。「ファウスト」の完成までには約五、六十年かかっています。そして、最後まで残ったのは第二部の第四幕、第五幕ですが、それはファウストの救いの問題でした。キリスト教で救えばいいじゃないかと思われるかも知れませんが、キリスト教で救えるくらいなら簡単です。次の資料を見て下さい。

「ああ、これでおれは哲学も、法学も、医学も、また要らんことに神学までも、容易ならぬ苦勞をしてどん底まで研究してみた。それなのにこの通りだ。可愛そうにおれという阿呆が、昔よりちっとも利口になっていないじゃないか。マギステルだの、ドクトルとさえ名のつて、もうかれこれ十年ばかりのあいだ、学生の鼻づらをひっ掴まえて、上げたり下げたり斜めに横に引廻してはいるが——実は我々になにも知り得るものでないということがわかってる。それを使うと、ほとんどこの心臓が焼けてしまいそうだ。

それはおれだって、やれドクトルだ、やれマギステルだ、学者だ坊主だというような己惚れた連中よりはましであらう。おれはいわゆる懷疑や疑惑に悩まされはしない。地獄も悪魔も恐ろしくはない——その代り、おれはあらゆる欲びをうばわれてしまった。」

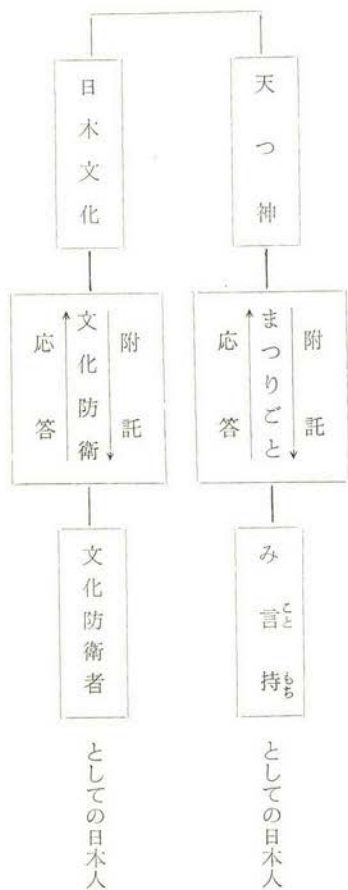
（ゲーテ作「ファウスト」第一部 夜・相良守峯訳）

こうして、ファウストの生きる喜びを求める遍歴が始まるのです。それは作者ゲーテの生甲斐探求にほかなりません。そして、その遍歴の最後、第二部第五幕で「自然よ、おれが男一匹としてお前の前に立てたら、それこそ人間として生き甲斐があるだろうに」という言葉がでてきます。この「生き甲斐」の原語を直訳すれば、むしろ「骨折り甲斐」といふべきものです。「男一匹として自然の前に立てたら」という、それができないのです。日本の場合、たとえば志賀直哉の「暗夜行路」の時任謙作の場合とよく似た場面です。この場面がどうして出来たかという秘密は案外知られていないのですが、それには次のような経緯があります。この点について、今は亡き富永半次郎先生のお教えを感謝しておる者です。

彼が亡くなる前の年、一八三一年十一月一日に、有名な言語学者のカール・ウイールヘルム・フンボルトにあてて、ゲーテが手紙を書きました。自分にはある不思議な精神的転換があつて、作品が出来上つたというのです。しかし、散文を弄する輩が下手に賞めそやすと大変だから封印にして、誰も読めないようにするというのです。フンボルトは一体どういうことだというのでおっつけ手紙を出しました。ゲーテからはなかなか返事がこない。翌一八三二年三月十五日、彼は体が悪くなり、十七日に小康を得て手紙の返事を書いたのです。十八日には死んでしまいました。その十七日付の最後の絶筆が凄いのです。

それはこういうことなのです。人間というものは、動物と同じように、いわゆる諸器官、ド

対応の図式



イツ語でいえばオルガーネ、生命器官によって動かされている。その点で動物と同じだ。しかし、同時に人間にはもう一つ、そのオルガーネに命じて、それを動かすものがあるということになった。そのオルガーネを動かすものが自然に動いてくる。それがあってはじめて書けたというのです。ドイツ人ですから、こういう分析的ない方をしていきますが、今までの心理学のシステムでは絶対とけない問題だということをしてゲートルが言っているのです。人間の人間たるゆえんは、オルガーネに命ずるものがある。それを得ようとして、人類は苦しんでいる。その問題が三島さんでも問題になっていたということを知ったわけです。

日本文化の伝統というものは、純真無垢に、あるがままに物を見ていくということです。それを三島さんは「文化防衛論」の中で展開しているのです。「文化防衛論」の核心の部分私は前の頁のように図示して見ました。長い文章をこのようにまとめてみたのです。

三島さんは文化の再帰性、創造性ということを行います。文化の再帰性とは、一種の伝統性です。それはちょうど、日本の文化があたかも神のように声を発して、「三島よ」と呼んでいるような感じなのです。伝統的な文化が声を出して呼んでいる。その声を聞きながら、その声に応答しながら、それに応えるという形で、同時にそこに創造の作業がある。その形は、右側の図の、天つ神の附託にお答えしていくみ言持ち（幸）としての日本人の行動形式と同じなのです。三島さんの文学はきわめて近代的で、ある意味では西洋文学の毒をいっぱい吸った人ですが、その三島さんにして最後の発想のパターンは極めて伝統的なのです。

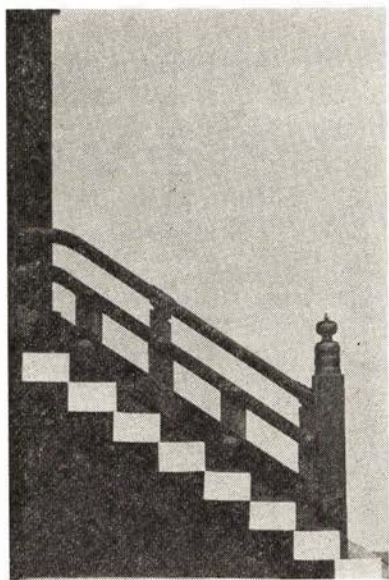
肉をはいで骨を見るといふ、一種ののぞき趣味が二十世紀の通弊だと批判されました。われわれはそういう通弊から脱して行きたい。NHKの子供の時間で、「おかあさんと一緒に」というのがあります。「おへその中には何がある。おへその中にはゴマがある。おへその中には何がある。おへその中にはシワがある」そんな唄を教える教育を子供の時からしたら、目に見えない生命の本質を人恐れかしこむVという精神は絶対に出て来ないでしょう。実に残念です。大変雑駁なお話で心が残りますが、これで一応終了します。

（国学院大学講師）

世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省

村
松

剛



日本の文化伝統の特殊性

「花」という言葉

日本人の死生観

敗戦後の日本の思想界―三つの神話

マルクス主義と近代化信仰

日本のうけている挑戦

(1) 国際的挑戦

(2) 時間と空間による挑戦

おわりに

日本の文化伝統の特殊性

みなさんここでは歌を詠まれるようなので、今日は歌の「花」ということを中心に、お話ししたいと思います。

いまご紹介がありましたように、私は国外に出ることが非常に多い。日本人のあまり行かないようなところにも、方々行っていきます。そういう場合に、感じるものが二つある。一つは日本は何といっても島国ですから、どうしても国際的な感覚に甘いところがある、ということですね。これは私、機会あるごとにお話ししていることですが、その方はあとで時間があつたら触れることにします。

もう一つは、日本の文化の特殊性の問題です。イザヤ・ペンダサンの「日本人とユダヤ人」あの本はベスト・セラーになりましたから、読んでおられる方も多いでしょう。週刊誌があの本の著者は、じつは私だという噂を流しまして、あんまりそういわれるので読んでみました。が、やっぱり私ではないことを発見した。（笑い）

その「日本人とユダヤ人」のなかに、日本人の生き方は「日本教」ともいうべきものだ、という一節があります。宗教と呼んでもいいほど特殊なものだ、ということですね。たしかにそうだろう、と思います。

言語的には日本語は、ウラル・アルタイ語系の一変種だといわれています。ウラル・アルタイは、西はヨオロッパに蒙古のフン族が樹てた一つの国、フィンランドとハンガリアから、東はエスキモーにいたるあいだに分布する言語系です。中国語は、これとはまったく別系統です。そのウラル・アルタイ語族のなかで、高度の文化をもちしかも工業化に成功した国は、一つしかない。それが日本です。また宗教的にいえば、世界の工業国はすべてユダヤ・キリスト教文化を奉じる国々ですが、日本はそのユダヤ・キリスト教文化圏に属さないこれも唯一の近代工業国です。

そういう言語的にも宗教的にも世界の主流からはみ出した民族集団が、小さな島国に二千年以上閉じこもってくらしてきた。本来はいろいろの地域から流れついできた雑多な人びとから成立っていたのでしようが、長いあいだに血が混りあい、一種の血族集団のような社会ができ上った。そのなかで高度に洗練されてはいるが、特殊な文化を、形成してきたのです。

私はこの春一月から約一学期間に亘ってカナダのトロントという大学に行つて、日本文学、日本文化の講義をしてまいりました。トロントというのは、ナイヤガラの瀑布のちよつと北にある町です。日本文化、日本文学を外国で教えるということは、それは、そういうことをやっている人は大ぜいいますけれども、想像以上に気骨の折れる仕事です。どうしてかと言いますと、相手が日本語を知っている場合にはそれほど不自由しません。ところが、相手が全然日本

語を知らないときは、英語ないしはフランス語の訳本をテキストに使って講義しなければならぬ。

そこでどういうことになるかと、たとえば額田王の歌に

君待つと我恋ひをれば我が宿のすだれ動かし秋の風吹く

という有名な歌があります。これには英訳があります。ドナルド・キーン氏の編集された訳本もありますし、もつと古い訳もあります。

わが宿のすだれ動かし秋の風吹く

そのすだれが、英訳で「バンブー・ブラインド」になっているのですね。すだれは英訳すれば「バンブー・ブラインド」そうには違いありません。すだけれども、「バンブー・ブラインド」という言葉から彼等が何を想像するかというと、大体マイクロネシアかどこかの島の野蛮人の掘立小屋です。（笑い）そんなものを風が動かしただけなんだというんだ、ということになる。仕方がないから映画だとかスライドを見せてなんとか納得して貰う。その辺はまだそれですむのですけれども、そういうことでは解決のつかないものもあります。

たとえば虫です。夏だというのに虫が鳴いている。川端康成氏の「山の音」でしたが、そういう一節があります。何も川端さんだけではなくて日本の文学に虫は非常に多く出てきますし、虫の音ときくだけで、ある情感を私たちは抱く、その「虫」というのが英語に訳しますと

インセクトです。インセクトは虫には違いないのですが、彼等の「インセクト」という言葉に持っているイメージは、害虫であります。つまり家ダニとか蛇とか蠅とか蚊とかいうものがインセクト、そんなものが鳴いているのならサッサとDDTをかけて殺してしまえばいいじゃないかということになるのです。(笑い)

それからたとえば花です。この花という言葉、これは日本文学史上に非常に大きな意味を持っている。西洋とはそこがちがうので、ギリシヤのホメロスの叙事詩は「イーリアス」と「オデッセイ」と、二つあるのですが、この「イーリアス」と「オデッセイ」には、両方とも自然描写というのがほとんどないのです。一般に日本人が行なってきたような自然に対する叙景は西洋文学にはほとんどない。絵でも日本画の大きな主題は、山水と花鳥ですね。そういう伝統は、西洋の美術館をどれだけ回ったって出て来やしません。西洋人が自然の風景を好んで描くようになったのは、むしろ一九世紀の末、印象派以降です。それまでの主題は、人間です。彼等もちろん花の美しさは知っています。西洋にも花屋はたくさんある。「悪の華」というポオドレールの詩集、それから、プウルストの「花咲ける乙女の蔭に」とか、花という言葉をつかった作品も少くない。しかしアメリカになるとそうはいかないのです。アメリカは何しろついでこの間出来た国で、明治まで西部劇をやっていたところですから、だいぶん事情がちがうんですね。英語で「ヴェジタブル」という言葉があります。「ヴェジタブル」のような生活をし

た」というと、何もしない退屈な生活をしたという意味です。「ユー・ヴェジダブル」というところはもう罵倒です。「お前は全く無能な奴だ」という意味です。そして花も「ヴェジダブル」です。日本人から言いますと、

花のいろはうつりにけりないたずらに我が身世にふる眺めせしみに

ここでは花は女の容色で、つまりエロティックなものまでも含めたいろいろな意味が抱懐されている。それを彼等に理解させるということはそう簡単なことではないのです。

これはついでに申し上げておきますが、現在の日本はご承知のとおり経済大国です。大変な経済力を持っている。世界中で日本の商社、日本の観光客の行っていない場所はないと言ってもいい。パリに行きますと「ノーキョウ」という独立国が



あると思っている奴がいる。(笑い) したがって、日本人とは何ものか、日本文化とは何かという関心が、どうしてもつよまる順序です。ところが遺憾ながら日本というものについてのイメージは世界的に言って小さい、あるいはないに等しいのです。ヨーロッパでは、もちろんインテリは別ですが、庶民となりますと、日本という国は支那とくつついているのか離れているのか、間に海があるのか、ないのかとたびたび聞かれます。それからお前の国は多分暑いのだろう。彼等から見ますと、後進国というのはみんな暑い国だという印象があるらしい。さっきの「バンブー・ブラインド」ではないけれども、そういう国だと思っている連中がいまだに少なくない。一般的に言って、日本について彼等がもっているイメージは、フジヤマ、ゲイシヤをそう多くは出ないのです。とにかくよくわからない。よくわからないから「ミステリアスだ」という。日本人はミステリアスを神秘と訳してほめられたと喜んでいられるのですけれども、実はあれはわからないという意味で、まさか「化けものの国」とも言えないからミステリアスと言っているのです。

企業に企業イメージというものがある。それと同じように国家には国家イメージというものがあるのです。その国家イメージというものが国際社会の中で非常に大きな役割を演ずる。たとえばフランスですね。フランスという言葉で諸君は何を思い出すか。たとえばおしゃれ、芸術その他でしょう。これはフランス人が何百年かかかってその文学、芸術を輸出してつくり上

げて来た国家イメージです。その先祖の努力のおかげで、いまのフランス人はどれだけ得をしているかわからない。フランスの現在の輸出総額の二割が武器です。つい昭和四五年の正月ですけれども、フランスがリビアという国に戦闘爆撃機を一〇五機売りました。フランスは中東戦争の当事国であるイスラエルには武器は売りません。イスラエルがミラージュの戦闘爆撃機を売ってくれとってお金まで払ったのですけれども、結局引き渡さなかつた。一方リビアには一〇五機売つた。これはちよつと具合が悪いと政府も思つたらしく、初めは二五機ぐらいと言つていたのですが、そのうちにバレて来て五〇機ぐらいといい、そのうちに一〇〇機、最後は一〇五機ということになった。私、その正月ですがパリに行つていたら、総理大臣がテレビでインタビューをしている。インタビューが総理大臣に怒つてゐるのですよ。「大体政府は嘘つきである。初め二五機とか言つていて、そのうち五〇機、一〇〇機、一〇五機……。その上聞いてみればリビアにはパイロットはほとんどいないそうじゃないか。四人しかいないというじゃないか。そんな国にどうして一〇五機も売るので。」すると総理大臣が、「四人なんてことはない。もうちよつといる、六人いる」（笑い）と言つていました。私はこれをテレビで見たのですから間違いありません。日本がもしそういうことをやったら大変です。それがフランスの場合だと、それほど問題にならない。世界で武器をもつともたくさん売つてゐる国は米ソに次いでフランスです。それでも比較的問題にならない理由の一つは、やはりフランスという

国が背景に持っている国家イメージでしょう。日本はさきほど申しましたように、残念ながらそういう国家イメージに乏しいのです。日本人が国外に進出して行く。その日本の巨大化の度合いと、日本についての理解度とのあいだの差が増大する。差が大きければ大きいほど日本人はそのぶんだけ誤解され、非難されることになるのです。それをなんとか縮めなければいけない。国の安全保障、これは軍事力だけで達成されるものではない、外交も軍事力も必要ですが、しかし、その外交の中に、実はいま申しましたように、文化、つまり国家イメージというものが非常に大きな役割を演ずることもまた忘れるべきではないと思います。

「花」という言葉

さきほど花ということを申しましたが、諸君はこれから歌を詠まれる。その歌のなかでこの花という言葉が非常に大きな意味を持っていることは、ご存じだろうと思います。ただし日本では花という言葉は、決してもともからのいい意味で使われていたわけではなかった。万葉集をずっと繙いて行かれると、花という言葉がいつ頃から出て来るかすぐわかります。柿本人麿にも花は出てきますが、しかし数は少しいし花そのものの讚美が主題ではなかった。山部赤人以後はそれが少しずつ変わってきます。たとえば例の有名な

あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとくいま盛りなり

奈良朝になりますと花という言葉は盛んに出てまいります。しかし、一般的に言ってそれより古い時代には、日本人は、花という言葉は実と対比いたしましたして、花というのはただのうわべに過ぎないというふうに考えていました。だから花妻と言ひますと、これは実質上の奥さんではなくて名目だけの奥さんです。こういう使い方は古今集の序文にまでつながっています。古今集というのは一〇世紀に成立した歌集ですが、序文は仮名序と真名序があります。その仮名の方の序文は紀貫之のものですが、その中に、近頃は世の中がだんだん變つて、「人の心花となりければ」という一節があります。人の心が花になる。われわれのいまの感覚から見れば、人の心がよくなったという感じがあるのですが、実は紀貫之がそこで使っている花は逆の意味なんです。人の心が実のないものになつてしまつてしまつて、実質のないものになつてしまつて和歌の道も衰えた、という意味です。

古今集では、花が二通りの意味をもつて使われている。実のないただの華美なものといういまの例と、もう一つはさっきの小野小町の歌がそうですが、美しいという意味と、その二重の意味に使われているのです。要するに過渡期でして、美しいものの代表としての花という概念が成立しますのも、同じ古今の時代です。

古今集から新古今集まで八つの勅撰和歌集があります。これはご存じのように、古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今とならぶわけです。勅撰和歌集というのは全部で二

十一ありまして、時代にしますと一〇世紀から一五世紀まで約五〇〇年に亘る。その最初のものが古今集であります。

古今集は後の勅撰和歌集の形式、構造をほとんど決定しています。全体を二〇巻に分けまして、——これは万葉も同じですけれども——春夏秋冬、初めに四季を置く。春は一番最初はまだ雪が降っている歌です。雪と一緒に出て来るのが梅の花で鶯が鳴く。それから桜を待つ。桜が咲いて、桜が散って今度は藤かなにかが出て来る。そういう季節のめぐり、それが四巻をもつて一巡する。こういう構成です。これは古今集をもって確立されたものです。諸君歌をやられるならぜひ古今集を読まれるべきですが、ここで花について申しますと、たとえば桜の花とか梅の花とか何の花ということ限定しないでただ花という表現が出て来るのも、これも古今集からです。ついでですが匂いもこのころから出て来る。

花は、これは本居宣長が言っていることですが、一般に桜の花です。しかし、細かく読んでゆくと桜の花ではなくて梅の花の場合にも花と言っている場面があります。とにかく「花」というだけで、ある美しさを古今集以後想像するようになった。

ただ、ここで問題は、花は散るものであります。いずれ散ってしまう。散ってしまうもの、無常なるものに執着するのは、いいことかどうか。当時の日本人に非常に強くはいつて来ていた思想に、無常感があります。世の中は無常であるという考え方、これは小林秀雄氏のことばに

よれば当りまえの動物的认识で、何も日本人の独占ではありません。西洋にもあります。

歴史家の父と言われている人に、ギリシアのヘロドトスがいます。ヘロドトスという人はペルシアとギリシアとの戦争の歴史を書いた、「歴史」という本の著者です。この「歴史」のはじめの方に、ペルシアの大王クセルクセスがギリシアに攻め込もうとして、いまのトルコのイスタンブールの反対側にウシュクダラという所、歌で有名になりましたけれども、その辺に軍隊を集結する場面が出てきます。これから海を渡ってギリシアに攻め込もうというので、大軍を丘の下に集める。全軍の鎧が陽光にキラキラ光っている。その大軍団を見てクセルクセスは涙を流すのです。脇に従っていた従臣がびっくりして、「大王、この目出たい日にどうしてお泣きになるのか。」とききました。当時のペルシアは大帝国です。ローマはまだ、それほど大きくない。ギリシアは都市国家の集団ですから小さい。西方世界最大の大帝國がペルシアでした。ペルシアの勝利は誰の目から見ても明らかに思われていました。実際には負けたんですが。「その門出の目出たい日になぜ大王は泣き給うや。」と従臣が聞いたのは当然でしょう。そうすると、クセルクセスがこういう返事をした。「いま目の前にいる大軍団のうち、ただ一人といえどもこれから何十年かの後には生きていないであろう、みんな寿命が来て死んでしまう。そのことを思うと無性に悲しくなって涙が出たのだ。」

古代のペルシア、ギリシアは、これは現世肯定の非常に明るい思想を持った民族でした。そ

ういう民族においてすらいま申しましたような世の儂なさ、人の世の無常に對するつよい認識があつた。無常感は何も、日本人だけの専売ではないのです。ただ、その無常感が、日本の場合仏教に支えられて非常に強いものになりました。キリスト教の西洋と、そこがちがうのです。

平安朝初期の無常感、これをごく簡単に言えばこういうことになる。現世のことはすべて前世によって、前の世の中での行為によって支配されている。たとえ、現世で榮耀榮華を極めている人たちは、これは前世でいいことをしたから、そのむくいがあらわれているのだ。だから、来世でいい思いをしたかったら、現世で美德を積んでおかなければいけない。

そうなのですが、しかし現世で何かいいことをしようと思つても、現世のことはすでに前世で決つていのです。前世のことは前々世で決つてしまつてい。六道輪廻ですからね。したがつて、現在何かしようと思つても、身動きが取れないのです。どうやったら身動きが取れるか。どうしたら輪廻を離脱できるか。それは、世の中のことに執着を絶つて、出家遁世して仏道に励む、それしかない。これがいま申しました輪廻の必然のチェーンから離れるためのみちだつたのです。

だから、花は美しい、しかし、花は世の中の様々なる欲望、野心、つまりは現世の美しさの表現です。花が散るといふことは、現世のむなしさを教えている。世の中は過ぎ去つて行くの

だというその無常観が籠められている。そうだとすれば、そのいづれ散ってしまふ花、つまり現世に執着するということはこれはおかしいことです。「散りぬればあとは芥となるものを思ひ知らずて惑ふ蝶かな」これも古今集です。花は美しいのだけれどもその花への欲望を断たなければいけない。それでなければ輪廻をこえられない。この二重構造が、古今以後の花という概念を支えて来たのです。

簡単に申しますと、花という言葉の中には、現世の美しさの象徴と、同時に無常なるもの、その二つのものはいってしまして、その二つの、ある意味では矛盾する概念の上に花という美が咲いていた。そういうえるでしょう。古今の時代にはそれらが矛盾したまま混在しています。「花の色はうつりにけりな」という歎きのうたと同時に、「散りぬればあとは芥となるものを」という歌がある、といったふうです。しかしその扱いは、その後変ってゆく。八代集というのは、古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今をさしますが、この八代集のうちで序文がついている勅撰和歌集は、四つだけです。古今と後拾遺と千載と新古今がそれぞれ。序文がついているということは非常に大きな意味があるので、その集によって新しい歌の概念を出そうという撰者の意気込みが序文となってあらわれ、序文のないものは、過去に選んだ歌の選び残しを集めたという感じが強いのです。

その序文がついている歌集だけをいま拾ってゆきますと、古今のあとに後拾遺がくる。後拾

遺になりますと、花にたいする見方がやや変ります。どう違つて来るかというとな、なるほどこの浮世は仮のものかも知れない、一瞬の夢かも知れない。それでもしかし花への自分の情熱は否定することが出来ない、ということですね。この世は無常であろう、しかし、——というその「しかし」という感じが後拾遺になつて来ると強く出てくるのです。

ここで和歌の歴史を細かくお話ししているわけにはゆかないので、簡単にしますが、それが更にのちの千載和歌集になりますと、——千載は平安朝の最後に出来たもので、ちやうど源平の争いのまった中に編集された歌集です——なるほどこの世の中は無常であろう、花というものは一瞬にして散つてしまうものであろう。そうであれば、だからこそわれわれは自分たちの花を美しく育てるのだ、美しい夢を咲かせよう。ごく簡単に言えば、そういう方向が出てまいります。後拾遺の時代には、「世の中は無常かも知れない、しかし——」でしたが、千載になりますと、世の中は無常であろう、無常であればこそここに美しい花を育てたいというようになる。「行きくれて木の下蔭を宿とせば花やこよひの主なるらし」これは平忠度の戦死にあつて残した辞世です。美しい夢に似た花を、人生をかけて咲かせたいという気持が、あらわれているでしょう。たとえば、三島由紀夫氏が最後に辞世を書いておられますね。

散るをいとふ世にも人にも魁けて散るこそ花と吹く小夜嵐

これも、世の中ははかなく消えてしまうものである、だからこそ美しい花をわれわれは育て

なければならぬのだ。それは一瞬にして散ってしまうものである。しかし、散るからこそ花は美しいのでそういう花を自分は育てるのだ。こういう考え方が前提になっていきます。後拾遺を経て千載に至って非常に強く出て来る美学です。

日本人の死生観

花とわれわれは簡単に申しますが、その言葉の背後にはいま申しましたような数百年に亘る文学の歴史があったのです。世の中は無常だという認識と、その中で、うたかたの夢にすぎない人生を、しかしかけ替えのないこの人生をいかに美しいものにするか、その模索の努力が、花という言葉を育てたのです。こうして成立した美学には平忠度の例からわかりますように、武家の思想の中へもはいつてまいます。

平家物語の中に繰り返して繰り返して来る言葉がある。それは「いまはかう」です。「見るべきものは見つ。いまはかう」と平家の武将はいます。この人生も自分の運命もいまはこれまでである。見るべきは見てしまった、いまはこれまでだと思つて潔く散ろう。そういうことですね。

平知盛は「いまはかう」といつて死にます。平家一門が次々に「いまはかう」とつぶやきながら死んで行く、その「いまはかう」が、太平記になりますと、「いまはこれまで」になります。

す。「いまはこれまで」というのは、自分の運命もいまはこれまでだ、じたばたしないでその運命を甘受して美しく散ってゆこう、それこそがこのかけ替えのない人生を美しい花とちる所である、ということでしょう。

江戸時代になりますとさまざまな兵法、軍学がさかんになります。その兵法の書をいろいろ読んでみますと、いちばん問題にしているのがやはりこの散りぎわです。武士たるものは、自分の運命の前にはジタバタしないできよく散らなければいけない。しかし、死に急いだら犬死になってしまふ。犬死は絶対に武士としては避けなければいけない。そういうことを説いているのです。死ぬべき時に死なないでジタバタしていたらこれはみっともないことになる。しかし、同時に死に急ぎ過ぎたら犬死になる。一番いい死場所を見つめる努力をしなければいけない。しかし、この選択を一瞬のうちにしなければいけないのですから、つねづねからそういう場合にはっきり行為をえらび得るだけの教養を、積んでおかなければいけない。そのためにも古今以来の歌集を読めということを江戸の兵法家たちはしばしば言っているのです。教養とはつまり平安朝の歌と物語だった。

日本の武家の伝統、いま申しました平家物語から江戸期に至るまでの武家の伝統の中には、実は古今から新古今に至る公家の教養が深くはいつているのです。したがってそのどちらかに偏しては日本文化というものを一方的に見ることになる。武家と公家の両方を見なければいけ

ない。かけ替えのない人生をいかに美しく育てて咲かせ、したがって散らせるか、その努力が日本人の歴史の中を貫いて来ています。

キリスト教にとっては、自殺は罪です。なぜかというところ、この世界は神様が作り給うたものである。自分の寿命も神が作ったものである。その寿命を勝手に縮めるということは神に対する反逆です。だから自殺はいけない。イギリスでは、自殺者はむかしは墓地に葬って貰えませんでした。最近のアメリカでも、マリリン・モンローという女優が自殺をしたとき、「ニューヨーク・タイムズ」は、自殺とわかるようには書きませんでしたけれども、自殺という言葉は使いませんでした。

漱石の「心」という小説があります。あの「心」という小説を読んだアメリカ人の学生が私の所に来て、「どうもよくわからない。」と言う。ご承知のように「心」の主人公は、自分がかつて友人を裏切ったという罪の意識に悩まされます。たまたま明治天皇が崩御され乃木さんが殉死する。この主人公は、これで明治の精神が終わったのだ、という印象を非常に強く抱きます。「私もまた明治に殉じよう。」、友人を裏切ったという罪の意識を清算するために彼は自殺をえらぶのです。それを読んだアメリカ人の学生が、わからない、と言う。「この主人公は、そんなに罪の意識に悩んでいるのなら、社会事業でも始めたらいいではないか。なぜ死ぬのか……」。たった二〇〇年ほど前に出来た出稼ぎ人の国で、ついこの間までカウボーイか樵夫

をしていた連中が多い。どうしても考え方が實用主義的です。もちろん同じ人間ですから絶対にわからないということはないのですが、しかし、育つて来た文化環境が違いますから理解に達するのに時間がかかるのです。

人生無常という認識は、洋の東西を問わずありました。大体私たち、親をえらんだわけではない。気がついてみたら生まれていたので。医学は発達したけれど、死をまぬがれることはできません。私もここにおられるみなさんも、遅かれはやかれ死ぬでしょう。地球だって、永遠ではない。太陽熱がさめれば地球上の生物はことごとくほろびます。かりに地球が消えたところで、そしてその上を這いまわっていたわれわれ人類が死滅したところで、宇宙の大きさからみればすみの方のケン粒が一つなくなっただけのことであり、宇宙の運航は変わらないでしょう。

そう考えてゆくと、人間というものはまことに果敢はかないものだし、広い意味での自然にたいして無力なものです。そういうことは動物は感じないけれど、人間は感じる。そしてそのはかなさに気がついたときに、宗教が、哲学が、はじまるのです。

ユダヤ・キリスト教の世界では、すべては唯一神ヤハヴェの意志によつています。この世界はことごとく神の意志の実現です。「はじめにことばありき、万よろづのものすべてことばによりて成る、ことばは神なりき」と、新約聖書の四番目の福音書、「ヨハネによる福音書」にありま

す。古来その解釈をめぐって、いろいろな議論がある一節ですが、「ことばは神なりき」とあることから、このことばは神の意志、とおきかえていいはずだと思います。人生のはかなさもまた、神の意志です。

どんなに辛いことも、すべては神の御心であると、一神教は教えます。いいかえれば神を信じることによってのみ、人間はこのはかなさに耐えることができる。信仰が、はかない人生に永遠の意味をあたえるのです。とくにこのことをもつとも劇的な形で示しているのが、キリストの昇天でしょう。人の子にして地上に降臨したキリストは、ゴルゴタの丘で十字架の上に息絶え、昇天します。キリスト教徒はその十字架を信じることによって、永遠の世界につながるこ

とができるのです。十字架は、地上と永遠とをつなぐ懸け橋です。

日本には、一神教はありません。天照大神は、各個人の生活のすみずみまで支配する、という意味での神ではありません。キリスト教徒は日本にもいますが、それは十六世紀以降のこと

で、文化の主流とはなりません。仏教は、むしろ人生のはかなさを、無を認識せよと教えてきました。一神教型の救済は、日本では、少くとも文化の主流としてはなかったのです。

だから日本人は、人生の意味ないし無意味さについてたえず考えることを強いられてきました。禅は、その一つのあらわれです。生のむなしさをもつとも端的にあらわれるのは死ですから、日本の文学は歴史的に死をたえずえがいてきています。源氏物語にはたくさんの死の場面

があります。ここで特徴的なことは、現世に執着をもたない「きよらかな」死が、とくに称讃されていることです。

各人の人生が永遠につながる地点が、死です。その死を、いかに美しくするかを日本人はたえず考へてきたように思われます。切腹はその儀式化でしょう。少々大袈裟な比喩を用いれば、キリストも十字架もたない日本人は、各人が永遠につながる十字架をつくろうとしてきた、ともいえるのです。

敗戦後の日本の思想界——三つの神話

さて、きょう頂戴しました題は、「世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省」という大変長い題で、したがってここで現代の日本の思想の状況に戻ってみなければならぬ。第二次大戦がおわってからすでに二十数年たちましたが、その戦後の思想界について前から繰り返し言うて来たことがあります。それは、戦後には三つの神話があった、ということですから。これを口にすればみなだまるほど盲信され権威をもったものがあつた。神話の第一は民主主義です。第二は平和です。もう一つは進歩です。この三つがあたかも絶対的真理であるかのように言われ続けて来た。教育の理想は平和と民主主義を守ることであるというふうなことが言われていました。私はとんでもない話だと思つていません。教育というものは人間を立派に

育てるのが目的であつて、人間の理想は民主主義なんていう政治体制をこえたところにあるはずです。民主主義が悪いと、私が申し上げておるのではない。ただ、民主主義も人間が作り上げた一つの制度にすぎません。いまから何百年か経つて、民主主義がいいか悪いか議論した場合に、いいと結論が出るとは必ずしも限らないでしょう。プラトンがその対話篇「理想国」の中で、人間の作る国家形態をいくつかに分けて論じています。プラトンが一番いいと考えていたのは哲人政治でして、民主主義はむしろ悪いもののほうにはいつていた。人間が作る社会である以上、絶対的理想的な社会というものは、これはあり得ないわけです。少しでも悪い部分の少ないものをなんとかして作ろう。民主主義も絶対なものではない。悪い部分がいまのところ比較的少ないと考えられている制度に過ぎないのです。チャーチルは、民主主義は欠点だらけの制度だが、しかしいまのところその欠点が比較的少ないのがこれなのだ、といいました。ところが戦後の風潮では、あたかも民主主義が絶対的なものであるかのように言つて来た。これじゃ徳川の封建制が江戸時代に絶対で、明治帝国がその次に絶対視されたのと同じで、盲信というものです。神話と私が申すゆえんです。

平和は、いいに違いない。いいに違いありませんが、平和は「平和」という呪文を唱えて成り立つるものではないでしょう。しかし、戦後の風潮としては、四つの島の中で「平和」、「平和」という呪文を唱えていけばそれでいいかのような、そういう議論が横行していました。だ

いいち平和は一つの政治的状态で、民主主義は政治的の制度です。教育がその二つを目的としたということが根本的な間違ひであると私は思っています。教育の目的が政治であつていいはずがない。平和という政治状態の実現が教育の目的であり、民主主義という政治制度の実現が教育の目的であるというようなことになったら、教育は政治に振り回されざるを得なくなる。実際に教員の組合運動は、政治運動になつてしまいました。

もう一つ進歩があります。進歩の具体的スローガンが近代化しさえすれば人間は幸福になれるのだ、といった具合でした。文学の近代化ということまで、言われたことがあります。文学の近代化とは何事であるか、と私は思うのです。近代化という言葉で私に理解出来るのは、たとえば台所用品の近代化、冷蔵庫を近代化しようとか、電気製品をよくしようとか。そういうことだけです。文学は鍋や釜や冷蔵庫じゃないんでありまして、そんなものを近ごろ風にしたからよくなるという保証はどこにもないので、紫式部の源氏物語を近代化したらよくなるのか、冗談じゃないのであります。しかし、そういうことが冗談としてではなく大まじめに議論されるほど戦後の日本では近代化信仰というものが強かつたのでした。

これは実は戦後に始まつたことではないのでして、明治維新のころから日本は欧米の列強に追いつき追い越せを、モットーにしてきました。また追いつかねば、生きのびられなかった。そういう日本人の願望が、いま申しました近代化すればすべてがよくなるのだという考え方を

作つたのです。あとの二つは、とくに戦後の産物でしょう。戦争に負けずとも、どうしたつて自信を失なう。とくに日本は二千年間負けたことがなかった。ヨーロッパという所は、年がら年中戦争をしてきました。戦争というものは勝つか負けるかどつちかなんで、負けることだつて度々ある。したがつて、戦争ズレしている民族は、また負けズレしています。また負けたか。それじゃあんまり損害の大きくならないうちに降参しておいて、力を貯え今度勝てばいいじゃないか……。

日本は負けズレしていません。二千年間の歴史で初めて負けたからそのショックはきわめて大きかった。負けズレしているヨーロッパでさえ、一遍負けずと、これというのもわれわれの歴史が悪かった、という議論が必ず出て来るのです。第二次大戦の初頭にフランスがドイツに負けましたときに、フランスを覆つた議論がそれでした。「これというのも、第三共和国七〇年の歴史が悪かった。」当時のフランスは共和体制としては三番目、それで第三共和国と言います。一八七一年に作られた第三共和国のその七〇年の歴史が悪かったからフランスは負けただのだ。これが当時のフランスを覆つていた議論でした。フランスみたいな国でさえそうでした。日本では二千年の歴史が悪かつたのだ、ということになつた。

更に加うるに、勝つた国は必ず自分にとって都合のいい歴史観で、世界を説明しようとしません。たとえば、徳川氏が豊臣氏を滅ぼしてそして天下を握る。その時徳川家がやったことは、

御用史家を動員して、豊臣家の政治がいかに悪かったかということの説くことでした。江戸を通じておそらくもっとも視野の広かった学者は新井白石です。その新井白石ですら、秀吉の政治がいかにひどかったかということを書いています。戦争に勝ったほうは必ず自分にとって都合のいい歴史観ですべてを説明しようとする。戦後のアメリカとソ連がそうでした。日本人は自信を失なっていますから、それを無条件で受け入れた。アメリカが持って来た民主主義とその史観を絶対化します。平和についても同じです。もうご迷惑はおかけしません、おとなしくしています、ということですね。

戦争でひどい目にあつたから、これからは平和がよろしいという感情がむろんあつたのですが、その「平和」が神話化した過程はじつに複雑です。昭和二十二、三年からソ連が行なひました外交政策が平和攻勢です。ソ連の伝統的な外交政策は南下膨脹政策で、これはロシア帝国以来一貫しているのです。実際は第二次大戦が終つた段階でスターリンがやったことは、まさにそれでして、トルコに対しては、ダーダネルス、ボスフォロスの二つの海峡の通行権と非武装化を要求しました。イランに対しては、ツラー党という共産党を使ひまして播さぶりをかけ、ギリシアではゲリラ戦を起し、ベルリンを封鎖し、更にイスラエルの独立を援助します。こういうソ連の一貫した南下膨脹政策は、ロシア帝国以来変らない。ソ連がインド洋に出て来たのは最近のことですが、米ソ間の対立がきわめて厳しくなるのは、昭和二十二、三年、ギリ

シアのゲリラ戦のころです。アメリカのトルーマン大統領は、その形勢を見て、初めてこれは放つてはおけないと考へた。そこでソ連に対する封じ込め政策を宣言する。これが有名なトルーマン・ドクトリンです。この昭和二十二、三年が実は第三次大戦の危機でした。アメリカが西ドイツにおいていたのは二箇師団ですが——あとで六箇にふやします——ソ連はこのとき東欧に百箇師団以上を展開していた。しかも同じ時期に、ソ連は平和運動というものを展開しています。その最初は昭和二十二年にワルシャワですが、ねらいがアメリカの核を牽制することにあつたのは、いうまでもありません。当時核兵器を持っていたのはアメリカだけであり、ソ連としては自分がつくるまでこのアメリカの核兵器を牽制しておかなければならない。そのためこういう運動をやるのですが、これが非常な成功を収めました。緊張をつくった張本人はソ連なのに、アメリカが諸悪の根源であるかのような印象をうえつけるのに、成功したのです。ソ連外交の傑作でしょう。日本は戦争はもうコリゴリだ、という気持があつたから、平和という言葉は非常に大きく日本人の心を惹いたのです。戦後の日本の平和運動を考へる場合に、このソ連の外交を無視することはできません。

いまから二十六年前にアメリカの軍隊が日本に来て行なつたことは、日本の弱体化政策でした。航空機工業の禁止、歴史教育の禁止、地理教育の禁止、歌舞伎のレパトリーから仇討ち、忠君愛国に類するものを全部外す、原子力工業の禁止、そういう一連の政策をとりました。こ

のアメリカの政策が戦後もしずっと続いていたら、日本の近代的工業化がこれだけ可能であったかどうかわかりません。日本の工業化がこれだけ可能になった大きな理由の一つとして、戦後のアメリカの政策の転換が挙げられます。

昭和二十五年に朝鮮戦争が起ります。さきほど申しましたように、昭和二十二年以後、アメリカとソ連の対立は非常に厳しくなる。特に朝鮮戦争が始まる。そうなりますと、アメリカとしては今度は日本を強力な味方として育てなければならぬ。そういうふうな政策が急転換した。これは日本にとっていいことだったのですが、中ソにとっては面白くない。日本がアメリカの強力な味方として育ててしまったら、これは、中共、ソ連にとって迷惑です。したがって中共、ソ連の指導者としては、なんとしても日本をアメリカから切り離したい。できれば自分の陣営にとりこみたかったでしょう。だから彼らはそのためにあらゆる努力をしました。彼らとしては当然の反応でしょう。サンフランシスコ条約反対、安保条約反対、日韓条約反対、要するに、アメリカと手を組みそうなものは全部反対、という戦後の日本の国内運動、これは中ソの外交政策と切り離して考えることは出来ないのです。つまりそれ以来日本は、好むと好まざるに拘わらずイデオロギー戦争の渦中におかれたわけです。日本は、アメリカと中共、ソ連の双方の奪い合いの舞台になった。そういう状態がずっと続いて来たのが戦後の状況です。したがって日本の思想界で大きな役割を演じ続けて来たのは、近代化という概念と並んでマルク

主義だった、ということになります。

マルクス主義と近代化信仰

マルクス主義というものが、知識人の中で勢力を獲るのは、実は十九世紀の末からのことです。フランスにレイモンド・アロンという学者がいる。このレイモンド・アロンに「知識人の阿片」という本がありますが、その中で彼は、

マルクス主義というのは一つの宗教であって、宗教が阿片であるといったマルクスの言葉を使えば、まさにマルクス主義は知識人の阿片である。

という意味のことをいい、さらに

十九世紀の末にキリスト教が非常に力を失ったが、それにつれて、ヨーロッパの中で、新しい世俗的宗教が出て来た。その世俗宗教がファシズムとマルクス主義です。

と説明しています。キリスト教が十九世紀の末にヨーロッパで力を失なって来たのには、一八五五年にフランスが制定した世俗教育法の影響が大きいのです。世俗教育法というのは、教育と宗教とを分離するという法律です。フランスにシャルル・ペギーという有名な詩人がいます。このペギーが、近代はいつから始まったのか、それは一八八五年、世俗教育法の成立をもつて始まった、ということを書いていきます。世俗教育法ができたということは、ヨーロッパの

知識人の間でキリスト教の力が弱まっていたことを裏書きしているでしょう。そうすると、知識人はそれに代る新しい宗教がほしい。その宗教の役割を演じたのが、一つはファシズムであり、一つはマルクス主義です。ただしファシズムは、一つの限界を持っています。民族主義的要素が非常に強いために国家を越えることが出来ないのです。だから、ドイツ、イタリアが戦争に破れると同時に、ファシズムの力は低落します。しかしマルキシズムは生き残りました。これは、マルキシズムが本質的に国境を越える力を持っていたからであり、また同時に、マルクス主義は一つの歴史宗教でありまして、ある面でキリスト教ときわめて似た性格を持っていたからです。そのこともまた、ヨーロッパの知識人には大きな魅力を添えたでしょう。

キリスト教はご承知のとおり、ユダヤ教から出たものです。ユダヤ教の歴史は古く、紀元前千年ぐらい、あるいはもうちょっと前に成立しています。それから今日まで続いているのですから、いろいろ歴史の変遷がありましてユダヤの宗教も一様ではない。ユダヤ人はある時期から、非常な絶望感に捉われました。世界の民族で大陸と大陸とのあいだの廊下に住んでいる民族ほど不幸なものはありませんが、ユダヤ人が住んでいたパレスチナという地域はまさにそれでした。片一方は海、片一方は砂漠で、アジアとアフリカとヨーロッパをつなぐ橋がありません。橋ですから、たえず異民族がとおる。ヨーロッパではスペイン、イタリア、ポーランドが、それぞれ北アフリカや東方への通路にあたっていて、たえず戦場にされてきましたが、い

ちばん人通りの多い廊下に住んだのが、ユダヤ人でした。周辺に強力な国家ができれば、必ず蹴散らされます。なにしろ弱少民族ですから、「これはもうだめだ」と思うに至ったのでしよう。そうすると、来世に希望をつなぐようになる。いまは苦しい、しかしいずれ、黙示録的時代アポカリプス時代が来て、悪い奴はみんな滅び、われわれは天国にはいれるであろう、これが、ユダヤ教のごく末期、紀元前三世紀、四世紀頃に非常に強くなった思想です。この彼岸信仰、来世信仰、それを受け継いだのがキリスト教です。キリスト教と言っても解釈はいろいろありますけれども、とにかく、この来世信仰はつよい。

そしてそれを更に受け継いだのが、マルクス主義です。いまは苦しい、けれどもいずれ革命の時代が来て最後の審判があって、無階級天国が訪れるであろう。その時に無階級天国にはいるのは、キリスト教ではキリスト教徒ですが、ここではプロレタリアートのみである。そして絶対にはいることを許されないのは、天国の存在を知りながらわれわれに協力しなかったユダヤ人、マルクス宗教では社会民主主義者である、ということになるのです。マルクス主義の中には、いま申しましたような形でのキリスト教以来の未来信仰、歴史の未来に対する信仰、つまり歴史主義というものが非常に強く脈打っています。このマルクス主義が、一つの世俗信仰として十九世紀の末葉からヨーロッパの知識人に非常に深く影響しはじめました。日本人にもこれが大正期に流入し、戦後はイデオロギー戦争を通じて組織的に拡大されました。知識人の

間には、マルクス宗教を信じない、つまり進歩的ポーズを取らないと知識人ではない、という奇妙な偏見さえ生れるに至ったのです。

このマルクス主義の歴史信仰のほかに、もう一つの歴史的信仰があります。さきほど申した近代化信仰です。近代という言葉そのものはそれほど珍らしくはないでしょう。藤原定家の「明月記」という鎌倉時代の日記には、近代という言葉がしきりに出てくる。これは西洋でも同じです。英語のモダン、このもともなったフランス語のモデルンは、ことば自体は十四世紀くらいからあります。しかしこれが近代化という言葉になり、さらに近代人というような表現をもって言われるようになったのは、十九世紀の末からです。新しいものがすべていいということから、近代化、近代人が特別な意味をもつようになった。日本では明治以後です。明治以来、日本は欧米列強に追いつき追い越さなければいけない、という非常に強い気持ちを持っておりましたから、それだけに日本では近代化信仰は急速に一般化します。先に行けばもっとよくなるのだ、未来はもっといいのだ、伝統は全部だめだ、こういう近代化信仰がここでは増幅されたのです。新しいものが、本当にいいのだろうか。一般に歴史の未来への信仰には致命的な弱点があります。それは現状無視です。歴史の未来信仰は、それが強力であればあるほど、自分たちの現在の人生そのものの否定に向っていくのです。

こういう信仰を、もう反省してもいいころでしょう。戦後の日本は三つの神話に支配されて

きたと、私はいいましたが、第一の平和、平和という呪文をとなえて、四つの島に居眠りして、それですむ時代ではありません。工業が発達して、生活が「近代化」して、それで日本人が幸福になったか疑問ですし、この点での反省は最近いろいろな形で起こっています。ハーマン・カーンは二十一世紀は日本の世紀といいましたが同時に彼は紀元二〇〇〇年のころには人間はその科学の力をみずからコントロールできなくなるだろう、ともいつているのです。

日本のうけている挑戦

最近日本の経済力が非常に大きくなって、世界中から注目を浴びるようになって、こればかりかえして申し上げるまでもないと思います。いまから一〇年前ですが、私がヨーロッパに行きました時に、「日本のGNPはどれだけか」ということをよく聞かれました。私は経済学者ではないけれどもそれで覚えちゃったのです。当時一九六〇年は一人当り三六〇ドルでした。それが一〇年を経た今日では、二〇〇〇ドルを超えている。三六〇ドルから二〇〇〇ドルですからこれは五倍以上です。その間に物価の値上がりがある、つまり貨幣価値の低落があります、それでも一〇年間に四倍ぐらいにはなっている。そんな経済成長を遂げた国は世界にはないのです。現在世界で一番ドルを持っているのは西ドイツで、二番目が日本で、三番目がアメリカで四番目がイタリーです。つまりアメリカを除けば日独伊がお金を持っている

る。(笑い) これは第二次大戦の枢軸国です。だから世界のどこへ行っても聞かれる話がある。ロシアと戦争して負けるとロクなことにならない、たとえばロシアは、チェコスロヴァキア、かつては工業国として鳴らしたチェコスロヴァキアから工業製品を持って行ってしまった代りに農産物をよこす。その比率が機関車一台とキャベツ一つである、(笑い) そんなことはまさかないだろうと思うけれども、そういうことをチェコの人は言うわけです。チェコからは現在までにソ連の侵略以後七万人の人間が逃げています。ハンガリーからは一〇万人逃げています。ロシアと戦争して負けるとたしかにロクなことにならない。

ところが、アメリカと戦争して負けるとどうだ、日独伊悉く金持になっているではないか。「ひとつわが国も金に困ったらアメリカに宣戦布告したらどうだろう。」「それはまことにいい考えだけれども、たった一つ心配がある。もし勝っちゃったらどうしようか。」(笑い) これは五、六年前から非常に流行している小話です。

(1) 国際的挑戦

日本の経済がそれだけ巨大化したということ、これは大変ありがたいことである、いいことなんです、そこで起って来るいろいろな問題があります。それは、一つには、国が大きくなればどうしたって国際的風当りが大きくなるということです。つまり、国際的挑戦をわれわれ

は受けなければならぬ。かつて日露戦争の時に、日本では、あれこそ祖国防衛戦争でして、国力を傾け尽して戦ったのでした。それを、陰になり日向になつて日本を助けてくれた国が当時二つありまして、一つはイギリスであり一つはアメリカでした。両方ともそれぞれの利害打算から助けてくれたのですが、アメリカの場合は感情的にも非常に好意的でした。アメリカの当時の大統領テオドール・ルーズベルトはポーツマス会議を開いて、日露戦争を收拾してくれたのですが、そのルーズベルトがいかに日本に好意を持っていたかを、当時日本政府からアメリカに派遣されていた金子堅太郎が書き残しています。東郷艦隊がバルチック艦隊を打ち破つたというニュースがはいった時に、ルーズベルトは躍り上つて喜んだそうです。その躍り上つて喜んだルーズベルトが、日本を仮想敵国と指定するまでに二年です。明治四十年に彼は日本をもつてアメリカの仮想敵国と規定しています。日本という国が小さい時には、周りの国は尊敬はしませんけれどもその代り警戒もしない。ところが、国が大きくなればトタンに警戒心が強くなる。これはやむを得ないところです。

ペルリの黒船来航以来日露戦争が終るまで、日本が願望として来たところのものはなんであつたか。これは、なんとかして欧米諸国の植民地になるまい、そして、国内に強制された不平等条約を撤廃するということでした。日露戦争で白人の国になんとかして勝つてやつと日本も世界の一流国になつたという気持を日本人は持ちました。これは近頃の日本人と、やや似てい

るでしょう。

ところが、やっと大国になったのだと思った日本人の前に待っていたのは、白人社会からの村八分です。アメリカはさつきも言いましたように明治四十年に日本を仮想敵国と指定し、そして、同じ明治四十年代にカリフォルニアで移民法を制定します。排日移民法です。人種的偏見に基づく法律ですが、それが後に全米に適用される。日本はそれに腹を立てまして、パリの国際会議に、人種的偏見撤廃の動議を出しますが、否決されます。この国際会議に出ている人が若き日の近衛文麿でした。近衛文麿はその日誌の中に、「世界に平和を齎らすには白人の世界支配を叩き壊す以外に道はない」ということを書いています。その近衛文麿が大東亜戦争までの首相であったこと、これはみなさんご承知のとおりです。

日本が強大化することによって、アメリカの中にもヨーロッパの中にも非常な警戒心が募って来る。それに対して日本は戸惑いを感じる。やっと自分も一人前になったと思ったら村八分になる。そういうことであるなら白人社会を叩き壊すほかにない。そこで、「アジア人のためのアジア」というスローガンが力を得る。それがのちに大東亜共栄圏論になり大東亜戦争になってゆくのです。この間の戦争の原因がそれだけだと申し上げようと思っっているのではないのです。歴史は複雑です。戦争の原因だっていろいろあります。しかしそれが大きな理由の一つであったことは否定出来ないと思います。

国力が大きくなれば、風当りもつよくなります。これは仕方のないことですが、最近はそのに加えてアメリカのドル・軍事力がいちじるしく低下し、そのために国際情勢が大きく変わってきている。その代表的なあらわれが、アメリカと中共との接近でしょう。今日は国際政治が主題ではないのでごく簡単に申します。私は経済学者ではないからよくわかりませんが、後進国というのは大い回り回っております。「この国の奴は靴を履いていないなあ。」という大体一〇〇ドル以下です。数年前のインドネシアがそうでした。ラオスがそうでした。南アメリカに行きますとハイチがそうです。ボリヴィアがそうです。一〇〇ドル以下という大体靴を履いていない。中共と言っても広くて、北京、上海周辺は昔から豊かな所ですからあの辺は履いているでしょうし、それから資本主義国と社会主義国とは違いますから、布靴くらい履いているかも知れませんが、実際に南に行くとなんか履いていないのが多い、そういう経済です。最近の新聞は、まるで日本が中共と結びさえすればすべてがよくなるかのように書かれています。北京に特派員をおかせてもらいたいから、中共に都合のわるいことは一切書かないのです。大体日本は中共との貿易でどれだけの未来があるか。ごく簡単に申しますけれども、中共はなるほど七億五千万か八億の人口を持っておりませんが、経済は非常に貧困で、一九六九年の中共の国民総生産は、国連推計によりますと、六百八十億ドルです。同じ時期の日本が約千六百億ドルです。一九七〇年は外務省推計で七百億から七百五十億ドル。日本が二千億

ル。国民総生産にしましても、中共は日本の半分以下三分の一くらいで、一人当りにしますと二十分の一になってしまふ。中共の一人当りの国民総生産は百ドル以下です。百ドル以下というのは、どういう生活かというのと、私の感じで言いますと、靴のはけない経済です。極端に貧乏ですから、中共の一人当りの貿易額は五ドルです。日本人は一人当り三百ドル以上です。だから、いくら人口がたくさんいたって、一人当り五ドルの貿易額では、五ドルで八億倍すると四十億ドルでしょう。貿易の総額にして四十億ドル。その四十億ドルの中で日本が中共とどんなに貿易をしたところで、それを全部日本で買ったたり売ったりするわけにはいかない。「貿易を全部おれによこせ」というのではそれでは属国ですからそんなことができるはずはない。大体一つの国がほかの国と貿易する場合に、特に共産主義国が資本主義国と貿易をする場合に、一つの国に三割以上のウェイトをかけるということはまずないでしょう。だから、四十億ドルのせいぜい三割で、十二億ドル。それが限界です。いまの日本と中共との貿易額は九億ドルですから、あと三億ドルしか残っていない。その三億ドルのために日本中が血相を変えている。おかしなはなしです。中共だつてやがて経済は向上して行くでしょう。いろいろな学者の説がありますけれども、甘い方の数字で年間六%ぐらいの勢いで上るだろうという説があります。六%を仮にとつて十年経つと一三〇〇億ドルぐらいになります。しかしその間に人口もいまの八億が十億くらいになるでしょう。一人当りはやっぱり百三十億ドルくらいで、貿易額も

四十億が五十億になる程度です。たかが知れたものです。

国家全体の次元に立って考えると、中共貿易の将来はそんなものです。もちろんその間に中共の経済体質が変わって、どんどん日本の工場を入れて下さい、ということになって来ればこれは話は別です。新聞が言っているような、中共と貿易すればすべてがよくなるなんてそんなバカなことではない。大体、中共を承認すれば直ちに経済関係がよくなる、そんなこともないの
で、現在中共と貿易している最大の貿易国は日本であり二番目は西ドイツです。両方とも中共を承認してはおりません。

中共の問題は、経済的にはたいしたことではありませんが、政治的には重要です。こんどの米中接近は、米中ともにそれぞれ理由がある。中共の方は、ソ連の脅威です。ソ連は百三十万の大兵を中共の国境に展開していると、周恩来はいつてもいます。ソ連がいつシナ大陸になだれこんでくるかわからない。北京としては背に腹はかえられず、アメリカと手を握ってアメリカの力でソ連を牽制することに踏み切ったのです。ほかに日本も日本の牽制とか台湾へのゆさぶりとかいろいろ理由はありますが、それが最大のものです。

アメリカの方は、一つの大統領選挙をまえにしたアクロバットです。しかしそれだけではな
い。アメリカの軍事力は低下して、海軍はソ連の方がいまでは艦艇の数が多いですし、核戦力も核弾頭の爆発力はアメリカが一とすればソ連五です。この差は今後ますます開いてゆく形勢

にある。中共は数年後には I C B M を完成するであろう。その場合もし米中対立になったら、アメリカはむろん中共を叩きつぶすでしょうが、アメリカ本土も中共の I C B M で若干の傷をうける。アメリカが怖いのは、その場合ソ連と対抗する力を失う、ということです。いまのアメリカは、往年のアメリカではありません。どうしても中共に働きかけ、中ソ間の敵意を温存しなければならぬ。それがニクソン訪中の、基本的目標です。アメリカは中共のまわりにつくった柵を開き、そのかわり中ソ間の対立を温存しようとはしました。これは中共も望むところで、両者の利害は一致したのですが、おかげで中共はアジアへの壁に突破口を開かれた。アジアで次に邪魔になるのは、中共にとっては日本でしょう。

ここで問題は、中共とアメリカが交渉する場合には、お互いに交渉する材料を持っている。たとえば核兵器、たとえば第七艦隊。中共も核兵器をもっています。お互いにテールの上に出すカードがある。それをバーゲンの材料に使いながら彼等は話を進めるでしょう。日本は軍事力がないのです。テールの上に置くカードがない。だから日本の外交というのは、どうしてもセールスマン的なになってしまふ。「どうぞ手前どもの物を買って下さい。」としか言いようがない。かつて池田首相がパリに行つてドゴールに、「一国の宰相が来るかと思つたらトランジスターラジオのセールスマンが来た。」と言われたという話があります。現在でも国際政治への発言力の大きな部分を軍事力が占めておりますから、どうしてもセールスマンになるの

です。セールスマンは中共に行つて土下座している。いままでは、日本はアメリカの庇護下に
 いることが出来た。ところが、これからはそうはゆかないでしょう。アメリカの庇護をいつま
 でも期待出来ない。日本を犠牲にして中共と取引することだって、時にはあり得るかも知れな
 い。そうすれば、日本は独力で生きなければならぬ。ところが日本には軍事力が無い。どう
 したらよいか。一つのみちは日本が、軍事力をもつことでしょう。しかしこれにはいろいろな
 意味での困難がともないます。日本の政治構造に、軍事力をもつた場合必要な責任能力がある
 か、ということもあります。軍事力なしに生きようとすれば、これは荒くれ男の中に女がひと
 りでとびこむようなものですから、身を守るには手練手管しかありません。弱い動物ほど奸智
 に長けなければいけない。もし日本がほんとうに中共と取引をしようと思つたら、モスクワと
 取引きしてその圧力を借りるのです。ソ連はいやな相手です。なにしろ欲張りで、まことに
 気に入らない相手ですけれども、しかし日本が生きて行くためには、アメリカが必ずしも頼り
 にならないとすればソ連と取引することも考えなければならぬ。そういう狡智がこれから日
 本には要求されます。日本は戦後占領ボケでまだ少しボケておるところがあります。戦後二十
 数年、世界の波風に本当に身をさらしてきていないのです。国際情勢に対する認識は甘いし、
 悪智恵は発達しておりません。しかし、いまぐらい狡智を必要とされる時期はない。平和の呪
 文では、国は生きてはゆけません。

(2) 時間と空間による挑戦

われわれがうけている挑戦は、国際的挑戦だけではありません。時間的にも空間的にも精神的にも挑戦を受けている。時間的挑戦というのは何かと申しますと、この十年間で経済が少くとも四倍になっています。経済が四倍になるのに昔だったらどのくらい時間がかかったか。学者によっては、有史以来今日に至るまでの発達とこの十年間の発達とは同じくらいだということとを言う人もいます。それではあまりにも茫漠としてるので、仮に一つの尺度を作ります。源氏物語が出来た頃、すなわち十一世紀の初頭ですが、日本の人口が五、六百万だったと推定されます。この人口が四倍になるのにどのくらいかかったかというところと四〇〇年かかったので。織田信長が本能寺で殺されたところが千八百万といえますから、十一世紀の初めから十五世紀までの四〇〇年かかって四倍ならず。当時は、人口がふえるためには農業生産力がふえなければいけなかった。農業生産力以上に人口がふえたら餓死してしまいます、食糧の輸入というものがないのですから。事実これらの人口推定は、農業生産力から逆算したものです。当時の経済は農業生産力が中心ですから、結局、人口が生産力全般のある意味での尺度になるので。そうすると、十一世紀から十五世紀まで人口が四倍になるのに四〇〇年以上かかったというところは、生産力が四倍になるのに四〇〇年かかったということと。ところが、最近の十年

でわれわれは日本経済を四倍にしてしまった。四〇〇年間でやった。昔の十一世紀から十五世紀までの四〇〇年は、その間に鎌倉幕府の成立があり、南北朝の戦乱があり、応仁の乱があり、浄土宗、浄土真宗、禅宗、日蓮宗と新しい思想の興隆がありました。それだけの事件を含む四〇〇年をわれわれは十年で走りすぎたのでして、言い換れば年速四十年で飛んでいるのです。われわれがジェット機に乗っているときに、お前は音速と同じ速さで飛んでいる、などと云われても実感としてわかりません。新幹線でもそうです。降りてみなければわからない。社会だって同じなんで、ほんとうはわれわれはどれだけのスピードで飛んでいるかということ降ってみなければわからないんですけれども、しかし、社会だけは降りてみるわけにはゆかない、降りるということは死んでしまうことです。したがって、ある数字に頼るほかない。数字に頼りますと、いま申しましたように少なくとも年速四十年で飛んでいることになり。大げさなことを、とお考えになるかも知れませんが、たとえば、万博あるいはオリンピック前後の東京、大阪の変貌、一年間か二年間で見る都市の変貌の速さは、昔だったら人間が一生かかって見る変貌よりもっと大きかったでしょう。それだけのスピードで飛んでおきますと、思想体制が社会の動きに合わなくなつて来る部分の出て来るのは避け得ないことです。こういう場合にはよほど弾力的な思考が必要であります。十年前に革新的であった思想は、いまでは四〇〇年前の古色蒼然たるイデオロギーに変わっている。私が時間的挑戦と申し上げ

げたのはそういうことです。

空間的な挑戦——日本人は歴史始つて以来、人口の大部分が大小の都市に住むという初めての経験をしているのです。昔は大いの人間は農村に住んでいました。都市人口は非常にわずかでした。ところで都市は、モツブの温床になります。モツブということは、これは野次馬、衆愚のことですが、モツブという英語が出来たのは、十八世紀です。それ以前だつて都市はありました。あるんだけれども、イギリスの産業革命で技術者、労働者による新しい近代都市が出来たのが十八世紀です。その都市の発生と同時に、モツブということが出来たのです。

農村にはよかれあしかれ生活の共同体というものがありますが、その農村がブルドーザーでこわされて、住居は都市のコンクリート製の長屋に住みます。孤独ですし刺戟はつよい。感情的に不安定な集団が、ここに発生する。アメリカのある社会学者が、アメリカの民主主義は危機にあると申しました。なぜかという、アメリカは国民の大部分が都市に住むという有史以来の経験をしている。そうになると、民衆の心情が不安定になる。モツブによって国が支配される危険があるということ、言っているのです。同じようなことが多かれ少なかれ日本でも言えるのでしよう。さしあたりゲバ学生とかべ平連とかいうのは、モツブの典型です。私が空間的挑戦と申し上げたのがそれです。

かつてドゴールが、学生騒動の激しかった時こういうことを言っていました。われわれは、

われわれの父祖に比べて衣食住のあらゆる面ではるかにいい生活を享受している。これは科学技術の発達のおかげである。しかし、その同じ科学技術の発達が、フランスが古代以来持つて来た社会的、道徳的、哲学的枠を破壊しつつあるのだ。それをどうやって再建するかがこれからの課題だ、そういうことを言いました。

私たちは、そういう時代に生きています。これに對してどう対処するかですが、私はここで何かすべてが解決できる呪文のようなものを、申し上げようとは思いません。そんな便利都合な解決案が、あるわけありません。たった一つの呪文ですべてが解決できると考えるのは精神の弱い人でしょう。社会はいずれにせよ人間のつくったもので、つねに弱点だらけです。理想の社会なんか、永遠にあり得ない。根気よく弱点をさがして、一つ一つなおしてゆくほかないのです。飛行機の乗り心地がわるいのなら、どこがおかしいかをしらべて設計図をひきなおすほかありません。その努力の上に、航空機の発達がある。社会も同じです。気にいらなから爆破しろといっているのがゲバ学生で、あれは赤ん坊のたわごとです。

おわりに

ただ私はここで、おわりに一つだけ申し上げておきたい。はじめにいいました「花」です。私たちは親をえらんだわけではない。気がついたら、生まれていたので。また医学がどん

なに発達しても、死はさけられないでしょう。私も皆さんも、遅かれはやかれ死ぬのでして、百年後に生き残っている人は、この席にだれもいないでしょう。地球だって、いずれは亡びる。そのときには、地球上にうごめいている人間も死にたえます。地球という小さなケン粒のような惑星が消えたからといって、宇宙の運行に変わりがあるわけではありません。そう考えてゆくと人間はじつにはかない、無力なものです。動物はそんなことは考えませんが、人間はそれを考える。そしてそのことに気がついたときに、哲学が、宗教が、はじまるのです。人間のはかなさ、ひろい意味での自然への人間の謙虚さ、これが人間の自己認識の前提でしょう。それを見失うことは、人間が自らを見失うことにひとしい。

フランスに、ガブリエル・マルセルというカトリックの哲学者がいます。彼は何度も日本に来て、日本についていろいろ書いていますが、いちばん感動したのは伊勢の皇大神宮だったそうです。ここには人間の謙虚さが、沈黙をもって表現されている、とマルセルはいつています。「これこそがこの科学技術の時代の、聖なるものである……。」

マルセルはカトリックで、べつに神道とは関係ありません。伊勢の皇大神宮にかぎらず、彼のこのことばのあてはまる場所は、日本には多いでしょう。謙虚さは、日本の文化の中心に位置するものでした。自然を征服するという荒々しい意志とは正反対のものであり、したがって自然科学の発達には有利ではなかった。しかし近世以降、明治維新以降の人間は、自然を征服

せよ、生活を便利にせよというスローガンの下に、あまりにも謙虚さを、見失なってきたのではないか。

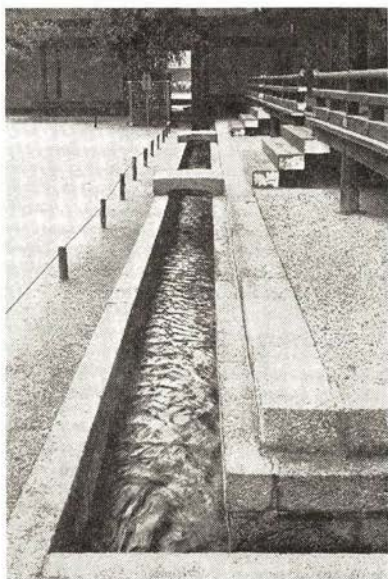
無常なる人生をありのままに認識し、その流れの中に一点の花をおくことが、日本人のつちかかってきた美学であり哲学でした。般若心経にいう空即是色、色即是空は、その機微をさしたことでしよう。人生への謙虚さなどというとはなしが抽象的になります。たとえば歴史をマルクス主義でも何でもいいですけど、一片の公式で片づけようとする。これは歴史への傲慢さです。歴史はそんなに簡単なものではない。GNPが上げれば人間が幸福になると思うのも、人生への傲慢さです。近ごろのジャーナリズムは、性教育を行なうことが人間幸福のみちだなどと書き立てますが、冗談ではない、そんなことだれがきめたのだろうかと思えます。性なんて、そんなに簡単ではない。性の問題がそんなに手軽に片づくのなら、人類数千年の芸術も哲学もいりません。

人生への謙虚な眼が、すべての出発点だと思います。大きく動いてゆく時代であるだけに、その出発点をもう一度ふりかえっておく必要があるでしょう。これは日本人がこの「近代」の破産が云々される時代に、世界に貢献し得る視点でもあるのです。

(文芸評論家)

世界の転機と東洋思想

木
内
信
胤



世界の転機——三つの大きな事件

日本の現状

現実の国際政治問題三件

(一) 日華協力委員会

(二) 日韓協力委員会

(三) 国連と中共の加盟

△質問に答えて▽

台湾の独立運動

中共の国連加盟

日本文化の役割

自分は何をなすべきか

日本国憲法

清涼殿前

世界の転機——三つの大きな事件

いま世界は大転機にあると思います。私の見方からしますと三つの大きな事件が起りつつある。その一つは、アメリカですが、まさに「急転落」という言葉で呼びたいほどの転落ぶりを示している。三年・四年前からそれが急に表面に現われ出した。それが一つ。それから、次がソ連と中共との問題です。ソ連が無力化し中共との間に分裂が起ったのは大分前ですが、その後ソ連は立ち直りかけたように見える。一方中共は何を思ったかその外交態度を変えて、日本や韓国を直接に目指した策動を始めた。これら共産主義国の動きが第二の事件ですが、大きく見て、共産主義というものはイデオロギーとしては既に死滅したもので、それにみんなが気付いていないだけのことです。これらに対して第三の大きな転機はわが日本で起っている。

それはこの合宿でも前に申し上げたことですが、明治以来の日本は常に自己を過小に評価してきた。特に敗戦後はそれがひどくなった。ところが、そう思いつめていた日本人が、人に言われ、数字を見て、「おや、そうじゃないらしいぞ」と気が付き始めた。数字に出るのは主として経済の分野ですが、人間が偉くなければ経済も伸びませんから、日本人にはどこか人間的価値があるに違いない。そういうことに気が付いて来たのです。その話をしたのが二年前の合宿でした。そのとき、その評価替えは二年位で済むだろうとお話したのですが、その評価替え

が済みますと、すぐ出て来るのが「なぜ」ということの探求です。第一に、なぜ偉いのだろうかというのが一つ、もう一つのなぜは、偉いに拘らずなぜだめだと思って来たのだろうかという問題です。その評価替えは、私の予想どおり昨年の夏には、大体のところ済んでいると思う。だがその「二つのなぜ」の探求のほうはまだまだです。しかし一年ぐらいのうちに出来ないと、せつかくそのなぜがわかって、あまり役に立たないことになる。その反対に、このなぜが、深く正しくわかってくれれば、これはすばらしい日本の誕生になる。こういうことになって来たのが、世界の大事件なのです。今日の村松先生のお話にしても、私には全くのところその解説を下さっているように聞けるわけです。「花」というもの一つを把えてみましても、あのように深い意味をもって、花というものを昔から眺めて来た民族はいないでしょう。ああいうお話は、日本人がいかに特殊であるかを、そのものズバリ説明していると思います。われわれはこれまで、今の迷える世界・ヨーロッパが作り出したこの大文明、物量的な科学技術文明、それに夢中になってきた。ところが、ヨーロッパもおかしくなる、アメリカも転落するということと世界中が俄然として奇妙なことになってきた。この時に、その迷える世界との対比において、日本が新日本として誕生してくるならばそれは、まことに世界の大事件と言わざるを得ないので。もしその新日本の誕生がうまくゆけば、ここに新しい文明が出て来ると言

ってもいいように思う。これが私の考えている「世界の転機」なのです。

ところが、日本がそういう大切な世界的な役割を担当しようとしているその矢先きに、中共によって今えらい邪魔が入ろうとしているのです。それに負けたらだめです。彼が武力を用いるなら、こちらにも武力がなければいけないし、彼が奸計を用いるなら、こちらもそれを見破って対抗する能力がなければなりません。しかし本場の勝負は、彼と同じ次元でつくものではないでしょう。従ってわれわれは、一段上に出ればいいので、そうすれば、マルキシズムはすでに死んでいるということもわかるし、中共のような国が長く続くはずはないことも明らかにするはずです。ですからこれは、驚くことも騒ぐこともない問題ですが、しかし当面は日本は実に危い。だが転機というものは、いつもそういうものでしょうね。よくゆけば素晴らしいかわりに、間違えばメチャメチャになる。ともかく世界の動きを見ていると、実に面白い。面白いのは目が開いていないからです。

日本の現状

ところで日本国ですが、明治以来の日本は、確かにすばらしい日本です。しかしこの日本は欧米に追随し、殊に終戦後は、全くのところアメリカに追随してきたので、すばらしい日本であると同時に、曲った日本であるのも、また事実です。従って日本は、常に危機にさらされて

いる。例えば現代は、議会制民主主義が政治の看板になっていますが、議会制民主主義というものはアメリカでもイギリスでもうまくゆかないようになって来た。チャーチルは「ほかのやり方よりはよっぽどいいから、これでやるんだ」と言ったそうですが、そんなことで安心していたら全然だめだと思います。どこが悪いかと言えば、選挙で民意を聞いて政治をやると言いますが、第一に何年かに一度の選挙ですね。その際各政党は政策を国民に訴えて、民意を聞くと言ってるけれども、実際には民意の聞きようがないのがこの頃の世の中です。中共問題、医療問題、米の問題、大学問題、問題はたくさんありますが、それをコミにして選挙の時にワゴンと訴えられる。それを国民がわかって投票しているのではないことは明瞭です。ですから、民意による政治という言葉には嘘がある。この嘘を長くそのままやっているから、反体制の動きが活潑になってくるのです。ですから今後、いまの体制が崩れてゆくのは当然ですが、事態が更に悪化して行けば、「これは大変だ」とまじめに考える人が現われて来る。その人達が実際運動をしてある基盤を作る——そうなって始めて、直つてゆくのではないかと思いません。それがだめならば、どうかすると折角新しく誕生すべき日本も誕生し損うということになってしまふでしょう。

いまの日本には、アメリカにある悪いことはみんなある。現在アメリカでは、法的秩序に対する信頼感が怪しくなっていると見ていいと思いますが、日本にもその気配があり、アメリカ



に違法ストがあれば日本にもある。つまり日本は、アメリカと同じ悪を全部持っている。ただ人種問題だけがない。一応そう言えると思います。が、ただその悪というものが、日本ではアメリカほど強くは出ないのです。それは何故か。もつともアメリカは近代ヨーロッパ文明のチャンピオンですから、現代文明の悪をまともに受けている。歴史は浅いし、寄り合い世帯ですし、国は大きすぎる。物質偏重になってしまった。そのアメリカの悪いところを、仮りに十とするなら、日本は二か三しか悪くない。どれを見ても程度が軽いのです。なぜなら日本では、押えが利いているからだ、と私は思う。その押えはどこから来るか。無自覚のうちにも日本人がもっている「東洋文明」というものから来るのです。日本はなぜ悪さの程度が二か三で助かっているかという、西欧文明

のほかに東洋文明を持っているからだと言っている。これが日本の未来というものを予測せしめる基礎で、現代を救うには、どうしてももう一度「東洋文明」というものが出てこなければならぬと思うのです。しかしそれは西欧文明に対抗するものとしてではなく、すなわち、西欧がだめだから東洋、というような形ではなく、両者が融合した新しいものとして出て来ることになるだろう。そうでなければ本物ではないと考えます。

ではその東西両文明の融合ということを頭におきながら、我々はこれからどうしたらいいかといえば、理屈を考え、知識をふやすのもいいが、その際、それを自分の実践によって体得するという態度をとらなければいけない。その体得が伴わなければ、ただ言葉で知っただけのものではほとんど役に立たない。だからいつかもし上げたように「知識はあんまりないほうがいい」「かえって邪魔になる」、ということにもなるのです。これが現在は転機である、ということのあらましで、実は前にも申し上げて来たことの復習みたいなものです。

ところで、今日のお話は「世界の転機と東洋思想」ということになっています。以上で「転機」を説明しましたから、これから「東洋思想」の説明に入るところですが、みなさんのお手許に、私の書きましたパンフレット「社会科学方法論」を差上げてあります。私からみますと、そこに書いてありますことが、それが東洋思想だ、というべきものであります。勿論ひ

と口に東洋思想といつても、その内容は多岐多端、従つて説明の仕方も千差万別たり得るのだが、このパンフレットに書いてあることが、そのものズバリ東洋思想だとわかつて下さるならば、それもひとつの東洋思想の説明だと考えて、今日はこのパンフレットの説明をするつもりでした。

ところが、ここへ来て考えを変えました。これは、いま申したことを申した上なら、読んで下さればわかることですが、いま、まだそれを読んでいない皆さんに、読みながら話すということは、あまり能率の高いことではない。それよりも今日は、全く別な話をしよう。その話というのは、ニクソンの中共訪問発表以来、アジアの形勢は全く変ろうとしている。そのなかで私の関係している仕事に「日華協力委員会」「日韓協力委員会」というものがある。これが周恩来から目の仇にされているが、新聞が書いてくれないから、これらの委員会が何をやっているか、皆さんは全く御存知ない。

そこで今日は、この委員会の話をしよう。そしてそれに加えて国連の話も少ししよう。これは現実の国際政治の生きた実例、それを知って戴くことは、それ自体非常にいいことだと思ふし東洋思想の説明も、そのなかにないわけではない——と、このように考えましたので、「東洋思想」の説明の方は、まづパンフレットをお読みになつて、その上で御自分で考えて戴くことにいたします。

現実の国際政治問題三件

そこで話を全然変えまして、今年の七月に行われた日華、日韓協力委員会についてお話ししましょう。協力委員会は、台湾とはすでに十六年間やって来たのですが、日韓のほうは、外交の正常化が出来てまだ三、四年にしかならないが、その後においても日韓の間は、政府レベルで話し合っても、民間レベルで話し合っても、大体全部喧嘩別れに終るような非常に悪い状態だったのです。そこで日華の方でやっているのと同じようなことを、（これは大いに効果を収めたものですから）日韓の間でもやろうということを決めて、一昨年二月東京で初の総会をやり、今年の二月にはソウルで行った。ほかに常任委員会というのをすでに六回やりました。初めの頃の韓国人の日本に対する感情は実に悪かった。だから一緒に仲好く相談しようなどという会に入ることになれば、その人の位置を危くする、という話もあった。「しかし、これはどうしてもやらなければならないことだと思ふから、あえて参加したのだ。」という話をした人もありました。ところが、この頃は非常に変わってきた。いまは驚くほど感情的によくなったのです。これは韓国の経済発展がすごいということだけでなく、われわれの努力の結果も少なくないと思うのです。

さて、皆さん御存知の通り、二年前から周恩来が日本に対して外交攻勢を始めました。日本

とアメリカとの間を割こうとしているのでしよう。その周恩来が日本を目の仇にするのに、絶好の材料が一つある。それが日華、日韓協力委員会なのです。彼は日本を共産化しようとしている。日米が争うようになれば、もって来いなのです。そういう狙いを持つ外交攻勢の目標に最も格好なものとして、わが日華、日韓の協力委員会が浮び上がってくる訳です。

（一） 日華協力委員会

その日華協力委員会の常任理事会が今年七月二十七日から二日間にわたって東京で開かれました。会長さんには、商工会議所の会長だった足立正という方、それに顧問として岸信介さんに働いて貰っている。この岸さんの演説が一番重要性を持つわけです。

さて一昨年台北で行われた総会で、岸さんは朗読演説で四十分という大演説をされた。世界の大勢を説いて、「これからわれわれも大いに行動的にやろう」という言葉で結ばれた。行動的といっても、本土反攻に直接手助けするわけにもいきませんから、思想的な宣伝活動、あるいは新しい思想を打ち出すこと、そういう活動になるわけです。それで共同声明には、そのようなことを何ヶ条かあげて、その最後のところで、韓国もふくめてわれわれが中共の周辺において、一致して繁栄してゆくならば、中共は自ずから崩壊するであろう。中共の国是であるマルキシズムというのが既に間違っているのだから、アジアの周辺の事情がそういうふうに変展

すれば、中共は必ずや「土崩瓦解」するにちがいない。「お互いにガッチリ手を組んで、そういう状況を作ろうではないか」ということを書いたのです。この共同声明が周恩来を、いまのように日華協力委員会を目の仇にすることにしたのでしよう。

さてそれはまる二年前の話ですが、今度の七月末の日華協力委員会の常任委員会ではどういう話をしたかと申しますと、アメリカは今迄の中共封じ込めの態度を変えて、中共を国際社会に引き出そうとしている。従って場合によっては、安保理事会の常任理事国という位置を中共に奪われるかも知れない。台湾に取っては形勢は非常に不利です。国連は多数決の場ですから、多数で決められたらどうにもならない。これは防げない。防げない以上は、むしろ中共を国際社会に引き出すという方針に変えた方がいいのではないか。もっとも、この考え方はわれわれの大分前からの主張なのです。だがその場合、台湾のあなた方は、ジッと我慢して、どのような事態になろうとも国連を脱退しない方がいいですよ、脱退してくれては困る、というようなことを我々は熱心に話した。そんなことで一日目は終わった。二日目は経済問題をやったのですが、これもなかなか優秀な会でした。

この会議には張群という人が来た。非常に有名な人で、いま蔣介石の秘書長という位置で、台湾政府の最有力の人ですが、もう八十何才です。この人が日本に来て、佐藤さんとは二回にわたって二時間以上の会談をやっていますし、いわゆる親中共である藤山愛一郎とか三木武

夫というような人も、漏れなく訪問しておられます。そういうところが、この期に及んでも決して短気を起さない、つまり、長年政治的試練を積んだ民族であるということをお現わしていると思います。この張群さんは七月二十九日には、天皇陛下に拝謁しておられます。新聞には出ませんが、大切なことなので心にとめておいて下さい。

さらに、もう一つ面白いのは、台湾政府の人達は、この難局になっても全然悲観していないということですが、そのことを内容としたスピーチを、会議の席やほかの席で聞きましたが、それは相当な迫力でした。「なるほど」と思いました。今年は亥の年ですが、正確には辛亥、孫文の辛亥革命のあったのが丁度六十年前です。彼らは「辛亥革命以来六十年、自分たちは一日として安閑とした日はなかった。絶えざる苦闘の歴史だった」「われわれはその間、何度か非常な危局に遇った。その一つは日本軍が重慶に迫るように見えた時、他の一つは中共に負け始めた時。その時アメリカは愚かにも、わざわざ『白書』を出して蒋介石政府はだめだ、墮落している、貪官汚吏の巢だというようなことを言った。この『中国白書』が出た時、これが実に辛い時であった。それらに比べれば、今度の如き事態は、辛いことのうちには入りません。だから、どこまでも頑張ります。どうぞ忠告もしてほしいし、一緒に行動もしてほしい」というようなことを話すわけです。そんなことがあったのが台湾との会合ですが、そういう実践の場で彼等と触れ合うからこそ、彼等の心情もわかってくるし、ものが見えてくるので

す。

(二) 日韓協力委員会

その翌日、七月二十九日から三十一日まで日韓協力委員会の、これは総会が行われました。昨年、日、韓、台は三国で一緒に連絡会議を持つという事になっていたので、今回はそれを表面には出しませんでした。日華協力委員会の翌日が日韓協力委員会で、張群さんその他大部分の人が残って傍聴するという形で連絡会議も行われました。総理や外相の歓迎パーティなども、勿論一緒でしたから、この意味でも三国の連絡会議が行われているようなものでした。

さて今度の会合は、周恩来によって非常に邪魔されているわけですが、われわれはそれに対しては知らぬ顔をして、戦闘的な面は出さず、日韓関係は和気藹々と、非常によくありつつある、それを世の中に示す形の会議にするということを根本の方針にしました。その方針によって岸さんの基調演説も書くことになり、みんなと相談の上、私が担当することになりました。

その演説は「今日の世界はまことに急転の世界、不安動揺の世界であるが、その中において、異色の存在を示しているのが、韓国の過去十ヶ年の発展ぶりである」というところからはじまる。特にアメリカの役割については、「アメリカがスターリンによる世界共産化を押えて

くれたから世界は助かったし、またアメリカは日本をはじめ旧敵国、旧同盟国の英仏等にも援助の手を差し伸べたので、世界は復興した。すなわちアメリカのやった仕事は、戦後の経済復興とソ連の世界征覇を押えることにあったのだが、この二つは非常に成功した。特にベルリン封鎖と朝鮮戦争の時に、国連の名において頑張ってくれたことは大きかった。それがアメリカの大功績で、今日の世界の基礎は、アメリカによって築かれたようなものだ」と述べ、さらにこれは封じこめの結果と思われるが、共産陣営に起った反応として、ソ連が平和共存政策に変わり、フルシチョフがアメリカに行くなどということがあって、毛沢東が「フルシチョフはダラ幹だ」といって、中ソの間が分裂する。こうして本来一枚岩たるべき共産社会が分裂してしまったこと、さらにいま中共が非常に暴れ出してニクソンの訪中というような新たな事態が生まれて来たことなどにふれた。ここで一寸引用しておきたいのは次の個所です。

「私は、これらのことに対して決して性急なる断定、結論を下す必要はないと考えております。およそものごとには天然自然の論理とも申すべきものがありまして、人間は勿論それに反抗することが出来ませんが、その反抗は決して長くは続かず、いつの間にか天然自然の論理に従わされてしまうのであります。元来マルクシズムなるものは、理論上死滅した教義であり、天然自然の論理に反抗するものであって長続きしない。さればこそソ連も平和共存政策に移行せざるを得なかった。それは大きな『変質』とみるべきものでありましたが、いまや北京政権も

同じ道に入るやに見えます。性急なる断定、結論はこの際最も慎むべきことでありますが、人間は天然自然の論理には一時的には反抗することは出来ても、決して長続きしないということ、特に確認しておくべきことでありましょう。」

これに関連してお話しておきたいと思いますが、林語堂という有名な人が台湾にいます。昔は、アメリカ人を非常に親チャイナにした力のある人ですが、私共がこの二月香港に立ち寄った時、その林語堂氏に偶然に会うことが出来たのです。その林語堂先生の言葉を御紹介しておきます。先生は私の中共政権の将来をどう思うかという質問に対して、言下に、「もうあれは長くはありません。まあ三年と五年でしょう。それは中共の内部情報に基づいて言っているのではない。ただこれほどまでに人心が離れた以上、滅亡は歴史の必然であって、それを私は確信する」と、こう言うのです。日本とちがって向うは国がひっくり返るような歴史を、五千年続けてきていますから、それを学んだ中国人は、そこに一つの史眼というか、歴史観を持っていて、こういう信念的な思想が出てくるものらしい。「それでは支那の歴史でいつがいま一番似ていますか」と聞きましたら、これもまた直ちに「秦の始皇帝の時です」と言う答えが返ってきました。

さてまた岸さんの演説ですが、不安動揺の世界で異色なるものは韓国の発展ぶりだ、ということを謳っています。この十年間に韓国の輸出は五千万ドルから十三億五千万ドルに、即ち二

七倍になった。年率にして平均四〇%を超すということですが、これは日本のレコードを上廻るもので、全世界にその比を見ないものです。あと五年と少して第三次五ヶ年計画が終ります。そのときはむろん先進国の仲間入りです。先進国とは援助を与える側の国です。日本、台湾、韓国この三国は成長率はいずれも一〇%、もしくはは一〇%以上です。ではなぜ日本、台湾、韓国という東洋の三国のみが、世界がびっくりするような超高度成長を遂げているのか、これは不思議なことで説明を要するところです。いずれにしても、われら三国は、期せずして相携えて世界に新たな寄与をなすべき運命を担うということに相成ったものと考え——こういうことで、岸スピーチはすすんでゆく。

そして最後に、今後の日韓協力委員会の各部会は、*「従来からの研究事項のほかに、新しい大きな研究課題を持っていただきたい」* ということで、いろいろな注文がつけられました。

まず政治部会に対しては、アメリカはアジアから兵力を引くという「ニクソン・ドクトリン」以後、新しいアジアの安全保障体制はどうあるべきかということが研究の対象になるだろうが、そのみならず、もしも北京政権が国連に加盟するとするならば、それは国連の「性格変更」を意味するものではないだろうか。国連とは、ある一定の信条を是とする国の集合体であった筈であり、それがいま世界革命を信条とする北京政権をメンバーとすることは、国連はその根本性格を変えることになるのではないか、そういうことを研究していただきたい。——という注

文をつけたのです。次に經濟部会に対しては、これからの日韓台三国は、どのような国際分業関係に立つべきか。日、韓、台三国は、どのような原理に立ち、どのような意図をもってその国際分業体制を導いてゆくべきか、それを考えていただきたい、と注文を出しました。

最後の文化部会への注文は次の通りです。

「この部会の担当すべき根本問題は、東西両文明の融合とはどのようなものか、ということでしょう。いままで文化部会で担当すべき仕事としては、普通に考えられる芸能人の交換や遺跡の保存などということではなく、日韓両国民がお互いの歴史に遡って、お互いをほんとに理解しあうことだとして来ました。特に日本人は日韓両国の歴史を全く知らない。日本人がいかに韓国を虐めたか、また向うがそれに対してどんな感じを持って来たか、といったことさえ全く知らないのです。向うは向うでまた日本を曲解している。これを正して行くことを、いままで文化部会の仕事と考えて来た。しかし今日は、さらにその上に、科学技術文明がこのように発達した現代という条件下に、そもそも支那大陸と呼ばれる国土には、どのような国が成立するのが世界史から見た必然か」という問題に取り組んでいただきたい。今日、北京の中国共産党政権にどう対処すべきかは、世界諸国の頭を悩ましているところではありますが、この問題に対する正しい回答を見出すためには、いま申しました歴史的必然性に対する理解を、どうしても欠くことが出来ないと考えます。」

こうして岸さんの演説は終るのですが、前の「日華協力委員会」と同様、偏向下にある日本の新聞は一向に書いてくれませんが、このような会合がこのように行われ、それによって日本も台湾も韓国も、国の動きの大きなところが左右されつつあるのだ、ということを知って戴きたいと思います。これも、皆さんの眼を開くため、と考えての私の努力の一端です。

（三） 国連と中共の加盟

ここでちょっと説明を加えておきたいと思うのは、国連の問題です。国連というのは国連憲章に謳った理想を信じ、その理想のもとに協力しようとするものの団体でしょう。その理想の第一はいうまでもなく平和維持です。ところが中共は、公式に革命のために世界戦争を捲き起すと言っている。朝鮮戦争の後押しもしたし、インドとも国境紛争をおこしたし、チベットは取ってしまった。そういうことを信念的に行っている国を国連に入れるというのはこれはどういうことか。国連はその根本性格を変えたものと思わざるを得ないのです。というよりすでに変わっているからこそ、誰も疑わず中共を国連に入れようとするのです。

なぜ変わったかという点、国連の発足当初、自由陣営側は、スターリンのソ連も世界の平和維持には協力すると思っていたのです。一緒にヒットラーのドイツと戦ったのですから。そう思って、愚かにもスターリンのソ連にも拒否権を与えて国連を作った。ところがいざ蓋をあけて

みると、大事なことにはみなソ連が拒否権を發動したから、何ひとつ決らない。こうして国連は、当初から半身不随となった。私は国連を「作り損った存在」と呼んでいます。インド・パキスタンの戦争、イスラエルとアラブの喧嘩、何に対しても国連は無力、無力だからこそベトナム戦争もああいふ風になる。国連の理想はいつの間にかどこかへ消えてしまつて、中共を入れた方が世界のことはうまく行くだろう、という単に便宜に基づいて考えるにすぎないことになった。

私は実は、中共を国連に入れろという論者なのです。中共を、日本も承認した方がよろしいという論者です。承認すれば東京に大使館ができて、彼等は共産革命の工作がし易くなるでしょう。日本はそれだけ危険に曝されるわけですが、実は中共の方こそ本質的な致命傷を受けると私は思うのです。彼に世界を見せれば、毛沢東自身やその側近は別としても、少なくとも国民の大部分は変質する。国民が変質の態勢に入れば、政府の言うことも変わってくるでしょう。もっともそれまでに五年、十年、あるいは十五年位はかかるかも知れない。しかしこのような変質は、決して免れることの出来ないものなのです。大切なことは彼がマルキシズムを捨てることなのです。だから、彼がマルキシズムを信奉することが不可能になるように、仕向けければいいのです。そのためには彼に外を見せれば見せるほどいい。

台湾のために言えば、彼らは本土に帰りたいでしょう。しかし実力があれば帰ってもいいで

しようが、帰らねばならぬものではない。そんなことを離れて、世界史から見て台湾がやらねばならぬことは、中国の文化を守ることだと思えます。それには中共を早く変質させて、支那本土において中国文化が滅亡することがないようにするのが必要です。彼の文化が減びる時は、われわれも怪しくなるでしょう。だからこれは、われわれの問題でもあるわけです。従っていま一番大切なこと、それは中共が変質をして共産主義を捨てて中国の文化を守る政府に成り変わってくれることです。その成り変わるプロセスを担当するのは、誰であってもいいので蔣介石、もしくはその後継者であってもいいし、そうでなくてもいい。彼等はその候補者の一人であるに過ぎない。だから、彼等が持つ願望でほんとうにジャスティファイされるものは「中共の変質」なのです。そういう意味からしても、台湾は国連を出ちゃ困るのです。台湾が出なくても済む訳がここにある。わかりますか。国連はすでに変質したのだから、その変質した国連に中共が入っても、ちっとも恥ではないのです。

テクニカルには、あの代表権という言葉が問題で、一つの国には代表権が一つしかないようなことを言うから、ひとつのもの取り合いになるのです。しかし事實は、ここに明らかに国が二つあるのですから、台北と北京、双方共、国たる実力を持っているのですから、両方とも国連にはいったらいい。そして内戦をやりたいなら、これからもやるがいいというのが私の意見です。

私も韓国との関係をガッチリ固めて、台湾を決して袖にしないで、出来る限りのエンカレッジメントを与えてゆく。彼からは「これくらいの難局は私も平気です。もつとひどいことがあったのです」といった言明を聞いているし、もつと落ち着いて事態の推移を待てばいいということになるわけです。こういうわけで今度の日韓、日華協力委員会の会議は大変な成功だったのです。ただ大して楽観できないのは、この秋、台湾でやる総会に財界の人が来てくれるかどうかですが、これはちよつとわからない、まづいことになるかも知れない。しかし、大勢は林語堂先生の言うとおり、岸演説の言っているとおり、現在の中共は天然自然の論理に反していますから、その前途は決して長くはないと思うし、だからこれは、そんなむずかしい問題ではない、と私は考えているのです。

ともかくこれからは、日本も韓国も台湾も一緒になって考えなければいけない。台湾はどのように生きてゆく必然があるか。日本は、或は韓国はどのような国になるのが歴史的必然かというのを併せて考えなければいけない。問題はずいぶん大きくなる。文章にした答を出そうとしたら、三年や五年で結論は出ないかも知れません。ところが、これは私のかねがねからの考えですが、およそ疑問がおこるといふことは、すでにある程度の解答が胸にあるということです。ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て「おかしい」と思ったときには、彼の頭の中には地球の引力についての考えの「種」とでもいふべきものが用意されていたのでしよう。

そのことを心にとめて今後の問題を考えていけば、きっと何かの構想が生れてくると思うので
す。問題は山積しているが、それには直接とりくまなければ解答は決して出てこない。学問が
先で、こう習ったからこうやるというのでは絶対に解答は出てきません。実践しながら学問を
してゆくということによってはじめて解答が生れてくるのです。

△質問に答えて▽

台湾の独立運動

（問）私の知人に本省人の方がいまして、その人によると、蔣介石にも、毛沢東にも支配され
ない本省人自身の独立運動が行われているそうです。先生のお考えを伺いたいと思います。

（答）これはわかりますね。蔣介石にとっては非常な悩みなのです。しかしこの台湾独立運動
にうっかり同情すると蔣介石政府を潰してしまうのです。中で争いが起つたら、やっぱり中共
の天下になるでしょう。とんだことになってしまうのです。そこで独立運動にはもつともな点
がありますけれども、蔣介石がいたおかげで共産化は免れているということも忘れてはいけま
せん。第二次大戦後は科学技術さえ身につければ大きな領土も資源も要らない、ということに
なったのですね。国がよく組織されて、科学技術を身につけて、仲間喧嘩をしないで、利巧に
当り前に働いてゆけば生活はどんどんよくなる。ですから、今では戦争に訴えて領土を拡張する

必要はないのです。これが現代の条件です。だから、支那大陸に成立すべき新しい国も勿論そういう国であるべきです。チベットは独立するのがあたり前でしょう。モンゴルも独立していいでしょう。満洲も独立したがいいかも知れない。そのように独立したあとで、それらが中国文化というものにつながった一種の結び付きを維持してゆくということはあってもいいだろう。いくつかの国の集合体みたいなほうがいいじゃないですか。そうやって来ると、本省人に同情しておられる方の満足されるようなことが可能になるのです。

中共の国連加盟

(問) 中共の世界征覇の野望と国連の体質は合わないとおっしゃいましたが、どのように扱えばいいのでしょうか。

(答) そこで言う国連の体質とは、その本来のあり方を言うのです。しかし現在はちがう。すでに国連が自己の変質を認めているのだから、それを確認すればいいのです。そうすれば、中共を入れてもいいではないかと言うことになり、私もそう思います。先ほどは中共を国連に入れることによって次第に変質させてゆくという利点があると申しましたが、もう一つ別の利益があるのです。中共を国連に入れれば、いわば衆人環視の前にさらすことになり、自然中共とは何かが世界の人にわかることになる。中共において知るべきことは、要するに世界

革命を捨てたのかどうかということでしょう。私は捨てていないと思う。いずれにしても国連の中に入れて、うまくテストすれば、だんだんその実態がわかってくる。世界の人が中共とは何ぞやということを知りますから、それが国連へ中共を入れる非常な利益というものです。

日本文化の役割

（問）日・華・韓三国間の文明、思想を東洋思想ということの一つに考えてよいものでしょうか。これらは後進国の文化発展の模範になりうるものでしょうか。

（答）三つとも東洋思想であることに違いありませんが、日本、中国、韓国、三つの色彩は大いに違うのです。特に日本の文化はあまりにも特殊で、すぐには一般の後進国の模範にはならないでしょう。日本は現に説明できない特殊な珠のようなものを持っているのです。これから日本は、公害排除と国土美化ということにエネルギーを使うようになるでしょうが、二十年もしたら素晴らしいことになると思う。日本は余りにも恵まれているから、日本のようにおやりなさいとは、ひとの国には言えないのです。それを知りたかったら「日本人とユダヤ人」を読みなさい。私はあの本をみて、非常な援軍を得たような感じを持ちました。ともかく日本はこれから個性に生きなければいけない。しかし決してわが個性を他人に押しつけないことです。アメリカの戦後の失敗は全世界がアメリカナイズされてゆけば、みんな幸福になると思ってアメ

リカ流を押しつけたところにあった。日本も自分の流儀を押しつけないが、みんなも、それぞれの個性に生きるのがいい。そういう意味では、日本の例はほかの国の文化発展の基礎にはなるでしょう。

自分は何をなすべきか

(問) 相異った文明を融合させ、その中から新たな生命体を導き出すことは現代人の使命とは思いますが、過去において数十年もかかったことを数秒もたたないうちに超えてしまうような時代において、それが可能でしょうか。

(答) 現代は非常な駆足の時代になった。東西文明の融合などという悠長なことをしておられないだろう、という御心配で、面白いと思います。

人間のよき生き方、よき覚悟は、今日の村松さんのお話にもありましたが、いまはこれまでと思いつめて死ぬ、もしくは死に場所を常に考えているということでしょうか、そこに気付くまで人の心が発達するのに何百年もかかっているのでしょうか。速いというのは物質的な変化が速いだけなんです。精神的変化はいまも昔もあまり変わらないのではないですか。依然として遅いかも知れない。だが、物質的变化が速いから精神的変化に耐えられないなんていうものじゃない。物質的变化に幻惑されたらだめでしょう。幻惑されないような心境というものが、幸い

に生き残っているのが東洋文明なのです。その東洋文明の力によって、その心境を鍛え出せない方は、こういう心配に押されてしまうでしょうね。だから、答えは「しっかりなさい」ということです。（笑い）

これは少し別の話になりますが、こういう質問の中にも、これは現代の通弊ですが、何か他人がしてくれる、自分は黙っていてもそうなると考えて、その理由をどこかに求めているような態度を感じます。しかし将来は自分で作るのであって、自然にそうなるのではないのです。自分で作るのだということが勘定に入らないうちは、ものは見えてこないのです。自分で作ってみせる、それが大切です。毎日やっている小さなこと、自分の生活上どうしてもしなければならぬ小さなこと、それが勉強であっても就職であってもいいですよ。それがしっかりしていれば偉い人なんです。そういう末端にしか、実は精神はないのです。例えば箸の上げおろしというようなつまらない末端のことに、全世界のことがかかっているように見えて来る、それが本物なのです。それをどこか外に求めて、その外のを教えてもらって、それで安心しようというのではダメなので、自分の日々の行ないが、東西文明融合の実践となってくるときに、その融合が成就するのです。

私は四十代ごろまではガムシャラに働いたものです。先の見通しなんか全然考えなかった。ただ、自分としては、やむにやまれぬ、こうするほかはないというギリギリのところ以外のこ

とは余りやらなかった。そういう風に生きてゆくとそれで人生は実に楽しいものなのです。そういうのが天然自然の事物の論理というものです。幸せなんかを求めて幸せになるものか。(笑い)とにかく銘々自分のなし得るところで、自分の本当の煩悶に応えることが出来る生き方をして下さい。そうすればそれが自然に東西文明の融合になってゆくのです。

日本国憲法

(問) 武力には武力で解決する要もあるし、その為には憲法改正を政府が実施すべきだ、と言われました。私もそう思いますが、莫大な軍事費はどうしますか。

(答) 侮られない程度の武力を持つという位にしか、私は武力の必要を考えません。武力を持つ為に憲法を改正するのじゃないのです。いまの憲法九条はあのままでも武力は持てるのです。憲法改正は武力問題じゃないということを、知って欲しいと思います。

今の憲法で一番いけないのは「基本的人権」です。われわれ一人一人が基本的人権という権利を持っていて、それが侵害されたと思ったら国家を相手に訴訟を起してもいい、こういう格好にできているのです。だから訴訟々々で何千件もたまりますね。もしそれを何万件もたまるように持って行ったら、それだけで日本は亡びてしまうでしょう。

第一に自分が文化的生活を営む権利というものがあって、それが侵害されたら国家を相手に

訴訟を起してもいいというこれがいけないのです。国家というものの履き違えです。第二に権利義務で憲法を考えているのがいけないのです。この点は明治憲法もいけないのです。第三に、私は憲法は不文律がいいと思つています。非常に大事なことは文字にならないのです。しかも、文字にしない方がいいということを、生れながらに知つてるのが他ならぬ日本人だ、と私はそこまで考えます。

それが明治以来誤つて、西洋に追つかんが為^に無理無体に憲法を作つた。明治憲法は天皇の大権といつて、大の字をつけて尊敬の意味を現わしているけれども、元来、ヨーロッパの法律思想では、権利とは自己の利益を主張するものを言うのです。基本的人権もみんなそうです。天皇の大権事項として天子様のなさることとして挙げてあるものに、天皇が自己の利益のためになさるものはひとつもないでしょう。これを要するに、権利義務で国家を律しうると思うヨーロッパ思想に乗らないものが、日本の憲法であるべきです。そう考へて行くと結局、日本は不文律でゆくほかはない、となります。しかし、日本の憲法は言葉に書けばこういうものだらう、ということも多くの人^が解釈のための著述をすることはいいことです。しかし、法律を出して国民投票で決めて、これが憲法だということは言わないほうがいい。それが、私の憲法に対する基本的な考へです。

（世界經濟調査会理事長）

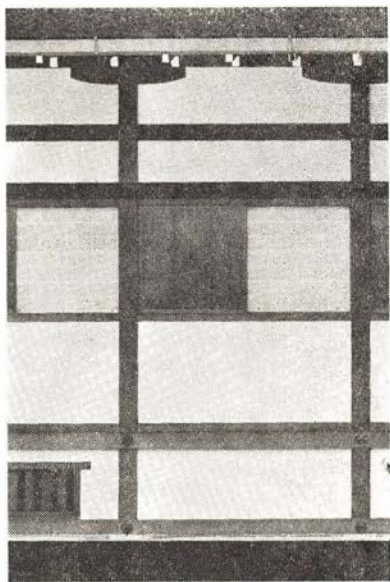


日本のいち

天皇政治について

——歴代御製を中心に——

小田村 寅二郎



はじめに

古代の天皇の御歌

平安時代から江戸時代へ

鎌倉室町時代の天皇の御歌

江戸時代の天皇の御歌

御学問所への廊下

はじめに

お話にはいります前に、お手許にお渡しした「歴代天皇御年齢等調べ表」というプリントを御覧になって下さい。その表を見ているとどのようなことがわかってくるか、最初にそれを申し上げることによって、天皇の御性格とでもいふべきものを明らかにしてゆきたいと思ひます。

（編者註）ここで配布された一覧表は第二十九代欽明天皇から第一二四代の今上天皇に至るまで九十六代にわたる天皇について、上から天皇の御位についておられた年数、踐祚（先帝が崩御なされた直後に皇位を受け継がれること）なされた御年齢、退位なされた御年齢、おなくなりになった御年齢が列記されており、一番下の欄には講師の調査による各天皇方のお詠みになった歌の総数が記されていた。なおこの表は講師の著述になる「日本思想の源流——歴代天皇を中心に——」（日本教文社刊）にも別表として折りこまれているので参照していただきたいと思う。

第一に天皇はなくなられるまで天皇の御位におられたかどうか、すなわち御退位と崩御の年齢の関係はどのようなかを考えてみましょう。そうすると非常に古い時代とずっと新らしい時代、幕末の仁孝天皇（孝明天皇の父君）以後は殆んどの方がおなくなりになるまで天

皇の位にあられた、要するに天皇政治の日本であった。ところがその中間、すなわち平安時代から幕末に至るまでは御退位と崩御の御年齢の間に大きなずれが出てきていることに気付かれると思う。さらに踐祚なされた年齢を見てゆくと、矢張り平安時代になると第五十六代の清和天皇九才、次の陽成天皇九才をはじめ、十才以下の方が続出してくる。すなわち非常に若い御年で天皇の位につき、人生の途中で天皇の位を去られるという現象が顕著になって参ります。その一つの区切りは第五十六代清和天皇以後と考えられるようですが、清和天皇から江戸時代末期、仁孝天皇の前の第一一九代光格天皇まで、およそ一千年、その間に六十四人の天皇がおられたのですが、その天皇方を調べてみると次のような数字が出てきます。

(1) 天皇の位におつきになった年齢……平均一五才

五才以下……………一〇名 (16%)

一〇才以下……………二五名 (40%)

一三才以下……………三五名 (54%)

二一才以下……………四七名 (73%)

(2) 御退位の年齢……平均三〇才

三〇才以下……………三五名 (54%)

(3) 御崩御の年齢……平均四六才

三〇才以下……………一八名(30%)

すなわち天皇の御位におつきになったのが一五、御退位が三〇、崩御が四六、大雑把に言つて一五、三〇、四五、という数字が出て来るのです。最近はよく過去の天皇が強大な権力で国民を押しつけてきたと言われており、諸君の中にも漠然とそう考えている人もいるかも知れないが、事實は右に述べた通り、その当時の天皇はすでに三十才で位をおりておられるのです。しかもその三十才という平均も実はもつと下まわることになるのです。なぜならその六十四代の天皇方のうち、戦国時代の末期、後土御門、後柏原、後奈良の三天皇の退位の御年齢はそれぞれ五九、六三、六二才という高年齢になっておりますが、それはいづれも崩御年齢と同じなのです。なぜそのようなことになったのかと申しますと、その当時は皇室は極貧の中にいらつしやつて、世の中から全く忘れられたような存在だった。だから天皇が長く御位におられるも幕府も武将達も全く無関心だった。亡くなられてもその御遺体を葬ることも出来ないという状態だったので。こういうわけで高い御年齢が記録されているのです。さらにこれと一寸似たケースですが南北朝の三天皇 後醍醐、後村上、長慶のお三方が矢張り五二、四一、四一才となっておりますが、(このうちははじめの御二人が崩御年と同じ)この場合もまた、天皇方は吉野にかくれておられて足利の勢力から言えば問題にならなかった。従つて御退位の年齢が

高いのです。この方々までふくめて、平均で三十才御退位ということですから、実際に退位なさった御年齢の平均はもっと低いはずで、一般に考えられているような、天皇が強大な権力を行使したというイメージといかにちがうか、よく考えていただきたいと思ひます。

なおプリントの一番下の欄に歴代の天皇方がおよみになった御歌の数が載っております。これで見ますと、大変な御歌の数です。それだけ和歌の修行をなさっているということは、またそれだけ自己の人生経験をきびしく見つめ、反省していらつしやるということを意味しているのです。しかも世の中が非常に苦しい時、幕府の勢力などがはげしく朝廷を圧迫している時などに天皇の御歌の数が圧倒的に多いことも注目すべきことだと思ひます。

ともかく歴代の天皇は極めて弱い力でありながら、三十才以下でその位を退かれるという状況のなかで、実に今日迄続いてきた。しかもその間歴代の天皇は折にふれて歌をよみ、自らを深く省みつつ今日に至られた。それは一体何故か、人々が何を言おうともこれらのことはまぎれもない事実なのです。その事実にとりくみ、なぜその事実が事実としてあり得たか、それを見なさまと一緒に考えてみたいのです。

古代の天皇の御歌

次にプリントに記されている歴代の天皇の御歌を読みながらお話をすすめて行きたいと思ひ

ます。最初に記してありますのが舒明天皇、この天皇は聖徳太子が摂政をなさった推古天皇の次の代の天皇で、このころは聖徳太子が大陸に派遣された留学生が続々帰朝して、潑刺とした空気が漲り、大化改新の準備が整えられているという時代でした。

かぐ 香具山に登りて望くにも国したまふ時の御製歌おのみうた

大和には 群山むらやまあれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立
ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島あきつしま 大和の国は

このお歌は万葉集の巻一の巻頭の第二首目に載せられているものですが、遙かに開ける国原を見さけつつ、そこに住む人々の生活に心を馳せておられる大らかな天皇の御心が偲ばれる御歌です。その時代はいま申しあげたようにアジア大陸から、支那やインドの文化をどしどし吸収していた時代であったことも一緒に考えるべきでしょう。その力に満ちた日本の古代文化、それが現在と殆んど変らない大和の風土の上で展開されていた。そこに舒明天皇という方がおられて遠く国原を見ておられる。その御姿を諸君の心の中に蘇らせて下さい。

その舒明天皇の妃が後の皇極天皇、重祚されて斎明天皇と申し上げますが、その御二人の間にお生まれになったのが、大化改新を推進された中大兄皇子、後の天智天皇です。その天智天皇が皇太子であられた時、御母君斎明天皇は、百済救援の為、新羅討伐の兵を九州までおすす

めになったのですが、その折六十八才という高齢で九州の朝倉宮で崩御なされたのです。そのあとお母様の柩が大和に帰られるのを御送りになった皇太子、中大兄皇子はある所に船をとどめてお母様を慕って次の歌をおよみになったのです。

君が目の恋こほしきからに泊はてて居てかくや恋ひむも君が目を欲ほり

母親の目というものはわれわれにとってもどんなに年月が経っても焼きつくように印象に残っているのですが、この御歌にも母を思う純一な御心がひしひしと感じられます。次のお歌はその弟にあたられる天武天皇が、これも皇太子の時代、額田王に与えられたお歌。これは相聞、恋愛のお歌です。

紫草むらさきのにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

美しいあなたがもし憎いのなら、人妻なのにそれを押してまでこんなに恋い慕うことがあろうか——はげしい御心が清々しく、卒直に詠まれていると思えます。

次は元明天皇で天智天皇の御子様、その次が元正天皇で天武天皇の御孫にあたられる方で御二人とも女帝でいらっしやいます。

元明天皇の御歌は

ますらをの鞆ともしの音すなりものふの大臣おほまへつきみ楯立たてつらしも

鞆とは左の臂に巻いて弦の当るのを防ぐもの、それに弦が当って音がしている。將軍が楯を立てて訓練をしているらしいという、女性ながら力に満ちたお歌です。

元正天皇の御歌は

群臣まへつきみを内裏だいりに宴みづかして皇太子みづか親ごせちら五節まを儻まひたまふ

そら見つ大和の国は神故かむかし貴くあるらしこの舞みれば
天つ神皇孫みまの命みことの取り持ちて此の豊御酒とよみを齋いたみ献たまる

すでに天皇の御位はおゆずりになったあと、六十四才の頃の御歌ですが、いかにも女性らしい美しい調べとともに、清らかな御心が偲おもはれます。

さてこの元明天皇の時に「古事記」が、元正天皇の時に「日本書紀」が出来上っており、す。しかもこの二つの重要な歴史書はさきほど申し上げた、天武天皇の時に、すでに編纂の計

画が立てられている。天武天皇は天智天皇と御兄弟で、先に申し上げたように舒明天皇と皇極天皇の御子様です。舒明天皇の前の代が推古天皇、その時の摂政でやはり国史の編纂に大きな業績をのこされたのが聖徳太子です。そう見てくるとこれらの数多くの方々が古事記編纂の背景にずっとはいってきていることがわかります。

ところが現在、一般の歴史書では「古事記」は、天皇制国家が、過去を自分に都合がいいように作意的につくり上げたものであると言われている。すなわち政策的な意図をもって、大和朝廷を美化するための、作為によって作られたものと言うのです。だが果してそうだろうか。いま私たちは舒明天皇をはじめ天皇方の御歌を読んできたのですが、これら古事記の編纂に直接に間接にタッチされた方々が、自分たちの祖先を美化するために嘘、偽りをしようとする人々であるか否か、それを考えていただきたいのです。歌は偽りの心情で出来るものではないし、たとえ作ってみたところで人の心は打たないものです。私たちがこれらの天皇の御歌に感動するということは、古事記が単なる偽りの史書などではあり得ないということの何よりの証拠ではないか。いまの学者たちは、古事記の序文に書いてある編纂の精神についても頭から信用すべきではないと言う。しかし信用できないのは自分自身の心に猜疑の念があるからではないのか。「古事記」の編纂をおしすすめた天皇方のお心は、そのような猜疑の心とは全く無縁だった。それはいま読んだお歌の大らかさが何よりも雄弁に語っているではないか。そのこと

をよく考えていただけだと思います。今の学者は歴史にとりくむと言いながら、その実、下劣な猜疑心から生まれた、天皇は信ずべからざるもの、という大前提が先行してしまった上での独断を、いかにも学者らしい表現で言葉にしているにすぎないのではないのでしょうか。

次の聖武天皇の御歌にうつります。

天皇、酒人女王を思ひます御製歌

道にあひて咲まししからに降る雪の消なば消ぬがに恋ふとふ吾妹

道ではんのすれ違っただけの女性、その人が、その瞬間の心のときめきを胸に大切にたたみこんで自分を偲んでいるという便りを人伝てに聞いた、そういう時に出来た歌でしょう。春の淡雪がすつと消えてゆく、そのように私を思っている——「降る雪の消なば消ぬがに」という言葉は実に美しい。

天皇の、酒を節度使の卿等に賜ふ御歌一首。短歌を并せたり
食国の遠の朝廷に 汝等し 斯く罷りなば 平けく 朕は遊ばむ 手抱きて 朕は御在さ
む 天皇朕が うづの御手以ち かき撫でぞ 労ぎたまふ うち撫でぞ 労ぎたまふ 還り

来む日 相飲まむ酒そ この豊御酒は

反歌 一首

丈夫ますらおの行くとふ道ぞおほらかに思ひて行くな丈夫ともの伴

長歌もすばらしいが特に反歌の雄大なひろやかなリズムをじっくり味わって下さい。丈夫の行くという道なのだ。おろそかに、不用意な気持で行ってはいけない、緊張した思いで、任務をやりとげて行ってきなさい、そして元気で帰って来た時に一緒に酒を飲もうではないか。長歌と反歌を一貫して流れる、溢れるような力強さは比類ないものがあります。

和歌というものが心にもないことを表現出来るものでないことは諸君がこの合宿で直接に経験されることだろうと思う。それが経験出来れば、和歌を通して天皇を理解するという道が開けてくるはずで。天皇論は議論を展開していく道もありましょうが、自らの努力によって天皇の御歌の中に真心があるか、虚偽があるかをたしかめるといふ道もあるのです。私は天皇をすべて美化しようとして申し上げているのではない。平安の終りごろから院政が行われたり、そのあと幕府がおこったりする。そこには政治に取り組まれる天皇の御姿勢の中に多少まずいところがあったことも事実でしょう。しかしそういうこともふくめてありのままの天皇の御姿勢と、諸君のイメージの中に描かれている天皇の御姿勢と、そのくい違いに心をひそめていただき

たいのです。

平安時代から江戸時代へ

さて平安時代になると先程申し上げたように清和天皇、陽成天皇がひきつづきいずれも九才で天皇の位につがれるという異常な事態が発生する。それは藤原氏が摂政関白として政治権力を手中に収めるといふ情勢と表裏しております。もつともそのあと、醍醐、村上の両天皇の、所謂延喜、天曆の治の折は天皇が位を退かれたときとおなくなりになる年とが接近して、天皇が御自分の抱負を具現しようとなさった政治の姿が顕著に示されておりますが、そのあととはまた御退位と崩御の年齢の差はほとんど開いて、遂に平安後期には院政が開始され、幼い天皇がロボット化してゆくのを、退位された天皇が政治の實際にタッチすることによって防衛する、或いは補うといふ態勢がとられる。しかしこの無理な院政という態勢が破綻をきたし、天皇の御不満が爆発して、保元の乱となって現われ、崇徳上皇が四国の讃岐に流されるという非常に不幸な事態が発生する。これに藤原、源氏、平家の争いがからみ、遂に約七〇〇年にわたる武家の政治が発生するのです。

鎌倉幕府成立以後三十年、後鳥羽上皇が大変御心配になり、御子様方と一緒に倒幕運動をお起しになりましたが事成らず、後鳥羽上皇は隠岐、順徳上皇は佐渡、土御門上皇は阿波でおな

くなりになる。勿論これは一般に言われているような権力争いなどではなく、日本の歴史の本質にかかわる天皇の御悲願のあらわれといふべきでしょう。その両者の区別がつかないようでは日本の歴史の問題は決して見えてこないのです。

その後、後嵯峨天皇が位を退かれたあと、後深草天皇からはじまる「持明院統」と、その御弟君亀山天皇からはじまる「大覚寺統」という二つの皇統が交互に天皇の位をおつぎになるといふいわゆる「兩統の迭立」がはじまり、その後大覚寺統である後醍醐天皇が北条氏を討伐して建武の中興が成就するのです。だがそれも失敗に終り、足利尊氏は勝手に持明院統をつぐ天皇を北朝として京都に擁立し、一方正統である南朝の天皇方は吉野の山を転々として文字通り流浪の生活をおつづけになる。こうして約六十年、北朝の第六代目の天皇、後小松天皇に、南朝の後亀山天皇から三種の神器が渡され、以後北朝系の天皇がずっと御位におつきになるのです。

そのあと一〇二代の後花園天皇から一〇五代後奈良天皇まで、この四代の天皇方の時代は応仁の乱を中心に、世は乱れに乱れ、お話のはじめに一寸ふれましたように天皇方の経済は極度に逼迫してまいります。例えば一〇三代後土御門天皇がおなくなりになった時はお葬いの費用がないので、実に四十九日間、御所のある御部屋に御遺骸を安置申し上げたと歴史は伝えております。さらに次の後柏原天皇がご即位になってもその儀式もあげることが出来ず、二十一年目に地方の豪族などの助けを得て式をあげられたといわれております。このような事があつた

あと、一〇六代の正親町天皇の御代になってはじめて信長や秀吉の登場によって朝廷のご生活が整えられ、こうして時代は近世、江戸時代に入つてまいります。

では徳川時代における朝廷と幕府の關係はどうだったのか。次に考えてみたいと思います。元和元年、幕府は「禁中並びに公家衆諸法度」を出して、朝廷に対する彼らの露骨な考えを示し、今後朝廷ならびに公家達は、ここに示された規則に従えと通告してきました。ところがその幕府のやり方の横暴さもさることながら、そこに書かれている内容に目をとめれば、いかに当時の幕府が、天皇のことについて、或は日本の国柄について無智であつたか一目瞭然たるものがあります。例えば第一条の「天皇御芸能のこと」御芸能とは身につけて修行なさるべきことという意味ですが、その第一は御学問なりと書いてある。そして貞観政要という唐の書物の「学ばざれば則ち古の道を明らかにせず云々」という一節を引用して、宇多天皇の「寛平の御遺誠」を読めと書いています。(しかも御遺誠の御を省いて遺誠と呼びすてにしています)「寛平の御遺誠」など幕府が言わずとも歴代の天皇方が常日頃仰いでこられた書物です。あまりに人を馬鹿にした言い草だと言うべきでしょう。しかもそのあと「和歌は光孝天皇より未だ絶えず、綺語たりと雖も、我國の習俗なり。棄て置くべからず」と書いています。光孝天皇とは五十八代、平安の初めの天皇ですが、そのときから和歌がはじまったと驚くべき無智を暴露し、しかも和歌を綺語というのです。綺語とは飾り立てたうそごとだということ、日本の和歌の伝統につい

ては全く知ることなく、しかもそれを我國の習俗だから読めという。これを受けとられた後陽成、後水尾兩帝がいかに和歌の修業にお励みになったかはまたあとで申し上げますが、御二方ともどのような御氣持でこれをお読みになったか、想像を絶するものがあつたと思います。その他この法度によつて様々な規則で幕府はがんじがらめに朝廷を縛り上げてしまつたのです。

その二年後に後陽成院は四十七才でおなくなりになりましたが、それもやはり深い御心痛があつてのことだつたかも知れません。それから十年して紫衣事件がおきます。紫衣とはすぐれた高僧に天皇からおさづけになるものですが、幕府はこれを天皇が濫発なさるとして文句をつけ、後水尾天皇が沢庵和尚にお授けになつたとき、これを撤回なさるよう朝廷に迫るのです。流石の天皇もこれには堪忍袋の緒を切られ、遂に寛永六年三十四才で位を明正天皇にお譲りになるのです。その明正天皇とは実は將軍秀忠の女がお生みした皇女であられたのです。ところがここで大切なことは、さきほどの諸法度で、幕府は「女縁者の家督相続は古今一切之れなき事」として女性の相続を認めていない。その法度を敢えて無視して徳川の血を引く皇女に位をお譲りになつたというところに天皇の御心が如実にうかがえるように思います。幕府としては窮地に立つたでしょうが、結局自分に都合のいい事に対しては法に反しても何とも言わな

い。こうしてその無節操ぶりを暴露してしまつたのです。天皇もまたここにおいて幕府の正体をはつきりとお見破りになつたと思ひます。

こうして後水尾院は自分が生きている間は責任をもって幕府との交渉にあたらうと決心なされ、そののち五十年間院政をとりつづけられるのです。さらにその御志をついで、靈元天皇(後水尾天皇の皇子)が自ら位をお退きになったあとも、おなくなりになるまで院政をおつづけになる。徳川時代は二六五年と申しますが、その前半の一三〇年は、後陽成、後水尾、靈元の三人の天皇方、内容的に見ますと、殆んどあとの御二人の天皇が生涯を通じて政治に携わり、幕府との折衝にあたられながら、何とかして皇室の伝統を守り続けようとなさったわけです。

鎌倉室町時代の天皇の御歌

以上申し述べてきましたようにさまざまな波瀾の中でいろいろの苦しいおもいをなさりながら天皇の御位はつづいてきたわけですが、天皇御自身はどういうお考えでこの世を生きてこられたか、先に古代の天皇方の御歌を読ませていただきましたが、今度は中世以降の天皇の御歌に、そのみ心をたどってみたいと思います。

最初に承久の乱で流されたもうたお三人の天皇のお歌から読んで参ります。

後鳥羽天皇

古寺の花(一一〇一—御歳二十二、後退位の後)

はつせやま山たちはなれちる花のゆくへ定めずさそふ風かな

自然の風景の動きを非常に細かいお心でとらえられ、その自然の動くままに心を托し、心を投じきっていらっしやるご心境がよく出ているお歌だと思ひます。

寄山雑（二二〇八―御歳二十八）

おく山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせむ

茨が茂っている、歩けないような道、そういう所でも踏みわけて、いつでも人が行ける道にしたい、すがすがしく生きてゆける世の中にしたたいという願ひをこめておつくりになったお歌だと思ひます。

後土御門天皇

承久三年（一二二二）三月、上佐より阿波国につかせ給ひて（御歳二十五）

浦々によるさなみに言とはむ隠岐の事こそ聞かまほしけれ

海べに寄ってくる波にも声をかけたい。その海がずっと続いている遠くの隠岐の島で、父君後鳥羽上皇はどうしていらっしやるのだろう——素直な、純真な、自然のままのお気持が直接にひびいてくる御歌です。

順徳天皇

春(一二三—御歳一七)

もろ人は若菜つむめりかすがなるみかさの森の春のひかりに

のどやかな人々の春の姿に心を止めてすなおに表現しておられると思います。

後鳥羽院かくれさせ給ふてのち、御歎きのころ(一二三九—御歳四十三)

おなじ世の別れは猶ぞしのぼるる空ゆく月のよその形見に

こういう僅かな歌を紹介しただけで何かを考えよというのは無理だとは思いますが、ただ歴史的事件を知ることに加えて、そこに実在した人物の感慨を、その人自身の表現で見ることが出来ればそれなりに大きな世界がひろがってゆくのではないでしょう。

もう一つここで申し上げておきたいことは、先程の後鳥羽上皇の御歌に出てきた「道」ということです。道というのは人が歩いて行く道です。古くから日本にある、日本人であれば誰もが歩いてきた道です。勿論一人一人歩く道は違いかもしれない。しかしお互いに生き合っているということを認識して行けば、そこにおのずから一つの道が出来てゆくはずです。みんなが安心して歩いてゆける道、それは多くの人の体験が積み重なって来た時に生まれてくる。道という漢字は支那からはいってきたものですが、その字が伝わるよりはるか前から「みち」という言葉は日本にあったのです。和歌のことを古来「敷島の道」というように言っています。が、このように使われる道というのは決して道徳的な解明の必要はない、いわば民族の体験の累積だと言っているでしょう。だからはじめに道があって大人が子供にむかってこの道を歩みなさい、と言うそういうものではないはずだ。勿論大人が先に行くこともあるけれど、子供が先に行く場合だってある。子供の素直な、幼ない純真な心にはっと心をうたれて、大人がその子供のあとについてゆくこともあるのです。こうして多くの人達が「先になり後になりつつ」歩んでゆくところに自然に道が生まれるのです。そこにこそ本当の普遍性があり、妥当性がある。この道の上に、思想があり、政治が展開しゆくのです。ところがその道などというのは古くさい、もっと気のきいたことを言わなければいけないというので、道理の認識とか、人格の完成とか、そんなことばかりを言いだして、肝心の道がどこにあるかわからないようになって、

宙に浮いたようなところを歩き出したのが今日の思想の混迷ではないか。歴代の天皇は力を求めようとはなさらなかった。そうではなく道を求めてこられたのです。そういうお歌は実に沢山ある。そこに天皇のお心に迫る大切な鍵があると思われてなりません。

次に先ほど申し上げました両統の迭立の直前にあたられる後嵯峨天皇の御歌。天皇は土御門天皇の第七皇子、後白河天皇以来、約百年ぶりで青年で天皇の御位におつきになった方です。

河夏蔽（一二六五―御歳四十六）

河辺なるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈るけふかな

八幡にこもり侍りし時

石清水こがくれたりしいにしへをおもひ出づればすむ心かな

次は大覚寺統の方である後宇多天皇

百首の歌めされしついでに、雑

いとどまた民やすかれといはふかな我が身世にたつ春の始は

わが身世に立つというのは政治をみそなわすということでしょう。「いとど」は尚一層、春のはじめに国民の平安を祈念していらっしやるお歌です。

神祇

天つ神国つやしろをいはひてぞわが草原の国はをさまる

「天つ神国つやしろをいはひてぞ」という心は、自分が生かしていただいているという姿勢で人生を把握されている姿だと思えます。もともと日本人は風土的な影響もあって、自然を征服するというのはなく、自然に随順し、自然の中に生かしていただいている自己を自覚しながら生きてきたと言えるのです。従って日本の国土にも、風土にも感激の思いがたつがってゆくとときに日本人の思想生活は健全に営なまれていると言えましょう。天神地祇に感謝するといふおもいが天皇のお心の中にたたえられている限り、日本は治まってゆく、私はそういうやすらぎをこのお歌に感じます。

嘉元仙洞御百首のうち

今もかも天の日嗣のたえせねば限もあらじよよのすべらぎ
つが
穆の木つがのいやつぎつぎに伝ふべき天の位は神のまにまに

「神のまにまに」というのはあるがままに、昔から伝わってきたまにまにということ、その自然な姿が永遠を約束しているのです。完璧な政治権力を掌握して、それをいつまでも続かせようというような意識があれば、こういう言葉は決して出てこないでしょう。次は伏見天皇のお歌です。

夏十五首の中に、早苗

傾くる田子の小笠のいくならびおなじ心にとるさなへかな

述懐 (一三二〇—御歳四十六)

世をまもる神のこころをかへりみてをろかにたらぬ身をぞ恐るる

強く我が身を省みていらっしやるお歌です。

述懐の御歌の中に

いたづらにやすきわが身そはづかしきくるしむ民の心おもへば

このお歌もいうまでもなく権力者の歌ではない。怠りがちの自らをみつめながら、国民一人一人の苦しい生活に心をはせつつ、そのお心をそのままに言葉に出すことの出来る方々、そこに天皇の御姿を見るのです。

次は後花園天皇、この天皇は北朝第三代称光天皇の御曾孫なので、称光天皇といっても足利氏が擁立した北朝の天皇なので、南朝と同等の資格はもっておられない。しかもその曾孫ということ、皇室の正統から言えばいふん縁の遠い方と言えましょう。このように非常に縁の遠い方が天皇の位におつきになることは、日本の歴史上時折り見られることですが、ここで大切なことは、そういう方であっても、天皇の位におつきになってからは、いま私が見てきたような歴代の天皇の大御心が正しくうけつがれている。そういう意識と御自覚をおもちになるということ。特にこの後花園天皇のように北朝の系統をおつきになっていけば、そこに南朝とは違った精神が登場したのではないかと勘ぐりたくなる。ところが実際は全く違わない。

述懐

いかばかり心をそへてまつりごととすぐなる世ぞと人にいはれむ

述懐の心をよませ給うける

敷島の道ある代々のいにしへに猶立ち越えむ跡をしぞ思ふ

一首目の「心をそへて」と言うおことばはこちらの心をむこうにもってゆくということ、真

心のこもった御氣持の表現だと思われ、何とも言えない清々しさを感じます。この二首のお歌に見えるもの、それは北朝の精神でも何でもありません。まさしく歴代の天皇のお心そのままです。万世一系の天皇と申しますが、血縁の上でのつながりは申すまでもありませんが、先程のお話のように非常に縁の遠い方がおつぎになることもある。しかしそこに流れている天皇の御心の一貫したお姿、それが万世一系ということの内容としてゆるぎなく厳存していることに心をとめて下さい。

次は後土御門天皇

祝言 (一四七六一御歳三十五)

いにしへに天地人もかはらねばみだれは果てじあしはらの国

後土御門天皇は最初にお話したように極度の貧しさの中を生きられた天皇ですが、その苦しい状況の中で「いにしへに天地人もかはらねば」という力強い確信のもとにその環境を総合なさっているお力を知ることが出来るように思います。それから二代あとの後奈良天皇、そこにもやはりご自分を「愚かなる」と把握なさっているお歌があります。

独述懐 (一五二九一御歳三十四)

愚かなる身も今さらにそのかみのかしこき世々の跡をしぞ思ふ

江戸時代の天皇の御歌

江戸時代にはいってまいります。最初は先程申し上げました後水尾天皇の御歌です。

七夕祝（一六三九―御歳四十四）

ほしあひの空にくらべむ君も臣も身をあはせたる世々の契りを

君と臣が「身をあはせたる」という御表現に心をとめて下さい。君臣一体ということですが、そのような概念ではなく、君と臣とが身をすり寄せながら、体を一つにして生きるという実感にあふれたお言葉です。それを七夕の星の出会いに託して述べておられる。非常に珍らしい御表現だと思えます。次の靈元天皇は明治天皇を除いては歴代の天皇の中で一番多くの歌を残していらっしゃいます。ここでは御父様、後水尾天皇の御夢を御覧になった御歌を御紹介しておきます。お歌は四首ありますが、これは靈元天皇が六十八才、六十九才、七十一才、七十四才という御高齢でありながら、年毎に御父様の夢を御覧になった、その折の歌です。

第一首目は御年六十八才の九月、修学院の離宮に御出かけになる前の夜、父君を夢にみられた

時のお歌です。

夢ながらうれしと見つるたらちねのゑめる面影いつか忘れむ

第二首目はその翌年の同じく九月、やはり修学院に行こうとなさったときまた夢に見られるのです。

この秋もまたたらちねを見し夢の行方うれしき今日の山ぶみ

さらに七十一歳、七十四歳の二度にわたって夢をご覧になります。

三たび見し中にもわきて言の葉をかはせる夢ぞさらに嬉しき

三度見しそれだに世にはあやしきをまた数そふる夢の嬉しさ

靈元天皇がいかに後水尾天皇をお慕いし、そのお志を継いで、幕府の権力政治の中で、天皇政治——天皇のお心を中心とする政治の伝統——を守りつごうとなさったか、この四首の中に

鮮やかに感じとられるおもいがいたします。

このあと江戸時代の後半にはいって、お二人の青年天皇の御歌を紹介いたします。最初の桜町天皇は長い間絶えていた新嘗祭を敢然として復活なさいましたが、それに対して幕府は強く御退位を迫るような態度をとりましたし、桃園天皇の時には竹内式部ら天皇の側近にあって正しい学問をすすめていた人達が処分をうけた、有名な宝暦事件がおこるといふように、幕府の執拗な天皇孤立化政策がつづいている。そういう時のお歌です。

桜町 天皇

述懐（一七三九—御歳二十）

思ふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめむ

述懐（一七四〇—御歳二十一）

身の上はなにか思はむ朝な朝な国やすかれといのるころに

立春（一七四三—御歳二十四）

君も臣も身をあはせたる我が国のみちに神代の春や立つらむ

「君も臣も身をあはせたる」というのは後水尾天皇の御歌の中のお言葉と同じです。それが「国のみち」——日本の道だとおっしゃるのです。

桃園 天皇

聴 (一七五六—御歳十六)

身の恥も忘れて人になにくれと問ひ聞く事ぞさらにうれしき

「耳によく聴くを聡といふ」という聖徳太子の御言葉がありますが、聴くということの重大な意味を僅かに十六の御歳でこのような和歌に表現しておられるのです。

神祇 (一七五七—御歳十七)

もろおみの朕われをあふぐも天てらす皇御神すめらみかみのひかりとぞ思ふ

このお歌をよんだとき本当に私は愕然といたしました。自分が天皇として仰がれるのは自分の力ではない。「天てらす皇御神」が国民を大切になさったその余徳を受けているだけだという御自覚の表現なのです。歴代の天皇の御歌の中にも類似したものを見出せないお言葉です。政治権力を掌握して天下を取った者との違いが実に明らかに表現されているお歌です。

祝（一七五八―御歳十八）

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる国はわが国

そしてもう一つ

逢恋（一七六一―御歳二十一）

新にいままくら待ちえてかはす今宵よりよを隔てじと契るうれしさ

これほどまでに赤裸々な人間生活の営みを、何の虚飾もなく、また何の嫌味もなく歌えるものがほかにいるだろうか。私はこのお歌に接したときに、驚きもしたし、本当に嬉しくもなりました。こういうお歌をよめば天皇制というのを政治権力と同じレベルで考えることの間違いがいよいよはつきりしてくるはずで、権力ではない、だからと言って宗教的なものというように片付けるのも間違いです。そうではなく人間が生きてゆく素直な道を率先して歩いてくださった方、それが天皇なのです。そういう人間生活にとって最も大切な、意義ある生き方、それが政治権力にむすびついて、まずかったこともあったし、良かったこともあった。それが歴

史のすがたなのですが、ともあれその最も人間的な生き方を捉えてこられたのが天皇であり、それを確認してきたのが日本の知恵だったのです。その天皇を外国の君主と同じものと考える一般の風潮は実におかしい。その全く異なるものは全く異なるものとして扱うのが学問的、科学的精神ではないか。しかし現在の日本の大学ではこのところが全くわからなくなってしまうている。「日本にはなぜ天皇は続いたか」そのことを正確に、歴史的な事実にも則して考えるのではなく、外国の君主と同じものが日本にもあったのだという前提で天皇を考えるなどということとは、真実に対する傲慢だと思う。私は何も天皇が日本にだけあったものとしていばって言うているわけではありません。事実を事実のままに見てほしい、そして天皇のすばらしいお心を感じとる力を失わないでいただきたいと言っているのです。もしその力を失えば、私たちは世界中の人の真心を感じとる力までも失ってしまうのではないのでしょうか。

(国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授)

歴史の見方

——明治維新をめぐって——



国武忠彦

歴史の客観性

「天皇制」について

唯物史観から見た明治維新

西洋人の日本観

維新の原動力

歴史の客観性

私は高等学校で日本史を担当しております。先日試験をしましたところ、大変できの悪いのが二人おりました。しかしこの生徒は解答用紙の裏に日本の革命についてギッシリ書いており、明治維新は絶対主義革命であったので、現代日本はプロレタリア革命をしなければならぬというのがそのいわんとするところでありました。後でこの生徒を職員室に呼んで話し合いましたが、今日はこの生徒との話し合いのなかから、明治維新を絶対主義の成立であったとすれば、それはどういふことを意味するのかということを考えてみたいと思います。

明治維新は日本史上きわめて重大意義をもっております。かつては明治維新といえば、王政復古であるということが国民多数の考えだったのですが、今日では絶対主義の成立とみるかブルジョア革命としてみるか、この二つのうちのどちらかをとる以外に明治維新の性格はないような風潮であります。

この絶対主義かブルジョア革命かという二者択一のとらえ方は、唯物史観にもとづく概念規定の見本のようなものであります。今日ほとんどの日本史研究家が「科学的維新観の確立」ということで、どちらかの観点に身を置いて発言している現状です。しかし、だからといって私たちは明治維新の性格を、この二つのうちのどちらかで片づけるわけにはいきません。それ

らはあくまで一つの理論的仮説であつて、それ以上のものではないという歴史学の初歩的知識をここで想いおこさなければなりません。唯物史観という一つの理論でもつて、歴史を安易にわり切ってしまうことは非常に危険です。「科学的」ということばに振りまわされずに、私たちはいちど立ちどまつて、どうしてこのような規定づけがおこなわれたのかその理由を考えてみなければなりません。

そもそも明治維新が絶対主義革命であつたか、ブルジョア主義革命であつたかという論争は、実は日本の革命の戦略をめぐる論争だったのです。すなわち、一九二七（昭和二）年および一九三二（昭和七）年に、コミンテルン（国際共産党）が日本共産党に出した革命戦略方針——いわゆる二七年テーゼと三二年テーゼの理解についてのマルクス主義者のあいだの意見対立から発したものでありました。当時も今もマルクス主義者たちがいかにこのテーゼに忠実であるか、マルクス主義の古典的名著といわれる『日本資本主義発達史』を書きつつあつた野呂栄太郎が、二七年テーゼを途中で読んで自説を訂正したことからもわかるように、テーゼの絶対化という権威主義はコミニスト共通にみられるパターンのようなです。この政治的実践的なテーゼをそのまま歴史研究の基準にすえて、どうして「客観的」で「科学的」だといえるのでしょうか。変革の立場に立つから、民衆の立場に立つから客観的でありうるというふうに常にコミニストは主張しますが、相対立する階級的立場の一方に立つことがどうしてその歴史を客観

的にするのか。自己の立場を、自己の政治性・党派性を徹底的に意識し、批判するところにしか客観性に通じる道はないと思いますが、この点いまだに納得のいく説明はなされておりません。

「天皇制」について

さて、革命闘争の目標を封建的絶対主義勢力である「天皇制」におくか、国家独占資本主義におくかによって、明治維新を絶対主義の成立とみるか、ブルジョア革命であったとみるかの規定づけがおこなわれているのです。歴史研究があつて、その結果として闘争目標が出てきたのではなく、その逆であつたのです。この「天皇制」ということはコミニニストの造語で、ヨーロッパの「君主制」と同一視したことばです。日本人は戦前までこんなことばは使用しませんでした。国民には歴代天皇への崇拜、親近感があり、「制」などという政治的システムの中に天皇をおいて考えるということはしませんでした。だからたとえ悪政がおこなわれても、それは側近とか政治家がダメなのであつて天皇には罪はないと受けとめてきました。これは国民の常識でした。ところが明治維新の成立を絶対主義国家の成立ととらえれば、ヨーロッパでいえば十七・八世紀のフランス、ブルボン王朝のごときものが日本に成立したということになり、ルイ十四世を処刑したフランス革命のように、「天皇制」を打倒するブルジョア革命(市民革命)が

おこなわれなければならぬということになる。したがって現代日本の革命は、第一段にはこの「天皇制」を暴力革命の対象にするプロレタリアート（労働者階級）によるブルジョア革命がおこなわれ、第二段ではプロレタリアート独裁への社会主義革命が行われなければならない。これが明治維新を絶対主義の成立とみる『日本資本主義発達史講座』の執筆者、野呂栄太郎・山田盛太郎・平野義太郎・羽仁五郎・服部之総たちの立場で「講座派」とよばれました。これに対し、明治維新は絶対主義体制を倒した、不徹底であったとはいえずブルジョア革命であり、現代の国家権力はブルジョアジーの権力であるから、その革命は、プロレタリア独裁への社会主義革命としておこなわれなければならない。それゆえ、独占資本の打倒に重点をおく。この見解を支持したのが櫛田民蔵・大内兵衛・向坂逸郎・土屋喬雄らで山川均の雑誌『労農』によつたので「労農派」とよばれています。

さて、この「天皇制」を絶対主義だといったそもそものはじまりは、三二年テーゼです。

「日本天皇制は、いっぽう主として地主なる寄生的封建的階級に依存し、他方急速に富みつつある貪欲なブルジョアジーに依存して、これらの階級の上部に永続的なブロックをむすび、かなりの柔軟性をもって両階級の利益を代表しながら、同時にその独自の相対的に大いなる役割と、わずかにえせ立憲的形態でかくおおわれているにすぎぬ、その絶対的性質を保有している」(三二年テーゼ)

この文章は、エンゲルスのひきうつしで有名です。エンゲルスは、絶対主義が貴族とブルジョアの均衡によって成立したという、絶対主義均衡論をとる。テーゼはこの貴族を地主にかえただけなのです。そうすると絶対主義とは、領主の一派が国家権力を組織する時代のことですから、日本では「天皇制」の高級軍人・高級官僚が、同時に地主であり、地主である資格によって高級官職をもたねばならぬことになるのですが、日本にはそういうことはなかった。帝制ロシアのように宮廷貴族と大地主が皇帝ツァールの支柱ではなかった。ロシアの地主は王権を組織していたが、日本の地主は組織していなかった。地主といってもそのちがいはいろいろあるわけですが、三二年テーゼはこのロシアと日本のちがいを見落したのです。従ってツァーリズム(帝制ロシア)を絶対主義だとみても、日本の「天皇制」を絶対主義だとみるのはまちがいです。

唯物史観から見た明治維新

唯物史観によれば、歴史の発展は原始共産社会・アジア社会・古代社会・封建社会・資本主義社会・社会主義社会の六つの段階を規定しております。社会主義社会を歴史の到達目標として考えていますから、唯物史観に立つ人々は、自分の属する国家が、この発展段階のどの段階にあたるかということが革命のための主要課題となる。

この發展段階説によれば、絶対主義社会は純粹封建社会から資本主義社会への過渡時代にあられる社会ということになり、しかも資本主義社会ではなくて封建社会の後期に属する社会ということになる。だから明治維新で成立したものは絶対主義社会だと主張する一派は、ブルジョア革命によって倒されたあのフランスのブルボン王朝が絶対主義社会であり、それはすなわち日本の「天皇制」であるというきわめて安易なとらえ方となつてあらわれてくるのです。だが日本の封建社会とどこの国の封建社会が共通点をもっているのか。日本の封建制と比べるといつても、何と、どういふ目的で比べればよいのか。生活感情のちがひ、社会意識のちがひ、各国の特色は多様であります。西洋封建社会の専門家である増田四郎氏は「日本の場合には、ほとんどすべてのことがすぐれて一國封建制という体制であり、東アジア地域をおおう共通性というものは何もありません」、「それゆえマルクス主義史観などという生産様式という側面だけから問題にしますならば、それはいちおう比較が可能でしょうが、政治・法制・経済・社会の全体を総合的に比べるとなりますと、これはもうそれぞれの研究の分野だけではどうにもならない。」（『世界的にみたヨーロッパと日本』）とその難かしさを嘆いておられます。

結局、絶対主義革命かブルジョア革命かという規定づけは、要するに明治以後の日本がヨーロッパ史のどの段階にあたるかという議論にすぎません。しかし、日本はそう簡単にヨーロッパ史の發展段階にあてはまるものなのか。明治維新をブルジョア革命と比較するのではなく、

ブルジョア革命が倒したところの絶対主義国家の成立と比較すべきだとする絶対主義論者は、比較の対象を一段階も過去にさかのぼらせているわけです。一九世紀後半の明治維新を一七・八世紀のブルジョア革命と比較するのさえ無理があるのに、それをさらに二世紀もさかのぼらせて、イギリスのチューダー王朝やフランスのブルボン王朝が出てくる時期と照応させようとするのです。これがどうして「科学的」方法といえるのでしょうか。戦後の維新研究の代表作といわれる遠山茂樹の『明治維新』では、明治の新政権をつぎのように評価しています。

「それは十四・五世紀のヨーロッパに現われた等族会議をもつ身分制国家（純粹封建国家から絶対主義国家への過渡的形態である）に對比せらるべきものであったともいえよう。」「維新政権は、かの身分制王制より、より一層純粹封建的性格の強い、従ってそれにまつわる古代的性格をすら残存し、ないし復活せしめられている種類のものであった。」

遠山氏によれば、日本の社会は「身分制国家」として断罪され、「古代的性格すら残存」するといふとらえ方である。「身分制国家」とはイギリスのプランタジネット朝（一二五四—一三九九）の後期であり、フランスでは三部会の召集（一三〇二）の時期となる。明治維新がブルジョア革命であるかどうかなど、ここでは問題にもなりえない、大変な飛躍です。

遠山氏は、マルクスが日本の江戸時代の社会を、「純粹に封建的な社会」と指摘したのに左右されたのでしょうか。江戸時代が純粹封建制ならば、その次にあらわれた社会組織はヨーロッパ

ツパでは「身分制国家」であったから、明治維新によって成立した社会を「身分制国家」とみなしたのでしようか。マルクスの『資本論』（一八六七）第一巻第二十四章注に「日本は、その土地所有の純封建的な組織とその発達した小農民経営とをもって、多くのブルジョアの偏見によって書かれた我々のすべての歴史書よりもはるかに忠実なヨーロッパ中世の像を示す」という有名なことばがある。マルクスはこのことばを基礎に、日本の鎌倉時代から幕末までの時代を考えたのですが、日本の研究者は、徳川幕府の幕藩体制こそ、マルクスのいう純粋な封建体制であるとす。

西洋人の日本観

ところで、マルクスは江戸時代の日本をどれほど理解していたか。彼はドイツ人ケンペルの『日本史』（一七二七）を読んだのかもしれない。なぜなら日本の開国以前の西洋人の日本研究でケンペルによらない者はないといわれていますから。モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ、カント、マルサスなどの学匠が彼によっており、スペンサーにいたるまで影響を与えたといわれています。しかし彼の『日本史』は、日本政治史の全体をきわめて不完全ながら記述したが、その用いた材料は粗雑な民間の通俗年表にすぎなかったし、日本人のバビロン起源説などとんでもないまちがいを犯しています。このケンペルの『日本史』と、オランダの東イン

ド会社創業発展誌に収められた日本見聞録を利用したといわれるフランス啓蒙思想家のモンテスキューの『法の精神』(一七四八)では、政体を共和・君主・専制の三種にわけ、専制政体をもっとも悪くいい、日本をもっともひどい専制政治の国家であるとみています。共和政体では徳性を必要とし、君主政体では名譽を必要とするのに対して、被治者の服従を要求する専制政体は、恐怖を要求する極度の専制であって、刑罰は過度に達し、専制主義自体をすら腐敗せしめたというのが彼の政治論だった。

「日本では殆んどすべての犯罪は死刑を以て罰せられる。なぜなら日本皇帝(『將軍』)の如き偉大な皇帝に対する不服従は非常な犯罪なのだから。問題は犯人を矯正するにあるのではなく、君主の復讐を(法を守らぬ者に対して)為すにあるのだ。これらの観念は奴隸制の結果であり、そして何より皇帝がすべての財産の所有者なるが為、殆んどすべての犯罪は直接にその利益に反することになる、と云う事実に由来する。役人に向って嘘をつく者は死刑に処せられる。これは(人間本来の)自然的防衛権に反することだ。犯罪と思われぬものもここでは嚴重に罰せられる。たとえば賭博に金を賭ける者は死刑に処せられる。」(第六篇第十三章)

ここではケンベルの『日本史』が刑罰の苛酷という悪い方面のみで利用され、日本は乱暴きわまる法がおこなわれていた野蛮な国として描かれている。

幕末の日本にやってきたイギリス初代公使オールコック(一八〇九〜一八九七)は、『大君の

都』のなかで「読者は、われわれの祖先がプランタジネット王朝——イギリスの王家（一一五四—一三九九）——時代に知っていたような封建制度の東洋版を、よく理解することができであろう。われわれは、一二世紀の昔にまいもどるわけだ。なぜなら『現在の日本』の多くの特質に類似したものは、一二世紀にしかもとめられないからである」（第五章）と述べ、日本をマダニカルタ以前のイギリスのように考えている。

西洋人は、なぜこのように日本人をおくれた国として位置づけたのだろうか。どうも日本人の風俗をみて、——チョンマゲ、キモノ、大小の刀、草履ばき、小屋のような粗末な家、幼稚にみえる農法、丁寧きわまる路上の挨拶などをみて、異様で未開にうつったようです。また、西洋人にとって東洋には自由がない、東洋には変化がないというのが彼らのきまり文句になっていたようで、日本は地理的には東洋の一国であり、それも極東に属していたことがこのような誤った推察をおこなわしめたようです。日本と西洋を比較して、どっちがどれだけ進んでいるとかおおくれているとか、社会進歩の法則にてらして位置づけする作業は、たいへん難かしい危険な仕事なのです。マルクスは原始共産から社会主義社会へいたる発展段階を規定しましたが、必らずそのとおり発展するとは限らないわけです。「アジアは一つ」といいますが、アジアの中でさえ、諸国の歴史発展は、まったくばらばらで、それぞれの国が、別々の個性を形成しています。歴史は人間の歴史ですから比較できる面もあります。しかし例えば飛鳥文化とゲ

ルマン文化、仏教文化とキリスト教文化、これをどうやって比較し、どちらがどれだけ進んでいるか、おくられているかなどどうして結論づけられましょう。こうした客観的・分析的方法には、結局、限界があるのではないのでしょうか。先程のオルコックですら次のように言っています。「日本人の外面生活・法律・習慣・制度などは、すべて、一種独特である。はっきりした特色がある。中国風でもなければ、ヨーロッパ的でもないし、純粹にアジア的ともいえない。日本人は、むしろ、ヨーロッパとアジアをつなぐ鎖くさりの役をしていた古代世界のギリシャ人のように見える」と。日本人が古代ギリシャ人のような存在かどうかは問題があるにしても、日本がアジア的でもなければヨーロッパ的でもない、独自の歴史をつくってきた国であることを指摘したオルコックの眼識はさすがです。

以上みてきたような、西洋人の日本観が変わっていくのは、明治維新を境にしてであります。ベルツの手紙(明治九年)をみてみましょう。

「あなた方は、大体次のようにお考えになって然るべきでしょう。すなわち日本国民は、十年にもならぬ前まで封建制度や教会、僧院、同業組合などの組織をもつわれわれ中世の騎士時代の文化状態にあったのが、昨日から今日へと一足とびに、われわれヨーロッパの文化発展に要した五百年たっぶりの期間を飛び越えて、十九世紀の全成果を即座に、しかも一時にわがものにしようとしているのである」と。

この手紙にあるように、開国以後の日本の急速な発展はどうして起りえたのか。また、なぜ日本がインドや中国のような植民地にならずにその危機を克服しえたのか。次にそれを考えてみましょう。

維新の原動力

唯物史観に立つ井上清は『日本現代史』（第一巻）のなかで、

「もし六七年（慶応三年）の討幕派に断乎たる決意がなく、『公議政体論』という美名のもとに一時の妥協がなされたら、その間に徳川幕府はフランスの援助のもとに絶対主義への準備をすすめ、やがて妥協は破れて、幕府を盟主とする江戸軍閥と薩長を盟主とする京都軍閥とが、仏・英の後楯のもとに割拠対立して、日本は清末ないし辛亥革命後の中国に類する軍閥割拠の時代になったかもしれない」と仮定の危機を述べているが、六七年以前においてはこの危機は十分ありえた。しかし、それが「六七年（慶応三年）の討幕派の断乎たる決意」のもとにこの危機は回避され、日本民族の独立と統一が完成したわけですが、その理由を井上清は、前年六六年（慶応二年）に起った全国的なうちこわしと一揆という「反封建闘争の昂揚」が「幕府の長州再征をも失敗せしめ、反幕派をだんこたる討幕派たらしめた直接の起点であった」と証明しようとする。しかし、これは無理です。あまりに階級闘争という歴史法則にとらわれた分析でま

ちがっています。

私はこの危機回避の理由は、やはり一八六六年の薩長連合の果たした役割と、次に翌年の大政奉還という幕府自身の自己否定のおこりえた理由をまず考えなければならぬと思います。これは歴史家の常識だと思います。そうすれば、歴史を動かした原動力は「百姓町人」とか「下級武士」とか「郷土」とかそういう階級として一括されるものではなく、あきらかにこの場合は坂本竜馬とか中岡慎太郎、あるいは徳川慶喜などの多数の個人であり、彼等が果たした歴史的役割を無視することはできませんし、また彼らの勤皇心をぬきにして明治維新の研究はありえません。私がここでお話したかった点もここにあります。

幕府はフランスの援助のもとに幕権を強化し、長州再征の気運を高めた。しかしここで薩摩は長州を見殺しにはできなかった。ここで長州が滅びれば、次の運命はこっちだと痛感したからです。それほど、このころの薩長間は反幕・開国という線では共通面があった。しかし連携できる可能性はあっても、ここで積年反目してきた両藩が、連携に踏みきりかけはほとんどなかった。それゆえこの時点で果たした坂本竜馬の役割こそは、一般に評価される通りやはり決定的なものであったと言えましょう。こうして薩長の連合が忽ちに実現し、そのため幕府の長州征伐は失敗し、外国の内政干渉を許さぬままに一気に大政奉還・王政復古の大号令・戊辰の役と旧幕府勢力はたてつづけに圧倒されて行った。このことが、日本が植民地化をまぬ

がれた最大の原因であることに想到すれば、ここで坂本竜馬という一人物の果した役割がいかに重大であったか多言を要しますまい。最後にその劇的なところを叙した維新史（昭和十四年と十六年、維新史編纂事務局刊全六卷）の一節を掲げ終りにしたいと思います。

「十月二十五日、小松帯刀・西郷吉之助は兵を率ゐて鹿児島より上京した。両人は京都の形勢逼迫せるを見ていよいよ薩長提携実現の機到れりとなし、薩州藩士黒田清隆を派して、木戸貫治（桂小五郎のこと）を京都に迎へ、共議する所あらんとした。十二月清隆は下関に至り、たま／＼同地に在った坂本竜馬と共に貫治の上京を促したのである。

貫治は、薩州藩より賓客として優遇を受け、西郷吉之助・桂右衛門・大久保一藏など藩有力者と小松帯刀の寓居に会して、談深更に及んだ。而も滞留十数日に及ぶも、未だ互に胸襟を開いて薩長提携の具体的協議に入るに至らなかつた。蓋し薩長何れの側も自藩の面目上より自重して、自ら進んで連盟を提議するを躊躇したのであらう。貫治は此の有様に深く失望し、將に辞去して帰藩の途につかうとした。

会々此の際坂本竜馬は下関より上京し、会談の進捗せざるを知って、憤然色をなし、貫治を責めて曰く、余が擲身尽力するは、決して薩長兩藩の為ではない。只天下の形勢を想察し、夢寐（ねるひま）にも意を安んずる能はざるが故である。然るに兄等は藩情多難の際百里の外に出で、薩藩の要路と会同しながら、空しく十余日を過して相去らんとしてゐる。余は

其の意を了解するに苦しむ。何ぞ区々の感情を脱却し、丹心(たんしん)(まごころ)を吐露して、天下の為に将来を協議せざるかと。小五郎是に答へて、

『今日薩州の地位自ら長州と異なるもの有り。誠に之を語らば、薩州は公然天子に朝し、薩州は公然幕府に会し、薩州は公然諸侯に交る。自ら天下に対し公然尽す所有る可し。我長州の如きは、天下皆敵、旌旗(せいひ)はた己に四境に迫る。一藩の士人只心中に安んずるものを以て、一死之に当らんとす。固より活路なし。長州の立つところ危険の極と云て可なり。而て長州人今口を開き、薩州と共にせん事(対等の同盟)を謀る。彼をして我危険の地に誘ふ。言はずして自ら助援を乞ふに似たり。是長州人の心とせざる所、余甚だ之を辱づ。薩州皇家に尽す所有らば、長州滅すると雖ども亦天下の幸なり。余決して口を開く能はず。』

(木戸孝允自叙)

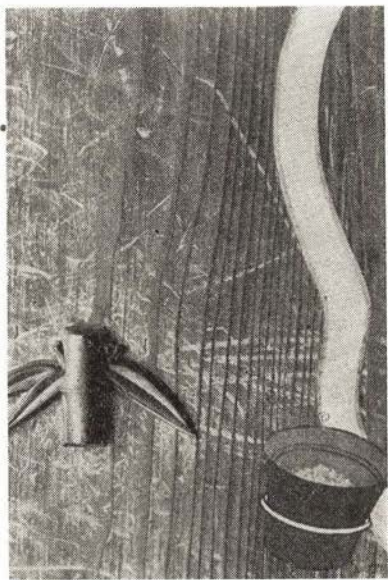
と告げた。仍って竜馬は転じて薩藩側の説得に努めた。為に会談は俄に進展し、帯刀・吉之助は竜馬同席の上、貫治と擬議した結果、遂に薩長提携の密約六箇条を締結するに至った。これ慶応二年正月二十一日(或は二十二日と云ふ)の事であった。」

(神奈川県立横浜翠嵐高等学校教諭)

事を論ずるには己れの地、己れの身より見を起すべし

——松陰、玄瑞の往復書簡——

小柳 陽太郎



玄瑞の書簡

松陰の返書

事を論ずる姿勢

囚徒は囚徒より起すべし

積誠

魂の火花

玄瑞の書簡

安政三年六月、吉田松陰のもとに、後に松陰門下の俊秀と謳われた久坂玄瑞が入門いたします。本日はその入門の契機となった松陰、玄瑞の往復書簡、殊に松陰先生の第一回目の書簡を中心に読んでまいりたいと思います。当時松陰先生二十七歳、下田でペルリの軍艦に乗りこもうとして失敗、自首して江戸の伝馬獄につながれ、後、郷里の萩に護送されて野山獄にいること一年、玄瑞からの書簡を受けとった時は杉家の一室に幽囚の身でありました。

一方、久坂玄瑞は当時未だ十七歳の少年でしたが、たまたま肥後の熊本に遊び、その地で松陰の友人でもあり、勤皇の志士として重きをなしていた宮部鼎蔵に会うのですが、その折是非松陰について学ぶよう奨められます。郷党の先輩としてかねがね松陰を心から慕ってはいたものの、玄瑞は未だ松陰に直接指導をうけたことはない。熊本から帰るや、直ちに松陰のもとに手紙を送って指導を乞うとともに自らの信条を披瀝するわけです。詳しく引用する時間はございませんが、ともかく現在の日本は「綱紀日に弛み、土風日に頽すたれ、洋夷は日に跳梁し」乱脈を極めていゝ。夷狄は専ら貿易を乞うてやまぬが、隙あらば我を征服せんとする彼等の本心はあまりにも見えすいていゝ。しかも之に対して幕府は或る程度の貿易はやむを得ないという弱腰に終始し、危機は目前に迫っている。この際とるべきは妥協にあらず、断乎たる決断でなけ

ればならぬ——。ここで玄瑞は昔、弘安の役の折、元の使を斬って国威を示した時宗の勇氣を讃え、「嗚呼我に男子国の称あるも宜ならずや」と言い、我々もまた貿易を乞う夷狄に対しては「国法禁あり」として之を拒むべきであり、もしそれでもなお彼が貿易を強いるようなことがあれば「則ち宜しく其の使を斬るべし」と断定いたします。その決断あつてはじめて国民の士氣は挙り、国家はその破局をまぬがれることが出来るであらう——僅か十七歳の少年ながら実に颯爽たる高風を偲ばせる文章だと思ひますが、松陰先生は之を実にきびしく批判されます。それがここでとりあげる「久坂生の文を評す」という一文です。

松陰の返書

議論浮泛にして思慮粗浅、至誠中よりするの言に非ず。世の慷慨を装ひ、氣節を扮よそおひて、以て名利を要むる者と何ぞ異ならん。僕深く此の種の文を惡み、最も此の種の人を惡む。僕請ふ粗ぼ之を言はん。兄幸に精思せよ。

あなたの議論は根のない、上っ面だけの言葉であつて、思慮は粗浅、真心の中から生れた言葉とは思えぬ。この世にはいかにも世の乱れを嘆き、自分にはすぐれた氣節があるような顔をしながら、結局は自分の名誉を求め、利を求めようとするような手合いが、うようよしている

が、そういう者と一体どこが違うというのか。自分はこの種の上っ面だけ元気のいいような文を悪み、このようなことを売り物にする男を悪む。ではなぜこのようなことを言うのか、それを大略申し上げたい。「兄幸に精思せよ」——よく考えてくれというのですが、この「精思」という言葉を松陰先生はよく好んで使われます。「精」は勿論くはしいということですが、それはただ論理的に緻密であるということではなく、自分の身にひきくらべながら、自分の体験を通してという意味に使われている。自分の胸にしっかり手をあてながら考えよと言われるのです。

凡そ国勢を論ずる者は、上は則ち神后、下は則ち豊公にして可なり。時宗は季世に生れ、急変を慮つて、一着偶々おもんばか中る、固より亦一時の傑あたなり。然れども以て国勢を論ずるに足らざるなり。

対外的な国のあり方を考える者は、三韓を平定された神功皇后、朝鮮に兵を進めた豊臣秀吉、その二人を考けておけばいい。北条時宗は「季世に生れ」——季世とは末の世という意味です。神功皇后や秀吉は、国内の溢れるような力をもって外に乗り出して、力強い外交を展開することが出来たが、時宗の時代はあくまで受け身の時代だった。それを季世と言ったのでし

よう。その季世に生れたが、慌しく変化する国際情勢の転機を正確にとらえたその判断は、ピシットつぽにはまった。正しかった。「固より一時の傑なり」——すぐれた人物だと認めていますが、それには「一時の」という条件がついている。一時は永久に対するもの、すぐれてはいるが、永久に人の鏡になるというほどの人物ではないというのでしよう。従ってこの人を模範にして国勢を論ずることは適当ではないと言われるのです。現在の日本は如何にして国力を外に伸ばすかを考えるべきであつて、徒らに内にこもるべきではない——当時の他の論策に見られる松陰先生の、国力伸張の構想からしても、その頃先生の心を大きく占めていたものは、神功皇后の、豊太閤のイメージであつたと思われまゝ。だから時宗を模範とする玄瑞の考えを退けられるのです。

使を斬るの挙、これを癸丑きちゆうに施すは則ち可なり、これを甲寅かういんに施すは則ち晚おそし、而れども尚ほ或は及ぶべし。乙卯いつぼうを過ぎて、今日に至りしは、則ち晚おそきの又晚おそきなり。

だからと言って自分は使を斬るということに全く反対なのではない。癸丑は嘉永六年、ペルリ来航の年です。その年に斬るなら、それはよかつたかもしれぬ。だがその翌年、甲寅（安政元年）ではもう晚い。その年の三月、日米和親条約は締結され、その後八月にはイギリスと、十二月に

はロシヤと同じような条約を結んでおります。まして乙卯（安政二年）を過ぎて今日（安政三年）に至っては全くの手遅れではないか。

大抵事機の去来するは影の如く、響きの如し。往昔の死例を執りて、以て今日の活変を制せんと欲す。難きかな。謂ふ所の思慮の粗浅とは是れなり。

「大抵事機の去来するは影の如く、響きの如し」という言葉は美しい。国際情勢に限りませんが、すべての物事は余程心を澄まして耳を傾けていないと、忽ちにして取り逃してしまふ。これは単に政治に限らず、人生すべてそうなのです。例えば今こうして合宿を営んでいますが、この合宿を行っている今日の日がお互いの人生にとってかけがえのない大切な日になるかもしれない。いま目の前を影の如く、響きの如くに、もう人生に二度と訪れない何かが通りすぎていくかも知れない。それをとらえる力があるかないかによって、その人の一生は決まるのです。国の政治もまた同じだということです。「往昔の死例」——過ぎ去った昔の死んだ例をそのままに、「今日の活変」——現在の生きて動いている情勢に対応しようとしてもそれは無理だ。死例というのは別の言葉で言えば固定化された概念と言ってもいい。こういう場合はこうすべきだというように法則化されたもの、それでもって、日々動いてやまない現実を断ち切る

うとしてもそれは駄目だ。そんなことでは生きて人生に触れることは出来ない。相手が生きて
いる以上、こちらも生きていなければいけない。

以上で前半が終ります。「思慮の粗浅」ということは、結局生きた心をもって、世の中を見て
いないではないか、ということになるかと思えます。

事を論ずる姿勢

天下為すべからざるの地なく、為すべからざるの身なし。但だ事を論ずるには当に己れの
地、己れの身より見を起すべし。乃ち着実となす。故に身將軍の地に居らば当に將軍より起す
べし。身大名の地に居らば当に大名より起すべし。百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起
す。豈に地を離れ、身を離れて之を論ぜんや、今吾兄は医者なり、当に医者より起すべし。寅
二は囚徒なり、当に囚徒より起すべし。

この世ではどのようなことも出来るし、誰でもやろうとさえすれば何でも出来る。ただ事を
論じる場合には、自分がいま立っている立場、自分という人生そのものから考えていかなけれ
ばならぬ。考えの中に自分自身が生きていなければならぬ。そういう考え方が「着実」という
のだ、地に着いた真実の考え方だということです。だから自分が將軍であれば將軍という立場か

ら、大名であれば大名としてのあり方から、農民は農民としての、乞食は乞食としてのあり方を通してものを考えねばならぬ。「豈に地を離れ身を離れて之を論ぜんや」ということです。玄瑞、お前は医者之家に生まれた、だから医者という立場で考えねばならぬ。寅二は吉田寅二郎、松陰自身のことです。「寅二は囚徒なり」従って囚徒としての立場でものを考えるのだ。そういうところを離れて、観念的なこと、威勢のいいことを言っても何の意味もないことを、自分は身にしみて知っている。

必ずや利害心に絶ち、国のみ、君のみ、父のみ、家と身とを忘れ、然る後家族之れに化し、朋友之れに化し、郷党之れに化し、上は君に孚まこととせられ、下は民に信ぜらる。ここに於てか將軍為すべきなり、大名為すべきなり、百姓乞食も為すべきなり。乃ち医者囚徒に至るまで、為すべからざる者あるなし。是れを之れ論ぜずして傲然天下の大計を以て言を為す、口焦げ唇爛るとも、吾れ其の裨益あるを知らざるなり。謂ふ所の議論の浮泛とは是れなり。

そういう着実な考えをすすめて行けば、利害の念は心から消え、ただ国のこと、君のこと、父のことだけが自分の心を占めるようになるはずだ。こうして私心が洗い流された時にはじめて、家族の人も、朋友も、さらには村里の人たちも、その人の人格的な感化の中に包みこまれ

ていつて、主君から、すべての人から、真心ある人としての信頼を勝ち得るようになるのだ。こうしてはじめて、將軍として、大名として、百姓、乞食として、さらには医者、或いは囚徒としてなすべきことが実現されていくといふのです。このポイントを押えず、「傲然天下の大計を以て言を為す」ようなことであれば、この世にとって何一つプラスにはならないと断言されるのです。これが最初に述べた「議論浮泛」といふことの内容なのです。

聖徳太子の十七条憲法の中に「信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。其れ善悪成敗かなざら要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは、萬事悉く敗る」といふ言葉があります。が、「上は君に孚とせられ、下は民に信ぜらる。ここに於てか云々」と続いていく、そのつながり方が全く軌を一にしていることに心をとめて下さい。政治は汚いといふ、血なまぐさいといふ。聖徳太子はその醜さを身にしみて感じておられた筈です。だがそれなら真心というようなことは、政治とは縁のない感傷にすぎないか。太子はそうは考えられなかった。現実はいかに醜くとも、その中で何かが成就されるためには「信」が裏打ちされていないといけない。「群臣共に信あらば、何事か成らざらむ」と溢れるような確信を太子は述べておられるのですが。松陰先生の言葉の中に見えるものも全く同様の確信と言えましょう。

囚徒は囚徒より起すべし

では松陰先生は「囚徒は囚徒より起すべし」と言っておられるが、先生は一体どのようなことをされたのか、囚徒としてどのような生き方をされたのか、その具体的な例については、先生の伝記をたどっていけば実にさまざまなことが出てくる。ただここではそのうちの一つの例を申し上げておきましょう。

松下村塾では久坂、高杉、入江らの維新の俊秀が育った、或は伊藤、山県ら数多くの明治の元勳を輩出している。松陰先生の偉大さは多くそのような面から評価されているようですが、私はそのような人物を多く生み出したからという、いわば実績の面からではなく、もっとその奥にある先生の教育的な精神、教育という言葉を使うことすら憚られるほどの、自らの生命をその隣人に点火せしめずにおかぬ精神、あるいは隣人の生命と自らの生命を、わかちがたい一つのものとして実感する人生態度、そういうものを松陰先生の生涯の中にひしひしと感じるのです。だからこの人物を育てていけば将来必ず何かの役割りを果たさだろう、だから教育するのだという、そのようないわば効果を狙う態度は実に稀薄だった。だからこそいかに教育を施しても何の役にも立たない、生涯、実社会に帰ることすら約束されていないような囚徒を相手に懇々として説いてやまなかつたのです。それが先生の「囚徒より起す」第一歩でした。こうして「講孟余話」に代表される、すばらしい獄中での教育活動が展開されるのですが、安政二年十二月、獄を免ぜられて家に帰った先生は、獄中の同志のことが思われてならない。当時の

牢獄は現代のように、刑期が終れば社会に帰るといふシステムも確立していない、何時まで獄の生活を続けなければならないのか、それすら保証されぬ暗い生活でした。それで先生は獄中の同志をどうにかして救ってやりたいと思う。安政三年の三月ごろからそのような運動を展開する。その折書きとめた文章が「野山獄囚名録敍論」です。一寸読んでみましょう。

「甲寅（安政元年）十月、余罪ありて獄に繋がる。時に余と狂狷（かんへい牢獄）に列する者凡そ十一人なり。余詳かに之を問ふに、其の繋がること久しき者は数十年、近き者も三、五年なり」実際に一番長い人は四十九年、七十六才という人がいたわけです。「皆曰く、吾が徒終に当にここに死すべきのみ、復た天日を見るを得ざるなりと。余乃ち嗟愕して（歎き、驚いて）泣下り、自ら己れも亦其の徒たるを悲しむに暇あらざるなり」自分もその同じ囚人の仲間であることに思ひいたる余裕がなかった——ここに先生の面目躍如たるおもいがいたします。「ここに於て義を講じ、道を説き相与（とも）に磨励して以て天年を歿へんと期す」先程申しましたように孟子の講義などをつづけるのです。ところが「己にして歳余、余遽かに恩命を蒙り、獄を免されて家に帰り、復び父母を拜し、弟姪を此の世に見るを得たり」安政二年十二月、野山獄に入ってから一年二ヶ月目のことです。ところが「前の十一人の者繋がれて未だ免（ゆる）されざるを以て、食を得ては則ち懐ひ、衣を得ては則ち懐ひ、寒夜爐に当りては則ち懐ひ、晴日庭を歩しては則ち懐ふ。」実に切々たる先生のお心が迫ってくる文章です。「懐ひの心を結ぶや、未だ嘗て、一日

も積然たるを得ざるなり。」彼らを思つて悲しいおもいに閉ざされてしまふと、心が晴れわたることは一日もないのだ。「嗟、余の大罪にして猶ほ獄を免さるるを得たり。而るに前の十一人の者、何ぞ独り得ざる」自分に比べれば軽い罪なのにどうして免されないのか。「且つ我は繋がるると雖も独り自ら楽しむことあり。而るに前の十一人の者は未だ必ずしも尽くは是れあらず、則ち其の心何如ぞや。」自分は獄中にあつても道を思い、文を読み、或は古人を偲び、一人で楽しむすべを知っている。しかしあの人たちは皆がそういう楽しみを知っているわけではない。その人たちの心を思えば胸が迫る。

以下省略しますが、このようにして釈放運動を起して、遂にその年の秋には大部分が免されることになるのです。吉田松陰年譜の安政二年十月十四日に「野山獄滯囚、過半数放免せらる。是れ松陰の尽力大なるに依る」とありますが、この一節の中に、さまざまにくだかれた先生のお心がにじみ出ているように思われます。この前後の経緯を思えば「寅二は囚徒なり、当に囚徒より起すべし」の一節が実に鮮やかに蘇つてまいります。玄瑞に手紙を書いたのは、その野山獄囚名録跋論」の筆をとつてから約二ヶ月の後なのです。玄瑞に与える言葉の中には、先生の切実な体験が裏付けられていることを知らなければなりません。

積 誠

且つ兄が身の任とする所、弓馬なるか、刀槍なるか、舟船なるか、銃砲なるか、抑々將たらんか、使たらんか。神後の時に遇はば能く武内たらんか、豊公の時に遇はば能く孝高よしたかたらんか。清正たらんか。

ここで松陰先生は玄瑞の果すべき具体的な役割を問うのです。使を斬れば当然彼我の間に戦火を交えねばならぬことになるだろう。その場合あなたは一体どのような役割を果すつもりか。弓馬か刀槍か舟船か銃砲か、或は將として戰場に立つか、外交官として国家の危急を救うか。神功皇后の時の武内宿弥の役を果すつもりか、豊臣秀吉の時に生きていたとすれば、黒田孝高(如水)か或は加藤清正か、そのいずれの役割を果すつもりか。一時の慷慨で事は片付くまい。問題はあくまでも具体的に処理されなければいけない。

家族朋友郷党の兄に従って節に死せんと欲する者計幾人ありや。兄の為に力を出さんと欲する者計幾人ありや。兄を助けて財を輸いたさんと欲する者計幾人ありや。聖賢の貴ぶ所は議論に在らずして、事業に在り。多言を費すことなく、積誠之れを蓄へよ。

節というのは死すべき時と考えていいと思いますが、あなたのために、あなたと一緒に死す

べき時に死んでくれる者は一体何人いるのか。あなたの為に力をつくしてくれる人は何人いるのか。あなたの為に経済的なバックアップをしてくれる人は何人いるのか。聖賢が古来大切にしてきたものは口先の議論ではなく、事業なのだ。事業というのは具体的な人生の事柄、人生そのものに直接にふれあうことと言ってもいいでしょう。すなわち何をなすべきか、その直接の具体的な事柄に心をくだくことが何よりも大切なのだ。「多言を費すことなく、積誠之れ蓄へよ。」これで書簡は終るのです。

それより一年のあと、安政五年七月、弟子の入江杉蔵が萩を発って江戸に赴く時、松陰先生は一文を書いて与えています。その最後に「天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所にあらず、其れ唯だ積誠之れを動かす、然る後動くあるのみ。」という言葉があります。積誠——真心を積み重ねる以外に道はない。先生の生涯を貫いたものがここにあることをしみじみ思わずにはいられません。

魂の火花

この手紙を受けとった玄瑞は直ちに反駁の文を書く。それが「再び吉田義卿に与ふる書」として残っています。

「六月六日辱かたじけなくも尊報を賜はり、読了して憤激、一言座下まおに白すことあらんとす。」とい

う書き出しですが、火を噴くような玄瑞の気魄が感ぜられます。先生が言われることはおかしい。今の日本に一番欠けているものは勇氣であり、決断ではないか。日本人の魂を奮い立たせるためには何が一番大切なのか、使を斬るという自分の真意はそこにある。先生は医者は医者としての立場でものを言えと言われるが、自分が一医者でありながら天下を論じることが如何に分を越えたことであるか、先生のお言葉がなくてもそれ位は、自分でもよくわかっているつもりだ。だがじつとしておられぬからこそこうして申し上げているのだ。先生ならばきつとわかつて下さる筈だ。そう思ったからこそお手紙をさし上げたのに、このようなご返事をいただいて実に残念でならない。先生がこのようなことを仰言るとはどうしても納得出来ない。もしこれが先生の御本心であるなら先日宮部鼎蔵が先生を賞めたこと、これまで自分が先生を豪傑だと考えたのはすべて誤りと言わなければならぬ。そして最後に「紙に臨んで憤激覚えず案を撃つ」——いたたまれぬおもいで覚えぬ机をたたいた、こうしてやり場のない自分の気持を示すのだ——これで返事は終わっています。

松陰二十七歳、玄瑞十七歳、その年齢をよく考えて下さい。十七歳の少年にむかって、松陰は全力をつくした手紙を書く、情けも容赦もない、一切の社交辞令を省いた真剣勝負のすさまじさが先程の手紙の中にはみなぎっていると云っていいでしょう。それに対して十七歳の少年が全く臆することなく堂々の所信を披瀝する。この二つの魂が激しく火花を散らす姿は、現代

のわれわれから見て誠に、目を瞠みはるものがあると云わなければなりません。

時間がございませんであとは簡単に申しますが、それから約一月ほどたった七月十八日、松陰は玄瑞への返書をしたためます。

「向むかに再書さいしょを辱おこす。疾速しやくに答を致すべくして、之を緩ゆるうせるは、敢あへて慢おこりしに非あり。」「すぐ返事を書かなかつたのは怠慢たいまんのせいではない。「足下そく軽銳けいにして未だ嘗あて深思しんしせず、僕の謂いふ所の遽にかに憤激ふんげき不屈ふくの言を為す。是れ口舌くわの能く諭さとす所に非あざるなり。」「言葉でさとしてだめだと思ったからだ。「然れども今己いまに月余日、足下の思或は熟じやくせしならん。因よって嘗試こころみに一言せん。」「だがもうあれから一月以上経たつた。あなたの気持も熟じやくして来たにちがいない。それで返事を書くのだと言う書き出しではじまるのです。詳しくは本文ほんぶんについて見ていただきたいのですが、結局あなたの言葉は「滔々千言、亦弁あなり。」「おしやべりにすぎぬ。」「一事として躬行こうこうに出づるものなく、一語として空言くうげんに非あざるはなし」すべてあなた自身の人生とは別のところから出ているにすぎない。こうして松陰の言葉は前にもました激げきしさで終おつています。

これに対して玄瑞は又返事を書く、七月二十四日、松陰が手紙を送ってから六日の後です。先生は私の心を開こうとして縷々お述べになるが、「不肖の惑はいよいよ塊結くわいけつす。一言なかること能はず」という書き出しです。結局平行線をたどるのですが、先生が自分を「慷慨を装

ひ、気節を扮ふ」者だと言われても、自分は拒もうとは思わない。あるいはそうかも知れない。しかしそれでも言わないではおられないから言うのだ——。

この手紙が七月二十四日ですが、その翌日二十五日、松陰は今度は折返しに返事を書きます。この手紙についてはいろいろの解釈もあるようですが、一言で言えば「参った」ということとです。今度の御手紙を読んでこれまでの疑はとけた。アメリカの使を斬るというあなたの考えは、決していい加減な気持から出たのではないということもわかった。あなたを「空虚装扮の徒」と考えたのは間違いであった。「願わくは足下決然として自ら断じ、今より手を下して虜使を斬るを以て務めと為せ」思った通りやるがいい。だが、——そのあとが大切ですが、だかもしも「其の言をして酬いざらしめば」それが口先だけに終るならば、「僕輩と何ぞ扱ばん」、自分はアメリカに渡ろうとして失敗し、結局は獄に入れられてみじめな結果に終わってしまった。その俺と全く同じではないか。もしそうであれば「僕將に益々足下の空虚装扮を責めんとす。」あなたは口先だけの男だとして、いよいよあなたを責めようと思う。「足下尚ほ僕に向ひて之を反詰するや否や」それでもなお自分に反論しようとするのか。これで手紙は終り、これに対する玄瑞の返書は残っておりません。勿論玄瑞はアメリカの使節を斬ることもなく、その後直ちに松陰の門下に入ることになるのです。松陰と玄瑞のどちらが正しかったか、私はいまここでそのようなことを問題にしようとは思わない。そんなことよりも、この二つの偉大な魂が

ふれあう時に散る火花のすさまじさ、それを皆さまと一緒に心の奥深くにきざみつけたいと思うのです。

明治維新は、このような魂のはげしい交錯の中から生まれてきたのです。一般には当時の志士たちが、崩壊する幕府体制の中で、新しい、理想的な世界を築きあげようとして力を注いできたと言うように言われていますが、実際はそのようなことではなく、今目の前に突きつけられた問題に対して、生命的に反撥し、或いはこれに反応を示していくという、そういう潑刺とした精神が、明治という時代をつくり上げて行つたのです。その最も典型的な精神のドラマを、この松陰と玄瑞の往復書簡の中に読みとっていただきたいと思えます。

（福岡県立修猷館高等学校教諭）

国を支えるちから

—孝明天皇「御述懐一帖」について—

夜久正雄



聽
·
雪·地
袋
引
手

今日は、孝明天皇がお書きになったという、「御述懐一帖」を中心に講義をすすめてまいります。孝明天皇は仁孝天皇のお子様にあたり、百二十一代の天皇でいらっしやいまして、明治天皇のお父様です。仁孝天皇はお風邪がもとのようですが、四、五日で急にお亡くなりになり、孝明天皇が御年十六歳で踐祚せんそされました。孝明天皇が亡くなられて明治天皇が踐祚されたのもちようど十六の御年で、また孝明天皇御自身も瘡癩ほうそうで急にお亡くなりになっていますので、明治天皇のお若い時と、孝明天皇のお若い時とはほとんど同じような環境のもとにおられたことが分ります。孝明天皇は幕末のあの困難を御一身にお受け止めになり、非常な御努力をなさった方ですが、その御苦勞の一端が「御述懐一帖」にあらわれています。天皇がお亡くなりになった時、お后で明治天皇の御生母であられる中山一位局いちいちのつぼねがその時の感想を父親の中山忠能宛の手紙の中に次のように書いておられます。「夫君天皇様は、御即位より崩御まで内憂外患の時代を御経験なさって、世間からはずいぶんいろいろと言われていらっしやるが、一日としてお心の休まれることはなかったのだ」と。このお言葉は孝明天皇御一代の御心勞を実によく表わしていると私は思います。

ここにとりあげました「御述懐一帖」は、孝明天皇が文久二年の四月にお書きになり、これを宮中の廷臣にお見せになって、天皇の御考えをお知らせになったのです。当時の内憂外患、ことに嘉永、安政の外交問題で日本が非常に危い状態になった時、天皇は日本がついにはイン

ドなどの覆轍を踏んで植民地化されるに至るのではないかという恐れを強くお感じになった。以来特に、天皇は御自分のお考えを次々に御自筆でお書きになり、お手紙として側近の大臣あるいは將軍あるいは水戸、島津、会津の藩主などに伝達していらっしやいます。国政に関するお考えを自由にお書きになって側近ならびに將軍、藩主たちに呼びかけられたので、維新史上の重大な事実であると思います。「御述懐一帖」もこのお手紙のひとつですが、この御手紙は当時廷臣にお見せになっただけで、写すことを禁じられたと、「近世日本国民史」に記されています。もし内容がもれると幕府から非常な弾圧が天皇に加えられるかもしれないからです。ごく側近の大臣家にだけ写しが伝えられたということでした。

御自筆の原本は東山御文庫にあるのでしょうか。では「御述懐一帖」を読んでまいります。括弧内は私の註で、句読点と振仮名とも私が付けたものです。

夫れ^そ聖人^{せいじん}に非^{あら}ざるよりは、内安^{うちやす}ければ必ず^{かならず}外の患^{うれひ}ありと。方今^{いま}、天下^{てんか}二百有^あ余年^{ねん}、至^{いた}平^{へい}に慣^なれ、内遊惰^{うちゆうだ}に流れ、外武備^{がいぶひ}を忘れ、甲冑^{かこう}朽^く腐^ふし干^{かん}戈^か(盾^{たて}と矛^こ)腐^ふ鏹^{せう}す。卒^{そつ}然^{ぜん}として夷狄^{いてき}の患^{うれひ}起^{おこ}り不^ふ能^なレ^お應^{おう}レ^ず之^を。終^{つひ}に癸丑^{みづのえ}(嘉永^{かえい}六年) 甲寅^{こういん}(安政^{あんせい}元年) の年^{とし}より有^あ司^し益^{えき}々^々駕^か御^ごの術^{じゆつ}を失^しし、事^{こと}、摸稜^{もりよう}(ぐずぐずして決断^{けつだん}しないさま) 多^{おほ}し。

「徳川時代二百数十年、この間に国民は平和に慣れてしまい、内は怠慢に流れ、外は武備を

忘れてしまった。そこにアメリカ、ロシアなどの諸国が日本に迫ってきたがそれに応じきれず、癸丑（嘉永六年、一八五三）甲寅（安政元年、一八五四）の年（ペリー、プチャーチン来航）よりは役人はいよいよ問題を整理する術を失い、決断できずぐずぐずしている場合が多い。」というわけです。当時孝明天皇は御歌を多く詠んでいらっしやいますが、（嘉永六年四十二首、安政元年百三十七首）その中のいくつかを読んでみます。

寄神祝言（安政元年三月十一日神宮御法楽）

ことの葉のたむけうけてよ国民のゆたけきことを神もおもはば

「御法楽」というのは、神に手向ける歌を詠む宮中の歌の会の一種で、天皇の御歌を筆頭に、して当時の大臣や宮廷の公家たちが歌を提出し、宮中のある一室から神社の方角に向ってその歌を捧げる。神に捧げるのですから、もちろんいつわりは歌えない。本当の真心を神に捧げることになるのです。孝明天皇は御法楽の歌をたくさん残していらっしやいます。この御歌は「神宮御法楽」となっていますから、伊勢神宮に御法楽なされたのです。「ことの葉」はことばですが同時に歌ということ、「歌の捧げものを受けていただきたい、国民が豊かにあることを神も思い下さるならば」ということでしょう。「受けてよ」というお言葉が神に直接に訴えられ祈られる切実なお心をあらわしています。二句切で、一気に卒直に述べられるお心の

しらべと歌のしらべとが一致しています。

冬夜（同年同月二十二日鴨社御法楽）

鳥羽玉のよすがうばたまがら冬のさむきにもつれて思ふは国たみのこと

あさゆふに民やすかれと思ふ身のこころにかかる異国の船とづくに

「鳥羽玉の」は夜にかかる枕詞です。「夜中冬の寒さのきびしいのにつれて思うのは国民の

ことである。」次の御歌は「朝夕に民やすかれと思う私の、その心にかかっていつも離れないのは、浦賀などにやって来た外国の船のことである。」ということです。二首とも体言止めですが、それがかえって無限の余情を波うたせます。この御歌は孝明天皇の当時の御心境を非常にはつきりと表わしたお歌として、多くの人に知られ、また多くの人々の心を動かしました。

詠寄国祝（安政二年、正月右大臣近衛忠熙内旨を奉じて薩摩藩主島津斉彬このえただひろないしに宸筆の御製を授くなりあきらしんびつぎよせい）

武士もものよこころあはして秋津すの国あきつはうごかずともをさめむ

これは幕末の偉人の一人で、島津藩を指導して明治維新の基礎を築いた島津斉彬に対して授けられた御歌です。「秋津すの国」は日本の国のことです。この御歌は、鹿児島島の島津藩邸の遺跡にある博物館に原物があり、孝明天皇の雄渾な御筆蹟を仰ぐことができます。

述懐 (安政三年五月十日当座御会)
とうざごかい

おろかなるわが身もともに人並にまじるはづかし敷島のみち

「この愚かなる身も人並に交つて敷島のみち、つまり和歌の修練を行っていることを考える
 と、優れている人々に対して恥しい」——敷島の道を学ぶということについて実に謙虚なお心
 持が表われているお歌です。

再び「御述懐一帖」に戻りますが、次は例の条約締結などの行われる段階に入つて来ます。

是を以て戎虜、不レ知レ所ニ恐懼一、求徴無レ暨、条約を定め関市を通ぜん事を請ふ。幕府因循
これちつてじゆうりよきようくするところをしらすさゆうちようあくなく
 不レ能レ拒ニ其請一。丁未の年 (安政四年) 以ニ旗下小吏ニ奏聴、朕知ニ其誣罔一斥レ之。
そのこびをこばむあたはず ていび そうちよう ふもつヲしりぞくヲ

翌午年 (安政五年) 二月、幕府、老吏堀田備中守 (正睦) 及び二三の小吏を以て登京、事情

を陳じ切請不レ止。朕熟案、古今夷狄の憂雖レ不レ少近年の如く甚は未有之也。若一旦
せつせい やまず つらつらあんするに いてき うれひすくなからずといへども はなはだしきいまだこれあらざるなりもし
しんこうシ ニせんりゆうわいちよう ちん か なにをもつてざいてんの すくなからず
 親ニ狎之ニ臆流穢漲、神州陸沈し、朕が世に至て初て金甌を欠ば、何以先皇在天之靈に謝せ

んと深謀遠慮し、群臣に咨詢するに、皆其不可なる事を白す。又、列藩内密忠言之者不レ少。
しじゆん その まを の

乃幕府に命じ、天下之大小名に令し、務て時宜を陳ぜしむ。然るに幕府命を抗し、肯て
すなはち でんし つとめ ちん あへ
 之を天下に伝示せず。朕深く憂慮し、未だ処置すること不レ有。於レ是群臣八十八人奮然とし

て奏状を以て、朕が意を賛す。

又あるひはいはく或曰、朕若幕府の請に不したがはずレ従は、必承久かならず（承久の変後、三上皇の配流）元弘（元弘の変に後醍醐天皇隠岐遷幸）の事を為さんと。然れども朕何ぞ一身の事を以て、祖宗の天下かへに易んやと、卒つひに重ねて命ずるに前令を以てし、次いで幕使を返らしむ。

又、使を發し、幣へいを三社（伊勢神宮・石清水八幡宮・賀茂神社）に奉じ、戎虜じゆうりよの国体を汚すことなく、人民其生を安んぜんことを祈請す。庶幾は弘安（元寇撃退）の先蹤せんしようを継つがんと。豈あにはか図らんや。旬日之間、幕吏朕命を不もちひずレ用、遂に条約を定め、通商を許し、片紙を以て奏そうして曰、時勢切迫不やむことをえざるなりレ得ニ止事一也と。

朕殊に其侮謾そのぶまん非礼いかるを怒いかると雖も、未遽いまだにはかに是を讓責せず、三家（尾張・水戸・紀伊の徳川三家）家門（將軍の親族の家）或は大老あるひ（当時、井伊直弼）を召し、其仔細そのを尋じん糺きやうせんとす。然るに尾張（尾張）水（水戸）越えつ（越前）其二三の名藩臣を籠居せしめて又嘗て命を奉ぜず。

次ついで前將軍（家定）薨しなぜり。又忠言するもの有り。曰、嗣子幼若將軍に任ずることなく暫しばらくその其為す所を見て、而後任しかるのちこれをにんぜよレ之と。然ども直しかれに其職に任じ、其人を以て其職を尽さしめんとす。然るに將軍幼若、有司柔惰、朕が意に称かなふ事を不しらずレ知、嘗かつて攘夷の念なく、却かへつて之

を親昵し、刺へ正議の士を排斥す。

朕其三家(尾張・紀伊・水戸)三卿(田安・一橋・清水)等を召せども来らず。刺正議之名藩臣を退隱或は禁錮せしむ。其の積鬱之余、激して変を生じ、外夷其虚に乗せんことを過慮し、特命(安政戊午八月八日の勅諭)を幕府水府に下し、天下の大小名同心合力、幕府を補佐し、内奸吏を除き、諸藩勤王の志を慰し、外黠虜を攘ひ、外国窺覷の念を絶せしめんとす、然るに皆朕が意を体し其の命を海内に示伝し天下一心戮力徳川を輔佐し外夷征殄の議を不興却て公武不和の難を醸す。朕深く之を憂ふ、其間事々紛々尽く言ふべき事難し。

「幕府が夷狄の意思に屈服してぐずぐずしているものだから、夷狄は恐れるところを知らないで、次から次へといろいろなことを求めて満足するところなく、条約を定め通商を行うことを願って来た。幕府は因循してその請いを拒むことが出来ず、小役人をもってその旨を自分のところに言っただけだったが、自分はその偽りであることを知ってこれを斥けた。翌安政五年堀田正睦老中が京都にやってきて事情を述べ条約を定めることを切に請うてやまない。私はよく考えてみたが、日本では外寇の憂いが昔から少からずあつたけれども最近の如くはなほだしいことは未だなかった。もし一旦相手の言うままになってこれに親しみ、血なまぐさい異国

の氣風がこの神州を汚してわが国が衰弱し、私の時代に至ってこのすばらしい国柄を損うことがあるなら、何を以て御歴代の天皇の靈におわび申しあげることができよう。よくよく考えて群臣にそのことを問うてみたところ、皆相手の言うままにすぐに条約締結を幕府に許すことは良くないと申した。しかも列藩諸国の藩主たちで内々に忠言する者が少なくない。そこで自分は天下の大小名みよに幕府から命令を出して今どうしたらいいかを述べさせるように幕府に命じた。」というのです。孝明天皇は通商を許可するか否かについて、自分お一人でお考えになって命令を下しておられるのではないのです。先ずいろいろな人の意見を聞いてみたところ、通商許可に対して即刻これを許すということは反対だというものが有力な藩主の中にあるし、朝廷の人々も多く反対だ、だからまず幕府に命じて、幕府から諸藩全体に命令を出してこれはどうしたらいいかを良く考えさせるのだ、というのです。

その頃まで幕府は政治の大半は、朝廷はもちろん、諸藩の藩主くちがはしに喙くちがはしを容れることを許しませんでしたから、簡単に言えば幕府だけによる独裁的な政治であったといえます。ところが孝明天皇は、そういうことではこの国難を打開することは出来ないのだ、全国民が、将軍も幕臣も朝廷の廷臣も、すべて一丸になってあたらなければこの日本の国難を救うことは出来ないのだと、強くお考えになった。幕府、朝廷、諸藩が協議して国難打開の道を講ずべきだ、これが孝明天皇の一番根本のお考えなのです。ですから孝明天皇は倒幕ということについても反対なさ

っている。將軍を導いて將軍としての道を尽さしめることによってこの時代の難関を打開するのだとお考えになっているのです。次に進みます。

「ところが幕府は天皇の命令に反抗して、あえてこれを天下に伝示しない。自分は深く憂慮したけれども、未だこれに対してどうするということをしなかった。そこで朝廷にある八十八人の公家たちが奏状に署名をして、天皇のお考えが正しいとして賛成の意を表した。」

このようなことは徳川時代においてはかかってないことだと思います。朝廷の公家といえど政治的に全く無力で、国家の大事などについては全然関係しないというふうになっていた。その公家たちが、孝明天皇が断然として国難に向っていかれる姿に感動して、ともかくも幕府に天皇の御命令を達成させるのだと奮起した。この時代は、天皇のお考えに賛成した者が身の安全を保障できるというような時代ではないのです。全く逆で、その人たちはほとんどが、あとで次々に失脚させられていくのです。

「また或者はこう言っている。私がもし幕府の請うところに従わないと、幕府はきつと承久元弘の変の時と同じように私を配流するであろうと。しかしそういう事があるとも、どうして私一身の故を以て、祖宗から受け継いだこの天下に易えることができよう、私はそう思つて、もう一遍前の命令を下して、幕吏である堀田正睦を江戸に帰らせた。」

又使を発し、供物を石清水八幡宮、伊勢神宮および鴨神社の三社に捧げた。そして、日本の

国体を汚すことなく人民がその生を安んじることを祈った。願はくば元寇の時に元の使を斬つて元軍を破つたあの弘安の歴史を継ぎたいものだ、と。それなのに思いもかけず十日もせぬうちに幕吏は勅許を待たずして遂に条約を定めてしまった。そして一片の紙切れをもって奏上して言うには、時勢が切迫してどうも止むを得ませんでした、と。

私はその人を侮つた非礼なやり方を非常に怒つたけれども、すぐにこれを叱りつけはしなかつた。そして尾張、紀伊、水戸の三家の人、家門の人、或は大老、つまりその少し前に大老になつて条約を締結した井伊直弼みなはすけらを召してその理由を詳しく聞きたいと思つた。それなのに尾張、水戸、越前という朝廷の意思を伝えることのできる藩において、それぞれ二三名のすぐれた藩士たちを蟄居させて命を奉ずることがない。次に將軍家定の死と、それにとりなり継嗣問題について述べておられますが、そのあと一九一頁三行目以降「其の積鬱の余り」以下の個所について説明おきます。「こうして正義の士が幕府に対する積り積つた鬱憤のあまり、激発して事変を生じた時、外夷がその隙に乗じて日本を支配してしまはせぬかと、思いすぎるほどに自分は考えてきた。」そして有名な戊午ぼごの密勅を水戸に下されるのです。ふつうなら勅諭は幕府だけに下せばいいのですが、孝明天皇はこの時幕府だけを相手にしていたらどうにもならないとお考へになつたのでしよう。「こうして日本の国内が一つになつて外国が日本を窺う気持を絶やそうとした。ところが幕臣たちは皆（私の意に反して）天皇の意を奉じて勅命を海内に伝

え、天下が一つ心になって力をあわせ、徳川を補佐し外敵を撃攘しようとする議を興そうとはしない。こうして幕府と朝廷の間に不和の難を醸してしまった。——朕深く之を憂ふ。其間事々紛々尽く言ふべき事難し——」この時に孝明天皇は、少なくとも二回にわたって譲位しようというお考えを発表なさっておられるのです。自分はこういうことではとてもこの国の安全を守り国家の命脈をつぐことはできないから、自分は位を降りてあとは有栖川の宮様にでもお伝えするより仕方がないとお考えになった。天皇はその時の御心境を次のようなお歌に表現していらっしやいます。

述懐（安政五年、七月十一日神宮御法楽）

神ごころいかにあらむと位山おろかなる身の居るもくるしき

身を尽して幕府にいろいろ言い、また諸藩に働きかけているけれども、結局自分の志を遂げることが出来ないままに、幕府から非道な仕打ちを受けることになってしまった。神の心がどうであろうかと思うとそういう愚かな自分が天皇の位に居るといふことは苦しくてたまらないとおっしゃっているのです。その時の譲位の勅語をご覧になると、その御心境を詳しくお書きになっておられるのでよくわかりますが、この一首の御歌を拝誦いたしましたしても孝明天皇の御心境は実に悲痛だったことがうかがえます。孝明天皇のお歌は、きれいに歌おうとか、言葉を繕

おうというような所がない、それでいてお心がじかにお歌に表われてくるのが、孝明天皇のお歌です。それは実に生き生きとした、生命の躍動したお心持だと言っているかと思えます。

先ほど水戸に戊午の密勅が下ったことを申しましたが、それは水戸斉昭が水戸家代々の勤王の心をもって、幕末尊王攘夷の先頭に立っていましたので、水戸斉昭に対する勅語をお下しになったのです。その水戸斉昭がこういう歌を作っています。

大君につかへささぐる我がこころ都のそらに行かぬ日ぞなき

孝明天皇のお心があり、それに応ずる幕末志士の心があつたという一つのしるしです。最後の「其の間事々紛々尽く言ふべき事難し」の御言葉は、吉田松陰「留魂録」冒頭の「余去年以来心蹟百変、挙げて数へ難し」の言葉を思いおこさせられます。国事に御心を砕かせられたのです。

然れども其一二を言んに、人々以為らく、幕府如レ此衰弱不振、戎狄如レ此猖獗（獣のように暴れる）不レ懲、然則外患何時止まん、神州正気何時回復せん、人民何時生を安ぜん。是豪傑英雄の將にあらずんば治むること不レ能と。三家（前出）三卿（田安・一橋・清水三家）の中、一橋刑部卿（徳川慶喜―水戸斉昭の子）其英雄なるを以て、之をして其職に当らしめば、寧よ

く大事を成就せんと。是ここをもつて以草莽有志の士、其事そのに周旋奔馳ほんちするもの有り。又、其間その奸猾其かんかつその意こころよを快くせんとするものありて、事多く朕が意の如くならず。

不日ふじつにして間部下総守まなべしちもよさのかみ（詮勝あきかつ）登京、幕命を以て、凡て天下の事を論ずる者一切縛収ばくしゆうして之を江戸に下し、次で四大臣たかつかさ（鷹司父子、近衛忠熙ただひろ、三条実萬さねつむ）落飾らくしよく（出家）幽居し、正議の士、是ここに於て尽く。（いわゆる安政の大獄）

以下全文の通訳は省略しますが一字一字にこめられた天皇の御心を大切にしながら読んで行って下さい。最後の所に四大臣とあるのは、皆孝明天皇の側近の重臣達ですが、幕府はこの人達を出家させて、政治に一切口出し出来ぬようにしてしまつたわけです。「正議の士、是に於て尽く」という「正議の士」の中には、吉田松陰、橋本左内その他の人々がはいっています。

討れたる吾をあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ

七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾忘れめや

いづれも吉田松陰の辞世の歌ですが、こういう歌を残した人々が全部捕縛せられた。また三条実萬さねつむにはこういう歌があります。

すべらぎの星となへますころかともおもへば里に鳥のねぞする

「すべらぎの星となへます」というのは、「天皇が星の名を唱えたもう」の意味で、元旦早暁の四方拜において、天皇が「北斗の属星を拜せらるる儀」（明治天皇紀・明治五年廃止）をいうものでしょう。実萬は側近に奉仕していたのですが、この年は幽閉されてはるかに四方拜の御儀をしのびまつたのです。いまその時であろうと思っていると自分のいる里では暁を告げる鳥の音がするということです。三条実萬は三条実美の父にあたり、内大臣をしていたのが、當時は出家させられ一条寺に幽閉されていた。実萬公はそこから日々孝明天皇の御身邊に心を馳せていたのです。公は後に、井伊直弼の手のものであった長野主膳の密偵で村山某という女性によって毒殺されたとも言われています。こうしてもう孝明天皇の側近は、孝明天皇の意思を奉じて事を行おうというものはほとんどいなくなってしまうのです。

下総守幕議を白して曰、条約押印のことは、先役備中守（堀田正睦）の所為にして、当役の知る所に非ず。即今条約を返し、通市（通商）を止むるときは、外国に不信を伝へ、彼が怒を激し、異変不測に生ぜん。環海武備未だ充実せず。且大奸内に在り。若し外患起らば、内憂之に乗ぜん。然らば忽ち天下土崩瓦解、如何とも為すべからざるに至るべし。希くは幕府の申す所に従ひ、姑く天下の時勢を覽ぜんことを。必ず不_レ経_レ年して、戎虜を掃絶し、神州の正気を回復せんと。

ここをもつてちんやむじことをえず
 是以朕不_レ得_レ止、枉_マげて其_レ請に任せ、以て天下の時勢を見る。

其の後庚申年（万延元年）三月三日水府浪士井伊掃部頭を刺の事あり（桜田門外の変）。其の

所為は乱暴に似たりと雖も、其の所_ニ懷中_ニの書状を視て、其の意を察すれば、深く外夷の
 跋扈_ハを憤怒し、幕府の失職を死を以て諫むるにあり。是朕が嘗てより所_ニ憂也。

又其後年、墨使（ヒューズケン）を刺し又東禅寺（英国公使館打人）の件々、皆其意斯に基_キけ
 り。

幕府は、条約を破ることは非常に危険で、そんなことをしたら国が減びてしまふ、しばらく
 見ていてください。いつかはきっと神州の正気を回復する、と天皇に申上げた。だから天皇もや
 むをえずその請いに従つておられたが遂に桜田門外の変がおこつた。後ろから三行目、「是朕
 が嘗てより所憂也」こういうことがあつてはいけないと思うからこそ、幕府によくよく言つて
 きたんだ、しかしそれが起つてしまった、ということでしょう。幕末の歴史をずっと見てみます
 と、桜田門外の変はやはり非常に重要なできごとで、これが時代の大きな転機になつた。それ
 は、幕府が孝明天皇の御意志を無視し、勅許をまたずして通商条約に調印したことは許されな
 いという事で、井伊大老の責任を追求したことなのです。この事件が時代に与えた影響が非常
 に大きかつたので、あとまた色々の暗殺事件があるわけで、最後の段もその事を指しますが、

この事件ほど大きくその時代の転機を作ったものはそれ以来ないだろうと私は思います。またその人々の心情が忠誠、忠義の感情一筋のものであったからこそ、時代の急展開をもたらしたのだと思います。

其の余、外夷の陸梁なる（ほしいままである）、対州の事、二个国相増事（ポルトガル、プロシヤとの条約締結）、兵庫より陸行江戸に至の事、海岸測量、殿山を借与の事等、朕一々幕府に其然らざることを責れども、幕吏奏曰、是皆一時の権宜にして、浪華開商延期の術策なりと。

又奏請曰、外夷を掃殄するに、天下一心戮力にあらずんば為し難し。故に和宮（孝明天皇の御妹）を以て將軍に尚し公武一和を天下に表し、而後、戎虜勦絶に可及也。不レ然ば公武の間を隔絶せんとするの奸賊ありて、外夷拒絶に及び難しと。

朕念ふに先帝遺腹の妹を以て百有余里の外（江戸城）に嫁し、而も古来未曾有之武臣に尚せんこと、朕が意実忍びざる所也。然るに幕吏切に内外の事情を陳述し、朕が憐みを請ふて不レ止。朕も意に不レ忍と雖も、祖宗の天下の事には代へ難しと、意を決して、其請を許し、十年を不レ出、必然外夷攘除の事を命じ、且海内大小名に朕が意を伝示し、武備充実せ

しめんとす。幕吏連署奏状し、皆朕が命を聴く。故に去冬きよとう和宮入城（文久元年十二月十一日江戸城御入興）の事に及べり。

最初の四行は、外夷が勝手な事を色々と行うのでその事を一つ一つ幕府に責めたけれども、幕府の言い訳は、「これは皆仮に策略でやっているものであって、こうしなければ浪華なにはつまり大阪をすぐに開けといつてきかないだろう。もし大阪が開かれれば京都は喉もとに相口あいくちを刺されてしまう、だからやむを得ず、仮にやっているで自分たちの本意ではない」と言いのがれようとしていることに対する御憤りが示されています。

その後の三行ですが、幕府は、外敵を払うのには天下が一心となって力を尽さねばならない。その為には朝廷と幕府とが手を結んでいなくてはいけない、といって和宮の御降嫁を奏請しているのです。しかし朝廷と幕府の関係については、孝明天皇はじめ朝廷のほうをはじめから幕府のことを考え、幕府にこのようにしたらよかろうと心をくだいて言ってこられたのです。幕府はその朝廷の意思を全く無視したばかりか、当時の有識者を皆幽閉したり、殺したりした。それなのに、孝明天皇と自分たちとの間が隔絶しているのは、そこに奸賊がいるからだ、だから改めて結婚政策によって、ひとつ公武合体を天下に表してほしいと言ってきたのです。これは和宮様という方を將軍家茂いへもちの夫人としてお迎えしたいと言っているのです。

次の行の「先帝遺腹」とある先帝は仁孝天皇ですが、「遺腹」というのは、和宮様は仁孝天皇の崩御の後お生れになったからです。その時、お兄様である孝明天皇は十六才でしたが、生まれながらに非常に悲しい運命を背負っておられたこの妹君和宮様に、父をなくした兄妹同士として、自分のお子様のように深い愛情をもって対してこられたわけです。そのお方を、今度は將軍家茂の夫人としてもらいたいと言われた。天皇は、非常に堪え難いお気持ちだったけれども、「祖宗の天下の事には代へ難しと、意を決して」これをお許しになったのです。

この和宮様は、（後に孝明天皇が亡くなられて、討幕軍が編成された時の征討総司令となられる）有栖川宮熾仁親王たるひとと当時御婚約なさっていた。有栖川宮は孝明天皇がお位をお譲りになろうとされた方で、この婚約を媒酌なさったのは孝明天皇であった。それを今度天皇の御命令によって解約しなければならなくなってしまった。どうしようもない悲痛なお心持で和宮様にその事情をお話しになるので、和宮様は「しかし自分は婚約者がある身ですのでそれは受けられない」と言われる。そこで孝明天皇はお生まれになったばかりの御自分のお子様を家茂に嫁すことを約束しよう、それで幕府は公武合体を計ってほしいとおっしゃる。その頃のお手紙がみな残っています。それで結局和宮様は、孝明天皇がそこまでお苦しみになっておられるのならばもう自分は身を捨てて將軍家茂に嫁そうと決心されるのです。その時、和宮様の詠まれたのが

惜しまじな君と民とのためならば身は武蔵野の露と消ゆとも

というお歌です。孝明天皇様と国民の安寧がそこにかかっているならば、自分の身は武蔵野の露と消えても惜しむことはしまいとお詠みになって、將軍家に嫁していかれたのでした。この和宮さまが、静寛院宮として、徳川氏の帰順、江戸の明け渡しに非常な御努力をなさいます。御不幸な、しかし国と民のために身を捧げられた和宮さまの御生涯はここにはじまると言つてよいのでしよう。

然るに今春（文久二年正月十五日）に至り、幕吏安藤对馬守浪士の為に刺さる。是等皆掃部頭を刺せし者と同意の者にして、如^{かくのごとき}此輩は、死を視ること帰するが如く、実に勇豪の士也。

鶴呼^{ああ}此輩^のをして少^{すこ}く其憤鬱^{その}する所を伸べしめて、論^せすに丁寧誠実の言を以てして、暫^さく其の勇氣^{たくは}を儲へしめ、他日非常の変に用ひ、其をして先鋒^{せんぽう}たらしめば、堅^かを衝^つき鋭^{くじ}を挫^くくに於て何の難きことか之あらんや。誠^{まこと}に愛^をむべきの士也。

然るを幕府意^{こころ}を斯^{つけ}に不^ず著^ず、日夜猶其^{その}余党^{あまがた}を探^{さぐ}る、是^{これ}惟^{ただ}に怨^{うらみ}を天下^{てんか}に構^{かま}へて事に於て益なく、其^{その}本^{もと}に反^{かへ}らずして只々^{ただただ}威力^{ゐり}を以て制^させんとす。是^{これ}を捕^{とら}れば殃^{わざはひ}又^{また}斯^{ごと}に生^なじ、天下^{てんか}之^の変^{へん}止^とむ

時なく、終に大變を激生するに至らん。是朕が深く憂慮する所也。

聞く、翌十六日（文久二年正月）將軍拜廟の事あり。有司前日の變を以て拜廟の事を延引せんと請へり。然るに將軍曾て拜廟の事を不_レ廢して之を行へりと。朕其寬量を愛し、因て思ふ、庚申（万延元年）三月以来、九門（皇居の門）外に守兵を置、又関白邸亭にも兵士を置、或は參朝に密々武士を具して非常に備ふと、是等朕深く慚憂する所也。

因て又思ふに往年三社に奉幣せし以来、神州の汚穢を洒掃せんことを、朝夕禱請して、又法樂（神社奉納の歌會）をも至_レ今猶之を行ふ。庶幾くは以て前の志願を全うして、之を終へんと。

去年元を改め（万延を文久に改元）天下と共に更始す。皇妹既に尚し公武実に一和す。此時に逾んで、既往は咎めざるの教に由り、天下に大赦し、三大臣の幽閉を免じ、列藩臣の禁錮を赦し、有志の士の連坐せる者を放んことを。速に告_二幕府_一、以て此挙を行しめよ。是朕所_二深欲_一也。

爾後天下心を合せ力を一にし、十年の内を限り、武備充実せしめ、断然として夷虜に諭すに、利害を以てし、一切に之を謝絶し、若不_レ聽速に膺懲（征伐）之師を挙、海内の全力を以て、入りては守り、出ては制せば、豈神州の元氣を恢復せんに、難きこと有んや。

若し不^し然^{からず}して惟^{ただ}に因循姑息旧套^{きゆうたう}に從^{したが}て不改^{あらためず}、海内疲弊^{だいい}の極、卒^{つひ}には戎虜の術中に陥り、坐^ざしながら膝^{げん}を犬羊^{けんよう}（敵国）に屈^{くつ}し、殷鑑不^{いんかん}レ遠^{はるか}印度^{いんどう}の覆轍^{ふくてつ}を踏^ふば、朕^{みま}實^{じつ}に何^{なに}以^をか先皇^{せんこう}在天^{いてん}の神靈に謝せんや。若し幕府十年内を限りて、朕が命に従ひ、膺懲の師を作さずんば、朕實に断然として、神武天皇神功皇后の遺蹤^{いしよう}に則^{のつ}とり公卿百官と、天下の牧伯^{ぼくはく}（諸侯）を帥^{ひき}めて親征せんとす。卿等^{けい}（廷臣諸君）其斯意^{それこの}を体^たして以て朕に報^{ほう}せんことを計^{はか}れ。

説明は省きますが以上が明治維新を隔たること六年弱、まだ天皇親政というようなことが行われていない時に、孝明天皇が九重の奥深くおられて、日本の歴史、天下全体の態勢を御一身に考えられて、お書きになった文章です。私はこれを読むと本当に心が戦慄します。そしてここにこそ明治維新の一番基^{もと}の力があつたのだということを確認するのです。

近代において、日本は大きな国難に何回か会つた。明治維新の次に非常に大きな国難として挙げるべきは日露戦争ですが、この苦しい戦をしている時、当時満洲軍に派遣された天皇のお使いの将軍が、明治天皇と皇后の御歌を持って行き、現地で全満洲軍の將兵に対して、これを発表するのです。プリントでお配りした御製御歌がその際のものです。またその当時、国民に天皇の御心を伝えようとして高崎正風という人が、切腹を覚悟して御製を一般に洩らしたということがあるて、やはりその時も天皇のお心を知つて国民は奮起した。また今度の戦争が終つ

た時の今上天皇のお心持は今日はっきり御歌に残っていますが、その御歌に残ったような今上天皇の御心が、われわれ国民全体の心に点火して、日本の復興の基礎が定ったものだと思うのです。木下道雄先生の「宮中見聞録」に次の四首の御製が掲げられています。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

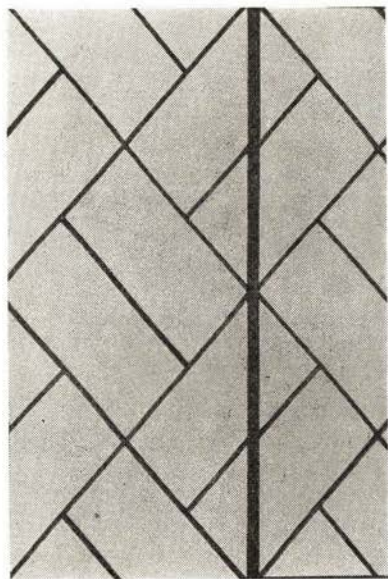
国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国とくにと離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

国家重大の時に日本の命を相続し、次に展開してゆく力のもとになるものは、天皇の御心と国民の心がふれ合ってそこに通い合うものの中から生まれる。これが本当に国を支えてきた力ですし、将来もまた国を支える力になるということを私は信じます。孝明天皇が、私達の考えも及ばぬほどに全力を投げ出して時代にあたられたということをし非皆さんに知って頂きたくて、「御述懐一帖」を紹介しました。

(亜細亜大学教授・教養部長)

短歌創作の手びき



北島照明

聽
雪·網
代
窓

只今から短歌創作の導入講義を致しますが、まず短歌創作の意義ということについてお話ししてみようと思います。

この合宿ではできるだけ単なる観念的、知的遊戯に陥ることを排して自分の切実な体験をもとにして初めて会う友とも心をかよわし、その共感のもとに共に学びあうということを目標としております。

班別討論の場において何回も言われたことでしょうが、その折に友の心と自分の心をかよわせることがいかに困難であり、また自分の思いを言葉に表現して正確に相手にわかってもらうことがいかにむずかしいものであるかを痛感されたことと思います。

例えば自分はわかっていても相手に伝わらぬもどかしさを体験して自分の思想が結局は独善的であり、自分の体験に根をおろしていない抽象的な知識の切り売りにすぎないことに気づきます。

短歌創作の、合宿における意義はそういう言葉のもつ真の客観性を練習するところにあります。

人生というはかりがたい無限のものを単に知識をもとに解釈して能事終れりとしているような思想生活を根本から問いただす、そのために歌をつくり味うという体験がどうしても必要なのです。ここではスマートに文学用語を駆使して上手な歌をつくるという練習をするのではあ

りません。参加者全員があらゆる外的差別をのりこえて短歌という伝統的な詩型の中に、できるだけ赤裸々に自分の思いを表現してみる。又そういう共通の体験の中から、じかに人の心にふれてみるということが、この合宿での短歌創作の意味なのです。

現代の技術文明と情報社会の中でもすれば隔絶され疎外されていく自分の内心の自己表現、これを通して客観的に自己を見つめていく時、本当に生きる意味をかみしめることができるのではないでしょうか。

そういう深い意味のもとにこの合宿の短歌創作のいとなみが続けられているわけです。

既にそれをまとめた「短歌のすすめ」が国民文化研究会から発行されておりますので、それを読んでいただければ今私が申しましたことは更によくわかりいただけだと思います。

さて昨日、小田村先生の御講義の中で歴代天皇の御歌についてのお話がありました。

それをめぐって、ある班において次のような発言がありました。「今のよう科学的文明社会にあっては人の心とか、情緒とかいうものをもとにしていく学問では、センチメンタルすぎてうしろ向きで歴史の流れに沿わぬのではないか。」確かに現代の日本の学問の中心の体系をなしているのは「科学」です。しかし、社会、経済、歴史、文学というような人文系統の学問にあっては人間の情意を抜きにして本当の「客観的」な学問が成立するでしょうか。

多くの客観的な事実の中からそれを評価し、選択してゆく場合、研究主体となる人の人生観

や世界観が問題にならないはずはありません。人の心の素直で正確な表現を最も大切にして来た短歌の修練が、現代にはびこる、いわゆる「客観的学問」と称するものは正に必ず大きなプラスになることを信じて疑わないものです。

短歌によって自分の心を鍛え、明治の歴史の中ですばらしい表現活動をした人に正岡子規がいます。子規は「歌よみに与ふる書」の中で心の誠実、心の素直さというものを最も大切だと言っております。子規が「理屈」といって排除したのは、まごころの裏づけのない概念です。

実感の伴わない「うそ」をよんで文学的センスを発揮しようなど思うのは誠に慎しむべき短歌創作上の心の姿勢です。あくまでも、自分に忠実であり、嘘をよまぬように、心にもないことをよまぬようにすることが大切です。自分の心に忠実によまれ、それが正確に言葉となって表現された歌は必ず人の心を振立たせます。そして、深い感動を人に伝えることができます。

あの友がこんなにすばらしい素直な心を持っていたのかと驚ろかされたり、知識をふりまわしていた友が案外、内心の空虚さを暴露したりすることになります。また、歌の体裁は無難によくできて、言葉も流暢にできているものでも、何となく生命の躍動がないというような歌もあります。これはかえって創作経験のある人程おち入りやすい心の問題を示していると思われまふ。心は生きものですから、知らず知らずのうちに個我の世界にとじこもり生命の律動を失

つてしまふこともあります。

短歌創作の経験のある人もない人もここでは全く平等です。遠慮せずにもまず自分の心を正確に表現する努力をして下さい。それができれば道はおのずからに開けると思っています。

これまで短歌創作の姿勢ばかりに重点をおいて申してまいりましたが、実際の歌の作り方については「短歌のすすめ」を読んだり、先輩の先生方に聞いて自分で苦労して下さい。

それでは資料のほうに移っていきたいと思います。まず「防人」の歌が出て参りますが、皆さんとご一緒に朗々と腹の底から声をだして読んでみましょう。万葉人の生命のリズムを直接感ずることができると思っています。

水鳥の立ちのいそぎに父母に物いはず来にて今ぞ悔しき

防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜しみ泣きし児等はも

葦垣のくまどに立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ

唐衣裾にとりつき泣く子等を置きてぞ来ぬや母なしにして

天地のいづれの神を祈らばかうつくし母にまた言問はむ

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母はわすれせぬかも

父母がかしらかきなで幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

これらの防人たちはいずれも無名の作者たちですが、自己の生活体験の直接の表現は時代を越えて、われわれの祖先が親、兄弟、妻子の断ちがたい恩愛の絆を使命ゆえにふりきってゆく悲しい姿を眼前にあるかのように伝えてくれます。一二〇〇年前の人の心を昨日のことに偲ぶことのできるのは全くありがたいことです。

次に幕末志士の歌に進みます。最初是有村雄助と有村治左衛門と蓮寿尼（有村兄弟の母）の歌をよんでみましょう。

大君の憂き御心をやすめずばふたたび国にたちはかへらじ（雄助）

骨は粉に身はむさし野にさらすともなに真心の透らざらまし（治左衛門）

雄々しくも君につかふる武夫ものよの母てふものはあはれなりけり（蓮寿尼）

この兄弟は桜田門外の変に加はり井伊大老を要撃した薩摩の青年です。兄は二十六才、弟は二十三才です。

「大君の憂き御心」とは、孝明天皇の次の御歌の御深憂を思つてよんだのでしよう。

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこころにかかる異国の船

すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民

彼等の精神の中心には常に天皇の御存在があつた。しかも、それは伝統的な「歌心」に支えられていたという歴史的事実を忘れて明治維新を語ることはできません。親を思い友を思う気持が明日をも知らぬ日々の生活を支えていたのです。次に明治維新の精神的原動力となつた方々の歌を紹介しましょう。

吉田松陰

親思ふこころにまさる親ごころけふの音づれ何と聞くらむ

白石資興の忠死せし御魂を祭る

高杉晋作

恥かしと思ふ心のいやましてなほらひ御酒も酔ひえざるなり

後れてもおくれてもまた君たちに誓ひしことを我れ忘れめや

吉田大人（松陰）のことを思ひて

久坂玄瑞

世の中の事し思へば君の身の過ぎにしことの悲しきろかも

次に今度の大東亜戦争で夫をなくされた戦争未亡人の方々の歌を紹介しましょう。このような短歌を見ますと流行の平和論の無責任さが今更のように思われます。戦争の犠牲者の上にあぐらをかいているように、のうのうと「平和」を満喫している人たちに、これらの歌の悲しみが本当に分ろうとは思われません。われわれは本当の「平和」を実現するためにこのような人たちの心をまず自分の心でお慰みする必要があると思うのです。

坂根庸子

吾子を背に白木の箱の君を胸に関門海峡を越えて来にけり

野あそびにほうけし吾子がねすがたのかなしきばかり君にかも似る

きりしまの山のいでゆにつままぎし汝が広き背よつひに還らず

父なくて生ひゆく吾子と思ひつつ髪を切りやる項うなじのいとしさ

還りこし人を迎ふるとよめきを垣ごし見をり夫なき我は

復員の名簿ののれる新聞に無きこと知りつつ夫の名探す

かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜まる

帰る日までこの家にゐよと直ぐ帰る如くに言ひて征きし君はも

植里 真智子

篠崎 紀久子

安藤 てるこ

小酒井 きく

これらの歌は昭和二十五年に出版された「この果に君ある如く」という戦争未亡人の歌集のほんの一部です。言葉は平易であります、実に具体的で直接的です。自分の気持を殊更に誇張している表現がすこしもありません。「還りこし」の歌などは身がすくむ思いです。これらの作者たちはいずれも無名の作家たちですが、かえって美文を装って観念的にこしらえた文学趣味の人たちの歌よりもずっとすばらしい魂を残しておられるのです。

この歌集の標題としてとられているのは次の歌です。

この果てに君ある如く思はれて春の渚にしばしたたずむ

丹野 きみ子

これらの人たちのその後はわかりませんが恐らく自分をしっかりみつめた人生を送っておられることは確かでありましょう。

では最後にもっと身近なところで「短歌のすすめ」に載っております国民文化研究会の先輩の寺尾博之さんの歌を紹介しましょう。この霧島の温泉で、現在この合宿に参加しておられる先輩方と出陣の別れをされたときの歌です。

寺尾さんは終戦直後福岡の油山で自刃して亡くなられました。出陣を控えての心静かな思いの中にも友との別れを切々と歌っておられます。

再びは見る日もあらじきりしまに友と眺むる月の影かな

友どちと露天の風呂にひたりつつ木の間がくれの月を見るかな

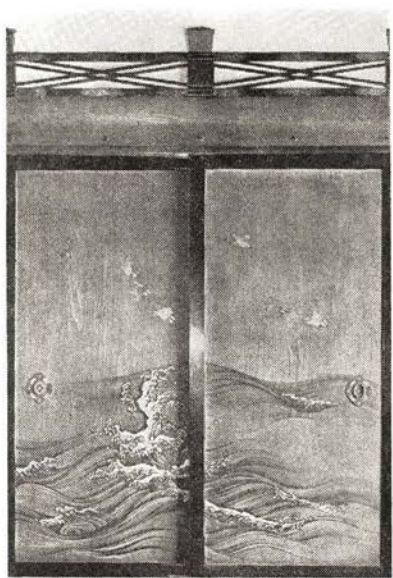
友どちのねがほを見つつせせらぎの音聞きをればうづまく我が胸

きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ

引用の歌が「非常」の場合のものばかりで「日常」の用例が少なかつたのが心残りですが、
以上で終ることに致します。

(熊本市立藤園中学校教諭)

短歌全体批評



山田輝彦

御学問所・杉戸

先日の北島先生の導入講義の後で作られた歌が、事務局の方々のご努力によって、五五〇首
余り、三〇枚のプリントになりました。この後、班別相互批評の時間に、班員の方々がお互い
に批評し合って、表現の仕方や心の姿勢について徹底して論じて頂きたいと思えます。その場
合一番大切なことは、詠んだ人の気持に近づこうとする努力で、相手の気持を推しはかりなが
ら批評を加えるという態度が前提とならなければなりません。きびしさはきびしさとして、そ
こに友情が必要であることは改めて申すまでもないことです。

この全体批評でとり上げる歌は、いきおい問題のあるものに限られて来ますが、時間の関係
でやむを得ませんのでご了解ねがいたいと思えます。

鎮座してただただ思ふこの身をば我が神の為燃え尽くさんを

大体の意味は読んでわかると思えます。神の前にひざまづいて、自分の命を燃やし尽くすこ
とを誓っている歌なのでしょう。しかし、鎮座という言葉は、鎮守の森などというように、神
がそこに鎮まりたまうというのであって、自分が鎮座するというのでは、自分が神様になつて
しまいます。それから、上に「わか身をば」という目的語があるのだから、「燃え尽くさん」
ではなく「燃やし尽くさん」となるべきでしょう。作者がもし鎮座という言葉を自分のことと

考えているならば、それは「静座」とでも直さねばなりません。

静座してただただ思ふこの身をば我が神の為燃やし尽くさん

しかし、このように直しても、やはり誇張があるようで不自然です。そこで、この鎮座という言葉を、もとの神様のところへお返しするならば次のようにでもなるでしょうか。

わが命ひたすら燃やし尽くさんと鎮座まします神に祈るも

次の歌にまいります。

台風の強き力のかたまりを杉の木立ちの傷跡におぼゆ

これも意味がわからないことはありませんが「強き力のかたまり」というようないい方は未熟で無理な表現です。「傷跡におぼゆ」も明瞭さをかいた表現です。次のように直したらいいのではないのでしょうか。

杉木立の傷跡見れば台風の激しき力しのぼるるかな

次の歌にまいます。

霧島のふもとの里の静けさを我は護らん大和魂

第四句の「我は護らん」が突如として「大和魂」につながってゆくのが、いかにも唐突です。恐らく大和魂をもって護るという意味なのでしょう。しかし大和魂という言葉には何としても飛躍がありすぎて統一を欠ぐわけです。作者はいつまでもこの静けさを守りたいと決意を述べているのでしょうか。それならばそのように詠めばよいので、軽々に大和魂などと結ぶので妙な歌になるのです。

霧島のふもとの里の静けさを我は護らんとこしへまでも

とでもすれば、少しはよくなるでしょう。次は開会式を詠んだ連作短歌ですが、不用な助詞を二三取りのけるといい歌になります。

乗りものの不便忍びて全国ゆ友ら集ひて式はじまりぬ
全国ゆ集ひ来ませる友どちと心一つに歌ふ君が代
友皆の声は次第にたかまりて力強くも響き渡りぬ
国のため斃れし人も集ひ来て共に君が代歌へることし

次の歌ですが、

緑濃きあたり一面の木々の葉は我が精神と一体となる

これは「わが精神と一体となる」というのがよくわからない。非常に概念的であり、概括的であるから、曖昧になってしまふのです。もう少し具体的に詠めばいいのです。木々の葉が自分の精神と一体になるということは、自分と自然がそこに融合するということでしょう。それならば、そのようにはっきり詠めばよいのです。

緑濃きあたり一面の木々の葉はわれのまなこに沁み入ることし

次の歌にまいます。

高原を流るる風に含みたる友のわらいとかおる夏草

この歌には「友のわらい」と「かおる夏草」と、焦点が二つあります。歌は焦点が二つに分裂すると非常に力が弱くなるのです。一つに焦点を絞らねばならないということが問題の一つです。それから「含みたる」という言葉が何に続くのだろうか。作者は風が運んで来るといふような意味で使っていると思います。しかし、考えようによっては「わらい」にかかるようでもあります。「含み笑い」という意味にもとれます。含み笑いがあるということになると、意味のわからない妙な歌になってしまいます。そこで、焦点を絞ってゆきますと、たとえば、

友の笑ひ吹き来る風に聞え来てこの高原に夏草かほる

というようになります。友の笑いがここでは副次的な修飾になり、夏草かほるに焦点が絞られて来るので、非常にスッキリした歌になるわけです。

草原に眼をとじれば我が耳に友の苦悩の聲が聞こえる

「友の苦悩の聲」というのがよくわからないのです。軍人が戦争か何かしていて、横で戦友が倒れているというのならこれでいいのでしょうか、「友の苦悩の聲」とは何でしょうか。恐らく歌が詠めなくて困ったなあと言っているのではないかと思うのです。そうでないと、病気か何かで、夏草の中でのたうちまわっているという意味にしかとれません。安易で概括的な表現だから、とんでもない滑稽さを導き出しかねないのです。もう少し具体的に、歌が詠めないで困っているというように詠めばいいのです。

次は三首の連作で、今度の作品の中ではいい方の部類に入ります。

友どちの着きしことをば知ればすぐ顔をみむとて部屋を探しぬ

「ことをば」「知れば」と「ば」が二つ続きますので、口調が悪くなるのです。ほんの少しの添削で大変いい歌になります。

友どちの着きしと聞きていちはやく顔を見むとて部屋を探しぬ

次の歌にまいますが、前からの連作です。

その友は旅の疲れで大の字に眠っておりし微動だにせず

この「微動だにせず」という言葉は、たとえ嵐の中にビルディングが立っていて微動だにしないというように、もともと立っているものが動かないことをいうようです。寝ている者が動かない時には、こういういい方はしないようです。だから、少しも動かないというなら、

その友は旅の疲れで大の字に眠りてあたりみじろぎもせず

微動だにせずというと、硬直状態でカチカチになっているという感じですが。みじろぎもせずと直すと柔らかかになってくるわけです。三首目は次のままでよいでしょう。

吾はすぐ話しかけたしと思へども友を案じてそつと帰りし

これらの三首は表現のぎこちないところがありますが、友達に対する気持が非常に自然に流れているでしょう。だから暖い感じがするのです。こういう調子の歌をわれわれは詠んでいけ

ばいいのです。

はるばると澄み望まらるる黎明の国うつくしきかなただ静けさの内に

字余りというのはゆるされるのですが、この歌の四句五句の字余りは少し長すぎます。「はるばると」という言葉が、「澄み」にかかるのか「望む」にかかるのかわからない。澄んでいるというのは自然の状態だし、望まらるるというのは自分が見ているわけだし、どうも主体がはっきりしない。それでゴチャゴチャして非常にわかりにくい歌です。要するに作者は、明け方の澄み切った空気の中に遠くまで望むことができる美しい風景が詠みたいわけでしょう。大部直して別の歌のようになりますが、作者が詠みたい気持を推量して次のようにしました。

明け方の大気は澄みて望まらるる国美しも静けさの中

次の歌は合宿への途中で詠まれたものようですが、問題を含んだよみ方です。

東の遙か彼方を眺むれば咲く白百合に君の香ぞする

これは相聞の歌、つまり恋の歌なのでしようが、古今集に「五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」というのがあります。結句が「香ぞする」で終るならば、上には当然「かげば」という言葉があつて、呼応関係になるべきです。「眺むれば」ならば下は「見ゆる」となるべきなのに「眺むれば」「香ぞする」と続くのだからすっきりしないのです。それから、この歌は実際に白百合を見て詠んだのだろうか、それとも何となくムードを詠んだのだろうか、はっきりしません。咲いている白百合が遠くの方にあるのか、もしそうならば香りがするはずがない。近くにある白百合なら、遙か彼方を眺むればという言葉と近くの白百合の間に統一がないことになります。つまりこの歌は、何ということもなく恋愛感情のようなものが詠まれていて、詠む方が想像によってカバーするから何となく分るとはいうものの、残酷に読めば焦点が分裂した歌ということになるのです。たとえば、こういうふうに直してみました。

咲きいでし白百合の香に東の遙か彼方の君をしのぶも

少しは意味がはっきりして来ましたが、それでもまだ印象が弱いでしょう。恋なら恋でいいのですが、キチツと感情が正確に表現される必要があります。子規は写生と言いましたが、写生とは何も自然を詠む場合だけではなく、心を正確に詠むのも写生です。この歌のいけないと

ころは表現が不正確なのです。

降り立ちてなつかしき顔みつくればうれしくなりて疲れわするる

いい歌です。「霧島神宮駅にて」という詞書がついていますが、別にむずかしいよみ方ではなく、自然にすらりと詠まれています。ただ、こういう歌の詠める人が次のような歌を詠むから不思議なのです。

山の上赤くそまりし白雲の黒くなりゆくさまはかなしき

赤、白、黒と目まぐるしく変って、一番最後が「かなしき」でしょう。「ゆうべ」という題がついていますが、前のような歌を詠む人が、こういう類型的な歌を詠むというところに歌の不思議さがあるともいえます。

次は三首の連作で、かなりまとまったよい歌と思われます。「展望台にて」という詞書があります。

草むらに友らと坐りてにぎりめしをほほばりながら語らひするも

国見せし古人にさながらに大隅薩摩の広ごれる見ゆ

桜島の手前のあたりかすみつつはるかにみえて夕立ふるらし

二首目の「古人にさながらに」というのはいにしえびとさながらの気持になるという意味でしょう。それならば下の句は「大隅薩摩の広がりを見る」でなければいけないと思います。「見ゆ」という自動詞では意味が通りません。三首目は実際の状況をとらえた歌と思われませんが、難をいうと「はるかに見えて」が桜島なのか夕立なのか漠然としていて、それが歌の印象に不明瞭なものを残すようです。

霧島の緑は我に問いかけど我は答えず空を見上げる

これは「霧島の緑」というのが擬人化されていて、それが「どうだおれはきれいだろう」と自分に問いかけるけれども、自分は知らぬ顔をして空を見上げたという意味にとれます。しかし本当はそうではないので、霧島の緑が訴えかけてくるものが非常に美しいので、いう言葉がないという意味なのだと思います。私の解釈が間違っているかも知れませんが、この歌の意味

が正確につかめないのは、表現そのものに間違いがあるからです。次のように直してみました。

霧島の緑にわれは向ひて言ふことばなし空を見上ぐる

次の歌にまいます。

混濁の偽善満ちたる世なれども我は歩まん一筋の途

これは読んでみて非常にすっきりしているように思うでしょう。しかし、混濁とか、偽善とか、一筋の途とかいう、漢語が使われているために、全体が概念化されてしまって、やわらかみを失ってしまったのです。本来に一生を貫いてゆく志というものは、一時的に肩ひじを張って大言壮語する所からは出て来ないので、もっとやさしい、おだやかな表現の中にかえって持続する志がよくあらわされるものなのです。たとえば

濁りたる偽りの世と思へども力尽して道を求めん

というような表現の方が、ことばはやわらかくなくても歌としてはかえって強い力をもつものなのです。そのあたりが短歌というものの最も微妙な「かんどころ」なのです。最後に四首の連作ですが、これは作者がこの合宿に来る途中の列車内で見た光景をよんだものと思われまゝ。

混みあへる列車の中に年老いし行商人らしき夫婦のゐたり
ややありて行商夫婦は助け合ひ包みをときて整理はじめぬ
赤黒く日焼けし給ひしその顔に暑きさかりの商ひを思ふ
幾年を共に商ひし給ふか兩人の手に深きしわあり

これらの歌には名もなき人々に対する思いやりの気持が溢れています。歌で最も大切なものは、対象に対する深い愛情であらうと思われまゝ。

以上で全体批評を終わりますが、語法の間違いや表現の幼稚さは、初心者にとって少しもはずかしいものではありません。それよりも何度もくりかえされた「心の姿勢」こそ大切なものです。最後に国民文化研究会の会員で、今ニューヨークにおられる沢部寿孫さんから、電文で送られて来た歌を二首あげておきます。合宿にかける思いを偲んで頂きたいものです。

をちこちゆ集ひきませる友達と相語りたき思ひせつなり
ひたすらに励みいませむ友どちの思ひに我も連ならざらめや

(福岡教育大学講師)

年
間
活
動
報
告

一年のあゆみ

雲仙合宿より霧島合宿まで

早稲田大学政経学部四年

山口秀範



雲仙「合宿教室」を終えて

① 参加者への呼びかけ

② 各地の小合宿

③ 寮生活

④ 「しきしまの道」研鑽

春季合宿

① 西日本地区春季合宿

② 東日本地区春季合宿

新年度活動

① 新入生勧誘

② 「葦牙寮」開寮

③ 「合宿教室」勧誘

一、雲仙「合宿教室」を終えて

① 参加者への呼びかけ (読書会)

昭和四十五年八月七日より十一日まで雲仙に於いて開催された「第十五回学生、青年合宿教室」で、様々な体験を重ね、多くのことを学んだ私達は、九月、それぞれの大学へもどって直ちに新しい動きを開始した。雲仙での四泊五日は、日頃の大学生活では容易に味わい得ない緊張の連続であり、その中で、眼前の霧が晴れる思いに勇気づけられて帰った者もあったが、また、今まで自分で作り上げていた世界がガラガラとくずれ落ちて、何が何だかわからなくなったという者もあった。しかし、合宿に参加したわれわれすべてにとつて、合宿教室で直面した幾多の問題を避けて、それ以後の生活を続けることはできなかった。数年来、「信和会」として研鑽を続けてきた、九州大、熊本大、鹿児島大、東京大、早稲田大等ではそれぞれ学内への働きかけが行なわれたが、今合宿で初めて、十七名が参加した慶応大でも伊佐裕、金井幹雄、後藤元秀、重松賢一(いずれも一年生)の四君が中心となって次のような刷り文をつくり、合宿教室参加者のみならず、身近な友らに対して力一ばいの呼びかけを開始した。

△今度、慶応大学の中に夏の雲仙合宿に参加した者で輪読会を開きたいと思えます。合宿で小林秀雄先生が「歴史を識るとは、歴史を自分の心の中に蘇らせることです。」とお

話になりましたが、この御言葉はそれまで歴史を単なる事実の羅列だと考えていた僕らにとって、どれ程大きな衝撃であったでしょう。我々は今まで歴史を学ぶについて、かく／＼の事実があったという事を知っただけで歴史が解ったと思ひ込んでいた。或いは本を読むに際しても、これは何々を書いてある本だという概念的な言葉をあてはめるだけで、その本が解ったと思つていた。しかし、この合宿に於いて、それらがいかに間違つていたかを思い知らされました。一冊の本の中で、自分に迫つて来るような言葉に触れた喜びこそ本当の読書の喜びではないでしょうか。

数多い慶応生の中でほんのわずかの人数ではありますが、合宿での貴重な体験をもとにして新しい流れを慶応義塾の中に起したいと思ひます。そして一人でも多くの塾生がこの輪読会の大切さをわかつてくれるよう努力したいと思つていきます。▽

このような呼びかけと共に各地で輪読会が始まった。テキストとしては、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（東京大・九州大）小林秀雄著「私の人生観」（慶応大・東京工大）吉田松陰の「講孟余話」（鹿児島大）本居宣長の「うひ山ぶみ」（早稲田大）「西郷南洲遺訓」（福岡教育大）小田村寅二郎編「日本思想の系譜」（熊本大）等が使われたが、それら古典のひとつひとつに先人の心を偲びつつ、研鑽が重ねられていった。

② 各地区小合宿

合宿名	期日	場	所	参加大学
玉川大日本文化研究会	45・9・5～6	東京都菅原神社		玉川大
法政大日本思想研究会	11・1～3	神奈川県葉山アサヒビル寮		法政大
早稲田大信和会	11・7～9	埼玉県早大本庄セミナーハウス		早稲田大
鹿児島大信和会 社会科学研究会	11・12～14	鹿児島県青少年研修センター		鹿児島大
慶応大信和会	11・17～19	神奈川県葉山アサヒビル寮		慶応大
福岡信和会	11・21～23	福岡県太宰府戒壇院		九大・福教大・西南大 九大・佐賀大・鹿大
熊本信和会	11・21～23	熊本県阿蘇熊大研修所		熊本大・熊商大・鹿児島大
上智大信和会	11・22～23	長野県信濃追分 油屋旅館		上智大
東京大信和会	12・19～21	群馬県東大谷川岳寮		東京大
富山大信和会	12・19～21	富山県アオイススポーツハウス		富山大・金沢大
玉川大日本文化研究会	46・1・24～25	東京都八王子セミナーハウス		玉川大

秋から冬にかけて、前の頁の表のように各地で合宿が企画された。

慶応大学でも十一月十七日から神奈川県葉山で合宿を行なった。合宿中、毎日輪読した「私の人生観」の中で、小林秀雄氏は宮本武蔵の「我事に於て後悔せず」という言葉について次のように書いておられる。

「今日の言葉で申せば、自己批判だとか、自己清算だとかいふものは、皆嘘の皮であると武蔵は言っているのだ、そんな方法では真に自己を知ることが出来ない、さういふ小賢こさかしい方法は、寧ろ自己偽瞞に導かれる道だと言へよう」

この箇所については皆から様々な意見が出たが、伊佐君は次のように語った。

「僕は今まで大学生活を送っている自分の虚しさを消すには大学をやめれば解決がつくと思いつめていました。そして、かねてから抱いていた画家への道を歩こう、絵の為ならどんな事が起っても決して屈すまいと考えていたのです。しかし、今はそのような自分の気持が何か納得出来ません。今までずっと続いて来た一つの流れがある。それをたちきり、別の流れをつくる。別の流れをつくったが最後、次々と新しい流れをつくらねばならぬ。それは糸の切れた風のようなものだ。そのような気がするので、今を後悔しても何の役にも立たないと思います。今をそのまま受け入れることよってのみ、新しい本当の道が開けて行くのではなからうか。小林先生が語って居られる「かけ替へのない命の持続感」とは、一日一日を精いっぱい生

きようと努力から初めて生れて来るものではなからうか。

今、僕はとてもすがすがしい気持です。夜明けを迎えた時のようにさわやかです。「我事に於て後悔せず」という言葉に出会ったことが大変有難く思われます。一人ではこの言葉を見逃していたかもしれないと思うと恐ろしい気がします。輪読の有難さをつくづく感じました。私達は夏の合宿教室で小林秀雄先生のお話しをお聞きして大きな感銘を受けた。しかし、その感動を一時的なものとして終わらせない為には、折りにふれて自分の気持を確かめ、深めてゆく努力が大切である。友らと一冊の本を読んでゆくという勉強の中から一人では思い到らないような大事な点にはっと気付かされることがある。

友と共に勉強してゆくことの有難さを九名の参加者はそれぞれ感じ取ることが出来た。後藤元秀君は合宿前に自分たちだけで果してやってゆけるのかと不安を訴えていたが、合宿終了時の感想文には次のように書き残している。

△合宿地に来てからも「やる気のある者がいれば例え人数は少なくとも問題ではない」と、声に出して自分の気持を確かめ、心の隅にあるわだかまりを解こうと必死だった。ところが、いざ始まって、輪読、和歌創作等とやっていくうちに、何時しか、その中にとけ込み、自分の思ったことや感じた事を話したり、皆の意見を聞くのが楽しくなってきた。今、これを書きながら考えてみれば、何故、あんなことにこだわっていたのかと思わずにはおられません。「人

数が少なくは何も出来ない」とか「自分達だけで出来るのか」等と思っていた時は、生きて行く上に大切な、一番大事なことから目が離れてしまっていたという気がします。この経験を、これから心の支えにしてゆきたいと思います。▽

この合宿は、各人に確かな力を与えてくれた。東京にもどると、手わけして立派な合宿記録が出来上がった。それは全国各地の同友にとっても大きな励ましとなったのである。

○……………○

福岡信和会の「秋季合宿」は紅葉に美しく包まれた太宰府戒壇院において九州大を中心に、西南大・福岡大・福岡教育大の諸友、更には佐賀大・鹿児島大からの友らも迎えて開催された。夏以降、充実した活動を続けて来ただけに、この合宿では、冒頭から直ちに友の心に飛び込んでゆくとする努力がなされた。現在は九州地区のリーダーとして活躍している天本和馬君（九大1）は、この年の大合宿に初めて参加したが、その後、友らの集いから足が遠のいていた。第一日目の意見発表で彼は次のように述べた。

△大合宿に参加したが何かもう一つもの足りない気がした。自分が期待した程でなかった。休みが明けて、和歌の会に参加したが何かなじめない。自分が非難されているように思えるし、また自分も相手を非難しようという気がすぐ起る。歌に対する批評が素直に聞けない。

読書会にはあまり参加したくなかったが、やはり友の顔が見たくなるし、話をしたいという気持ちが起こってきて先の輪読会には出席した。その時先輩達が今度の合宿のために一生懸命努力され、動きまわっておられるのを見て、合宿に行かねばならぬという気持ちになった。現在自分分は、何か求めたいという意欲はあるが努力するところまで行っていない。とにかく合宿三日間、一生懸命やりたい。▽

率直に気持ちを表白してくれた彼の言葉に友らは次々と答えた。

△短歌相互批評の時、先輩や友の指摘がおかしいと思ったら、すぐその場で言って欲しい。相手の人はありがたいと思うだろう。意欲はあるが努力まで行かぬと言ったが、わからない点をそのままにせず、もっと本を読んだり、友達に質したりする積極的な心が必要ではないか。▽
△信和会とはこういうものだとかわかれれば打ち込めるというものではあるまい。何かを求めたという、そこにしか自信は生まれない。君の場合一番大切なことは、求める気持ちはあるが努力するところまで行かないというところだ。もう一步踏み出すか否かしかない。▽

天本君は、この時のことを二首の歌によんだ。

我が悩みうちあけたしと思ひつつこれまで時を過ぎしつるなり

我が悩み聞きし友らはそれ〴〵に我を思ひて語らひつるなり

天本君としては、思い切って自分の悩みをぶつけてホッとしたのであろう。ところがこの

和歌を相互に批評しあつた折、更に厳しい指摘がなされた。

△二首目で「我が悩み聞きし友……語らひつるなり」と詠んでいるが、君は友達が「聞いた」のではなく「聞いてくれた」ということを感じないか。皆は「語らひつるなり」ではなく「話してくれた」のではなかったか。友達に本当に君自身の心を聞いていないからこのような表現になつたのだと思う。友達一人びとりの心に近づいて行こうとしなければ、君が「我が悩み」をうちあけようとしても、ただ自分が満足するだけに終るだろう。▽

私達は人と心を通わせて生きてゆきたいと願うが、それにはまず、友との切磋琢磨の中で互いに言葉を正しあうという努力からはじめなければならぬ。それはしばしば激しい火花の散るようなつき合いとなるが、そこに感じられる「共感の世界」——共に生きているという実感——こそ、合宿の中で私達が求め続けたものであった。

天本君は合宿が終つて積極的な活動を開始したがこの合宿で大きく目を見開いた一人である。

私達は先の「夏季合宿教室」で沢山の素晴らしいものを与えられた。そして、その中の一つでも良いから本当に自分自身の力で消化したい。この一つだけは自信を持って大切だと言えるようになりたいたと願つた。この祈るような気持ちで輪読会や合宿に私達を駆り立てた。大学は文字通り索莫とした空気につつまれていたが、その中で多くの師友に支えられながら、生きて

行けるといふのは、この上なく有難いことであつた。

③ 寮 生 活

私達は週一回輪読会を続け、合宿等を通じて研鑽している。しかし、私達にとって最も大切であるのは、一日一日の生活の中で如何に身を処して行くかということであらう。東京地区の読書会で、長内俊平先生(電源開発勤務)が

△一日一日を懸命に生きていない者がいくら読書会に来てもだめだ。一週間のうち、読書会のないあとの六日の方が余程大事なんだよ。六日間へとへとになるまで頑張つて、その上でみんな集まるんだ。▽

と話して下さつたが、ともすれば易きに就こうとするわれわれにとって何よりも有難かつたのは「正大寮」での生活であつた。「正大寮」は諸先輩の御力添えで四年前に始まつた。東京の学生四名——北崎伸一(上智大3)・田所 健(中央大3)・加来至誠(東京大3)・山口秀範(早稲田大3)——の起居する寮であるが、その生活の一端を、次の一文(国民同胞二〇八号に掲載)から汲み取つて頂きたい。

△九月二十日の夜、「最近、一人一人がばらばらで、寮生活がうまく行っていないように思う。皆んなで輪読しようじゃないか。」と加来が言い出しました。僕も、九月以降の寮生活

に、何かしら不安と不満を感じていた矢先のことでした。輪読箇所は、橋本左内が十五歳の折りに記した「啓発録」（四、勉学）です。

「学トハナラフト申ス事ニテ……故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テハ直ニ其人ノ忠義孝行ノ行為ヲ慕ヒ倣ヒ、吾モ急度其人ノ忠義孝行ニ負ケズ、勉行候事、学ノ第一義ナリ。」

この文に眼を止めた友は「直ニ慕ヒ倣ヒ」「急度勉行」という、物事に素早く感ずる心は素晴らしく思える。此頃の寮生活に於いては、相手の言葉に敏感に反応する心を皆んな失っているのではないかと」と自からの生活を省みつつ語りました。このころの寮は、多くの友が訪れて活気に溢れていた合宿前とは一変した雰囲気でした。必死の面持ちで試験勉強に取り組む友や、何事か深く考え続けて苦しそうな表情を見せる友を前にして、四人の気持が一つのところ



を向いてるといふような毎日を送ることは非常に困難なことでした。しかし左内の文章に触れ、友の話を聞いているうちに、黒上先生の説かれた「他と共なる人生」というのは、必ずしも、一つの仕事を一緒にやっている時や、話す機会が多くてお互いの気持ちをぶっつけ合っている時にのみ、実現されるものではないと気付きました。確かにたとえば六・七月の合宿勧誘期には、みんなの心がいつも一つのところに向っているという実感が僕の生活を支えてくれました。しかし、一人一人がそれぞれの課題に懸命に立ち向かって話し合う時間は少ない時でも、友の一言に敏感に心を止めることさえ出来れば、僕の不安などけし飛んでしまうなと感じました。一昨年の寮日誌に、小田村先生が当時の寮生に寄せられた御意見が書いてありました。

「単なる共同生活の場としてではなく、お互いに自分達の信念・理想をぶっつけ合い、その中で自分の枠を超えた同胞感の確立という事に思いを致すことの出来る場として欲しい。君達の抱いている何かくぐもった感情は、共同生活を単にうまく纏めようとする時に起る摩擦に過ぎない。」

四月に寮生活を開始した時の初心——僕達の生き方に対する確信を、友と共に求めてゆこうという気持ち——に立ち返って、明日からの生活に向かおうと、友の顔を見ながら力の湧いて来る思いでした。》

④ 「しきしまの道」研鑽

私達は合宿教室で和歌について学んだ。それは単なる教養とか、たしなみのためではなく「思想および表現の正確さを修練するために」と教えられた。そして、実際に参加者全員が歌をつくり、相互批評をしてみると、自分の感動を言葉に表わすことが如何に難しいか、自然や人の心をありのままに受け止めることがどんなに大変なことであるかを痛感した。

九月以降各地で「和歌相互批評の会」が開かれそれぞれの気持ちを言葉に整える修練が始まった。相互批評の場で友の前に自分の歌を披瀝するということは、自分の精神生活をさらけ出すことでもあり、勇気のいることであった。不正確な表現、感動を伴わない歌を次々に指摘されると腹立たしくさえなるが、それらの指摘が、本当に自分のことを思ってたがわかれと三十一文字を通して具体的に友と自分の気持ちを通い合い、友情の深まりゆくことがわから嬉しく思われる。このような時には、いにしえから幾多の先人、祖先たちが歌をつくり続け、それが「しきしまの道」と呼ばれ、日本人みんなが踏み行なう道であるとされて来たことが素直に納得できた。

福岡の友らは十二月四日、市内の水鏡天満宮で相互批評の会を行なった。この日は、十一月下旬に行なわれた合宿の記録集「大信海」作りに関しての歌が多かった。

せまき部屋にあまた友らのつどひきて記録作りぬ声さわがしく
戸を開けて「今晚は」とて友達の来ればまたもよかしくなる
体をばよせつつひとつの小机に友ら三人とプリントを切る
次々に切られし原紙をうけとりて友はたちまち刷りあげてゆく
夜はすでにふけぬらしされど印刷のできゆく見ればねむたくもなし
筆先に墨ふくませて「大信海」の一字一字を思ひこめ書く
友みな力あはせて今ここに合宿記録「大信海」成りぬ
友の力あはせて成りし刷文を遠つ友らに早く見せし
友の見て驚かむ顔を思ひつつ手紙を書けば力こもりく
友みな書きし冊子なれば紙ごとに様々の字のありてたのしき
文章はつたなかるとも印刷はそまつなれども尊しこの冊子
この冊子にこめし思ひを今よりの共に学びゆく力とはせむ
友みなと力あわせて刷りゆけばいつしか夜もふけてをりたり
一心にガリ版きりに友ら皆疲れもみせずはげみをするなり
まる二日かけて作りし刷文を全国の友に送るはうれし

久々宮

章（九大3）

これらの歌に対し友らから次のような意見が出された。

△小柳君の五首目、何かを一生懸命にやっている時には「ねむたくもなし」という感じ方はしないはずだ。九首目、「驚かむ」という表現からは、うわべだけの驚きということが感じられる。友が合宿記録を読んだ後での、本当の驚きこそ大切なはずである。▽

△久々宮君の一首目の「をりたり」、二首目の「をるなり」は感動が直接ひびかず、間をびして聞こえてくる。二首目の「はげみをるなり」は「共にはげみつ」とした方がよい。三首目の「まる二日かけて」は述べる必要なく「心こめて友と作りし」と詠んだ方がよい。また、上の句と下の句に、それぞれの感動があるから二つに分けて詠んだらどうか。▽

この相互批評の記録は、手分けしてガリ刷りにされ、全国の友に発送された。各地からは、御礼状や、励まされたという便りが数多く福岡へ届いたが、熊本の北島照明先輩からは次のような激励の手紙が届いた。

△私の考えでは歌はやはり「感動」が中心であると思います。つまり、美しいものを感じたら「ああ美しいなあ」という、感じる心が基盤だと思います。その上で、その美しい実体・・・・・自分なりに厳しく迫ってゆくことだと思います。漠然と生活を見つめては、一瞬の生活のリズム・・・・・のことばはうかんではこないと思います。つまり、自分なりの厳しい「求道」の生活のリズムだと思います。「生きる」という自分の人生姿勢が、歌のことばだと思っております。真剣に

生きてゐる、真剣に生活をみつめてゐる、真剣に自己反省してゐる、その生活のあるがままが歌の素材と申します。このような考えから見た諸君の歌には、何かしら間のびの感があります。○具体的には、連作がやや多すぎやしないだろうか。そのために感動の中心がうすれてしまつてゐる様な気がする。

○連作も一首一首が厳しい写生と内面の姿がいり込みながらできてゆくとき生きてくるのではなからうか。

○小さい自然のものにでもじつと心をこらして、その姿をなんとかして一首にうたい込めることも必要のような気がする。

小柳君の連作には驚きました。全く感服しました。ただ連作のため、うたとしての感動がうすれてゆくのが難点です。つくらなくてもよいのだが中にはあると思います。あるいは二、三首を一まとめにしてしまうこともできると申します。皆の批評がピツタリだと思ひます。「声さわがしく」「ねむたくもなし」「見せたし」「ありてたのしき」「力とはせむ」等は最後のことばによつてせつかくの前半の調べが流れてしまつてゐるようです。その他表現がオーバーのうたも幾首かあります。素直に、あるがままの自己の生活をじつと見きわめ、見きわめして、ことばを選んでほしいと思ひます。▽

二、春季合宿

秋から冬にかけて続けて来た各人の成果を持ちより、また今後この学問の輪を更に広げて行くスプリング・ボードにもするため、春休みに合宿が企画された。学生リーダー間での話し合いの結果、東西二地区にわかれて、いずれも三月末に開催することが決まった。

ここに東日本地区の友らに参加を訴えた檄文の一部を掲げる。

△昨年九月以降、合宿で知り合った友が集まって輪読会が続けられ、いくつかの大学では小合宿も行なわれて、素直に思った事をぶつけ合う場をつくろう、相手のことを本当に考えたつき合いをしようと努力を重ねて来ました。この四月には、一人でも多くの新人生と話して、僕等のつき合いの輪を広げて行きたいものです。それにはまず、僕等自身がどのような学生生活を送っているのが問われると思います。先人の遺してくれたことばや一首の歌に触れて、ともすれば弛み勝ちな心を正して行かねばなりません。

先日、明治天皇の御歌の中に、次の二首を見出しました。

さ夜ふかく心しづめてつくづくとあすせむことをおもひさだめつ

あかつきの鐘のひびきに夢さめてわがなすわざを思ふなりけり

夜、お休みになる直前も、朝、目を醒まされた瞬間にも、不断に日本の国のことを考えてお

られる御心が伝わって来て、有難いと感じました。と同時に僕らも、朝起きて、きょうは、あの友を訪ねて話そう、明日はこの本を読破しよう」と決めて床に就くというような、緊張した毎日を送っていかねばならないと、励まされる思いでした。

この春休みの一日一日を大切に過ごして行こうではありませんか。そして、各人の春休みの成果を持ちよって春期合宿を充実したものにしたいと考えています。

西日本地区の友等は、三月二十七日から三日間、熊本に集まることが決まり、着々と準備を進めています。場所こそ離れているけれども、九州の友と励ましあって、一人一人が更に力強い生き方が出来るよう研鑽したいと思えます。▽

① 西日本地区春季合宿

○期 日：三月二十七日～二十九日(三泊三日)

○場 所：熊本市松鶴ユースホテル

○参加学生：九州大・鹿児島大・熊本大・九州歯大・福岡教大・西南大・佐賀大・長崎大・鹿児島
経大・慶応大(26名)

○先生・先輩方：(7名)

② 東日本地区春季合宿

○期 日：三月二十八日～三十一日(三泊四日)

西日本地区合宿日程表

	27 (土)	28 (日)	29 (月)
6			
7		起床 国旗掲揚 体操・朝食	同 左
8			
9		発表「聖徳太子の時代背景」(福永好紀)	全体和歌批評 (北島照明)
10			
11		全体輪読	班別和歌相互批評
12		昼 食	同 左
1	集 合	発表「デモクラシーとは何か」(片岡 健)	今後の地区別活動について
2	開 会 式	和歌についての発表 (前田秀一郎)	の話し合い 全体意見発表
3	自己紹介	熊本城散策	感想文執筆
4	全体意見発表	(和歌創作)	
5			解 散
5	夕食・風呂	同 左	
7	発表「小林秀雄先生の文章に触れて」 (吉田哲太郎)		
8		全体輪読	
9	発表「悲しみと悩みを分けよ」 (田村 潔)		
10	班別自由討論	夜の集い	
11			
12	就 寝	就 寝	

輪読は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(黒上正一郎著)を使用

○場 所…京都郊外鞍馬寺
 ○参加学生…東京大・早稲田大・慶応大・上智大・法政大・中央大・東京外大・岡山大学・京都大・皇
 学館大(22名)
 ○先生・先輩方…(8名)

東日本地区合宿日程表

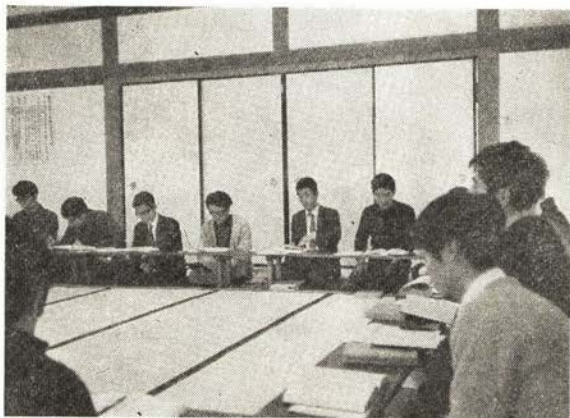
	28 (日)	29 (月)	30 (火)	31 (水)
6				
7		起床 国旗掲揚 御製拝誦 体操 朝食	同 左	
8				同 左
9		全体輪読	発表「生と死と」 (石村 善悟)	和歌 相互批評
10		発表「やまと心一宣長の歌と学問について」 (伊藤 祐)	自由質疑並びに 応答 (小山村寅二 郎先生)	
11			発表「京都御所について」 (国武 忠彦)	輪 読
12		昼 食	同 左	同 左
1				
2	開 会 式	講義「吉田 松陰」 (小柳陽太郎先生)	京都御所拝観	大合宿へ向けての 連絡会議
3	全体意見発表		(和歌創作)	感想文執筆
4	全体輪読	質疑応答		閉 会 式
5				
6	夕 食 入 浴	同 左	同 左	
7				
8	発表「三島由紀夫氏の自刃について」 (山口 良男)	発表「福田恒存氏の歴史の見方」 (藤井 貢)	班別輪読	
9				
10	班別輪読	班別輪読	夜の集い	
11				
12	就 寝	就 寝		

輪読はすべて「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(黒上正一郎著)を使用

これら二つの合宿の大きな特徴は学生の研究発表が日程の大きな部分を占めているということであろう。内容的にはまだまだ不十分なものではあったが、自分の力で何か新しいものを生み出す手がかりとしたいと、友らは日頃自分が取り組んで来た書物をもとに発表した。

もう一つの主な柱は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(黒上正一郎著)の輪読であった。この本は、合宿教室に連なる数多くの先生、先輩方が戦前戦後を通じて大切に読み続けて来られ、生きる力とされている書物である。著者は、その一語一語に思いをこめて書いておられるので、受け止める私達の方に充分な心構えがない時には容易に響いては来ない。合宿中も一人ひとりが心の姿勢を整えつつ、友と力を出し合って読み進んだ。

なお、東日本地区合宿では、先輩方の御尽力によ



(東日本地区鞍馬寺合宿)

り、特別のおはからいで京都御所拝観が叶った。折りからの雨に濡れ、静かなたたずまいを見せる「紫宸殿」の正面には、名にし負う左近の桜、右近の橋も若葉をふいて清々しい。「清涼殿」「小御所」「滝口」等を今確かに、目の前に拝見していることが何か信じられない気がして来る。それにしても写真等で見る華やかさとは異なり、くすんだ色と簡素な建て物によって私達は、静かに「魂の故郷」に導かれるようであった。天皇が御退位後住まわれた「仙洞御所」の素晴らしいお庭も見せて頂き、池や木々の一つ一つを深く心に留めたいと、時の過ぎるのを忘れる思いであった。

青山直幸(東京大3)

真白なる作業衣をつけ奉仕せんとはせ来るらし人々の見ゆ

日の本の津々浦々ゆ奉仕せんとさそひ来りし姿頼もし

国民は心尽くしてつぎつぎに守り来たりき京の内裏だいりを

春雨に濡れそぼちつつ立ちわたる松の緑の目にもさやけし

白き砂利を踏みしめてゆく己が内に高まる心とどめかねつも

しつくいの冷たき床に居たまひておろ拝がみませる御姿しのぼる

朝毎に祈りたまひし天皇のみ心思ひしらずふるへつ

広瀬清治(早稲田大4)

清涼の東の庭に出でまして朝ごと祈らるる天皇はすめらみこと

東庭にたたずみをれば天皇の祈らるる御姿うつしく見ること

いにしへゆ京都の御所を心あはせ守り来りし人あまたあり

その晩の黒上先生の書物の輪読は記紀の一部が引用された箇所であったが「清涼殿」で歴代天皇方が毎朝祖宗に祈られたこと、御所をまもるために多くの民が力を尽くして来たことなどをまのあたりに見て、祖国建国の神話が身近に感じられ、日本の国柄の有難さが一きわしみじみと感しられた。得難い経験であった。

三、新年度活動

① 新入生勧誘

春休みを終えて各大学へもどると直ちに新入生勧誘を開始した。今まで積み重ねてきた学問を、新たに大学の門をくぐった後輩達に伝えて行こうとするのは、大きな楽しみでもあったが、同時に、自分の力不足を痛感することも度々であった。

△ほくらが学問に志す際に、知識や理論体系を求めるのはもつともであるが、その場合知識・理論を取り扱うほくらの心の働きが柔軟でなければ、それらはすべて形骸となるのではあ

るまいか。与えられた知識や理論を鵜呑みにしてしまい、自分の現実生活との関わり合いを欠いたところに真の学問があるとは思われない。さらに、現実生活には、知識や理論体系のみでは解決できない多くの問題のあることは、ぼくらの身のまわりを見ても容易にわかることと思う。それらひとつひとつを自分の問題として取り上げ考えてゆく所に自分の学問が試され、練磨されてゆくのだと思う。人の心は寸断され、機構のみ次第に拡張されてゆく大学の中で、共に学び、自己の体験に根ざした言葉を語り合える場を確立することが、今のぼくらには肝要なことと思われる。友の言葉に耳を傾け自分の思いを相手にぶっつけて、互いに切磋琢磨してゆくなから、生きた学問が育ち、真の友情が生まれるのではないか。▽

右の文章は、早稲田大での勧誘文の一部であるが、各大学とも数千枚のビラを配り、関心を示してくれた人に対しては、一対一で徹底的に話した。新入生から、「何故、特に日本の古典を読むのか」「他人と一緒に読むことにどんな意味があるのか」等と問われた時、それに答えるには自分の心に改めて問い直し、今まで積み重ねて来た体験の一つ一つを語るしかない。単なる知識や理論ではとうてい私達の気持ちを伝えることは出来ない。言葉一つ一つの大事さ、難しさをつくづく感じた。我々の学びの輪を広げてゆこうと連日キャンパスで語り合ったが、それは同時に自分自身の学んで来たことを今一度確かめる場でもあった。

② 「葦牙寮」開寮

前年の秋頃から話しが進められて来た福岡の寮が四月から開寮した。「葦牙寮」と名づけられたこの寮は、応神天皇・神功皇后を祀る「筥崎宮」の参道脇に位置し、また元寇で名高い玄海灘をすぐ近くに望む。この知らせを東京で聞いた私は、早速次の歌を友らに書き送った。

九州にも寮の出来ると嬉しげに友は便りの真っ先に書けり

会ふ度に「寮作りたし」と語らひし友らの姿眼に浮かび来る

箱崎の潮の香りの漂へるそのあたりかも友らの住まひは

汐風の吹き入る部屋に集ひ合ひ物語りせむ時の待たるる

寮生活は九州大学医師の友池仁暢さんと、九大生の久々宮章（４）・吉田哲太郎（４）・堀田真澄（２）の四名で始まり、九州地区の活動の中心となつて行つた。寮長である久々宮君は開寮に際し次のような文章を書いている。

△私は現在、工学部の三年で、教養部時代のように暇がない。四年になればすぐ就職のことを考えなければならなくなる。ここで、自分の専門の勉強に打ち込みたいと思ひました。そういうわけで寮に入れば勉強がしにくくなるのではないかと思つたのです。そんなある日、東京の正大寮で寮解散の話がもち上つたということを知りました。ますます私は寮に入ることをためらうようになりました。そこで、このことを先輩や友達に話してみました。ところが、皆程

度の差こそあれ、同じような問題をかかえておられたのです。特に印象に残ったのは「僕らは、時間が足りないといいがちだが、随分無駄な時を過していることが多い。また、どうしても勉強しなければならぬ時でも、友達への気がねや遠慮から、勉強を後回しにしてしまい、結局それが積み重なると、友の存在がわづらわしく思われるようになってしまふ。そのような時に、遠慮しちやいけない。このような時こそ、本当の友達づきあいはどうあればよいのかを考え直す必要があるのじゃないか。」という言葉でした。

ふり返ってみると、確かに、友とのなれあいや気がねからはつきりした態度をとっていかなかったところがありますし、自分自身の生活態度にもいいかげんさがありました。その時に、福沢諭吉の次の言葉にふれました。

「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、



(葦牙寮)

人を恐るる者は必ず人に諛ふものなり。」(「学問のすすめ」)

これを読んで恥づかしくなりました。自分に何が足りないのかが、はっきりわかりました。自分にやる気があれば克服できることだと思いました。すると急に、今この機会をのがせば、一生このような経験は得られないかもしれないという気持が強く起って来ました。また日頃、友と心をつつにすることを信条として、人にも訴えている私にとって、それが自分自身にできるのか、できないのか、それを試すのにこれほどの場はないと思えました。私は寮に入ることになりました。

私は、現在これから始まる寮生活に大きな期待をもっています。江戸時代後期の豊後日田の儒者広瀬淡窓が次のような詩を残しています。

示 諸 生

休^{ヤメヨ}道^{イフツ}他^{シト}郷^{シト}多^{シト}三^{シト}苦^{シト}辛^{シト}

同^リ袍^ラ有^ラ友^{シム}自^ラ相^{シム}親^{シム}

柴^チ扉^ヒ曉^ニ出^ル霜^シ如^シ雪^ノ

君^ハ汲^メ三^ツ川^ノ流^ヲ我^ハ拾^ハ薪^ヲ

先人達は、この詩にあるように、大自然の中にとけこみながら塾生活を送っていくうちに、

人としての道を自然に培っていったのだと思います。質実剛健を旨として、率先して勉学に励み、仕事に取り組む中から、お互いの連帯感が生まれ、それによって人に尽くすことの尊さを学び、また国に奉ずる志を篤くしていったのではなからうかと思えます。私達は、お互いの切磋琢磨を通して真の学生生活をこの寮に具現することに大きな意義があると思えます。東京の正大寮、九州の葦牙寮が、全国の志を同じうする学生の研鑽錬磨の中心として、大学に新しい学風を興す原動力を培っていききたいのです。▽〔国民同胞〕一一五号)

③「合宿教室」勧誘

五月の末に九州から、リーダーの前田秀一郎(九大4)・定栄安治(鹿大4)・吉田哲太郎(九大4)の三君が上京し、東京地区の学生と本格的に夏の「合宿教室」へ向かう覚悟を定めあった。そして六・七月は、活発な勧誘活動を展開した。六月初旬には、福岡地区と早稲田大学とで、それぞれ新入生歓迎の合宿が行なわれ、熊本大・鹿児島大では学内講演会も開かれた。また長崎地区でも合宿が持たれた。

六月の二十と二十三日には、藤井 貢(早大3)・山口良男(上智大3)の二人に九州大の木村秀晴君(2)が加わって、四国の各大学へ。二十五と二十七日には、開 克史(早大4)・安納俊紘(東外大4)・青山直幸(東大4)・伊藤 祐(法大3)・山口秀範(早大4)の五名

が京都大学へ赴き京大生の鈴木睦夫（院生）・山田宗彦（2）両君と合流して合宿への参加を呼びかけた。

登校時の学生一人びとりに、案内ピラを渡すとき、私達は、相手の目を見ながら、そして大声で挨拶しながら行なった。ピラを手渡す瞬間に私達のすべてが賭けられていると信じていたからである。毎日義務的に配られるアジピラに慣れ切っている多くの学生にとって、この光景自体が異常に感じられたようだ。しかし、「おはよう」と挨拶を返してくれる人もあり、昼休みの説明会に来て熱心に聞いてくれる学生も少なくなかった。私達はこれらの人々に勇気づけられた。

一方では、「自治会」と称する学生達に、ピラ配りさえ妨害されることもあった。自分達の主張のみを絶対と考へ、他の意見には耳を貸そうともしない者には心からの憤りを覚えずにはおられなかった。そして、意見の相違があれば、それだけで全く心の通わなくなっている大学の現状を本当に悲しく思った。次の歌は、九州大での勧誘の様子である。

友と三人で合宿の勧誘を折

刷り文を配りてをれば友達に激しき抗議をなすものありき

驚きて馳せ寄り行けば友達は己が思ひを語らむとしつ

堀田真澄（九大2）

はしくのこのみいたづらにあげつらひわれらがおもひ汲まむともせず
答へむと心はやれどもどかしく思ひはさらにつくし得ざりき

先輩がかけつけてくれて

先輩の顔をしみればはりつめし心はしほみ甘えゆくなり
先輩の強きふるまひみしとときにやらむと思ふ心決まりぬ

困難は多かったが私達は歩一歩、道を開いて行った。かくして雲仙合宿から一年が過ぎ去り霧島高原に再び集う日は目前に迫った。この一年間の積み重ねで逞しくなったであろう友の顔を、一日も早く見たいと思った。そして更に、新しい友らと思いのたけを尽くして語り合いたいと思った。大学キャンパスはすでに真夏の陽射しであった。

仙洞御所・醒花亭

我が国の経済的発展の素晴らしさは、今や世界各国の人々の注目をあつめ、日本国民の生活は年毎に、より豊かになりつつある。これはこの二十六年間、敗戦の悲しみをこらえつつ経済自立を目指して力を合わせて励んで来られた日本人、一人びとりの努力のたまものであり、戦後に生まれ、育てられた我々学生、青年がわれわれの父祖に対し、先輩に対して深く感謝するところである。しかしながら一方では、我が国には内部的に、又対外的に様々な問題が生じ、我々は、出来得るかぎり早急にそれらを解決すべき必要に迫られている。ここに於いて、我々日本人の中から、経済的繁栄の追求のみに専心してきたことに対する反省が生じ、この繁栄を支える精神的基盤を求めんとする風潮、あるいは、この繁栄の上のうちたてるべき真の精神生活を求めんとする気運の生じたのは当然であった。かくして、いま日本の歴史、伝統を見直すうとする気運が生じつつあるが、この場合にも、「自分は日本人である」という痛感なしに、自分とかけ離れた、日本あるいは日本人なるものを客観的に、分析的にのみ捉えむとする人が多い。だが、この様な態度では、どうしてこの日本に、真の精神的基盤を形成することができよう。先人の悲しみ、よろこび、苦闘を自らのものとして受けとめることなくしては、その精神力を己の支えとして力をつくすことのできぬのは明らかである。我が国の現状を打開する必要を説く人々は多くいながら、そしてその為には、制度、政策の手直しよりもまず、精神的改革の必要なことを主張する人々も多くありながら、それを自らの生命の問題としてとらえ

る人の少いのは残念なことである。ここに於いて我ら学生、青年に課せられた責務は大きいと言わなければならぬ。「我らは如何に生きるべきか」この根本的問題の解決を求めて、全国より、三百名の学生、青年は、霧島山上に集った。そして精魂をかたむけて、三泊四日間の合宿生活に取り組んだのである。

この「第十六回学生青年合宿教室」は当初、昭和四十六年八月六日より十日まで、四泊五日間の日程で行われる予定であったが、十九号台風による交通の寸断の為、急遽当初の予定を変更し、一日遅れて八月七日より三泊四日間の日程で行われた。場所は、桜島を遠くに望む、霧島の「霧島山上ホテル」、すでに八月二日には、合宿運営の中核をなすべき三十余名の学生、青年が集い、古典の輪読、研究発表、短歌創作及び相互批評等を行いつつ、六日より始まる合宿教室に取り組む心の準備をすると同時に、全国より集い来る三百名の友を迎える為の会場設営等、様々の事務的準備に専心した。ところが折しも南九州に上陸した十九号台風は、三日より烈しい雨を降らせた。五日になっても台風は去る気配なく、風雨はますます強まり、ホテルに至る道のすべては土砂に埋まり、ホテルは停電し、電信電話による連絡は不可能となった。さらに水道はとまり、食糧もつきてホテルは文字通り陸の孤島となった。夜になると、携帯ラジオのニュースは九州各地の被害を次々に知らせ、鹿児島に至る交通の便は全て断たれたことがわかった。今や合宿の開催が危ぶまれた。それでも我々三十余名は、風雨がおさまりに、交通の便

「合宿教室」のあらまし（前田）



さえ回復すれば、全国より友らの集うことを信じて蠟燭の灯の下、時々刻々と変わる情報に一喜一憂しつつ、対策をたて、合宿開催の準備をすすめた。明けて六日、風雨はおさまった。かくて交通の便さえ回復すれば、一日おかれて七日より合宿教室を開催することをとりあえず決定、連絡班はその旨を全国へ電話連絡すべく未明に丸尾にむけて出発した。そうするうちに、霧島神宮駅への鉄道の便が回復した。しかし駅よりホテルに至る、ただ一筋の道路は土砂で断たれている。我々はスコップを持ち、力をつくして、その道路を埋め、いた土砂を取り除いた。道は開通した。

東京大 小田村 初 男

あらし去りくずれたる土砂をみ友らと
力あわせてとりのぞきゆく

あらしつき友らの来るを思ひてはスコップ持つ手に力こもれり

我々は駅で友らを迎える収容班、ホテルに残り、合宿開催の準備をすすめる事務班にわれ、友らを待った。はたして友はやって来た。全国より平常の二倍、三倍の時間を費して苦勞してやって来た。深夜の十二時、一時を過ぎても元気にやって来る。外来講師の村松剛、木内胤胤両先生もすでに合宿地に向かつて東京を出発しておられることが判明した。合宿は確かに七日から行くことができる。うれしかった。ありがたかった。こうして全国より三百名を越える友らがここ霧島の地に集うことが出来たのである。

合宿参加者の内訳は次の通りであった。

- ◇学生百五十八名（内女子学生九名）……………（東日本）亜細亜大・早稲田大・慶応大・中央大・法政大・東京大・玉川大・日本大・東京外語大・専修大・拓殖大・国際基督教大・上智大・青山学院大・秋田大・成蹊大・学習院大・明治大・神奈川大・成城大・東北大・東京工大・明星大（西日本）鹿児島大・九州大・熊本大・福岡教育大・長崎大・国際経済大・鹿児島経済大・岡山大・大分大・皇学館大・熊本工大・神戸大・佐賀大・西南大・京都大・京都産業大・関西学院大・熊本商科大・福岡大・以上四十二大学
- ◇社会人六十六名（内教員三十九名）
- ◇見学参加者四名

◇参観者一名

◇招聘講師二名

◇大学教官有志協議会三名、国民文化研究会五十九名、事務局九名、参加者 総計三百二名
参加男子学生は、七名ないし八名を単位として二十班が構成され、合宿生活を円滑に行う為、各班に一名の班長がふりあてられた。そして昨年迄の合宿教室に参加した経験のある国民文化研究会の若い会員が各班に一人ずつ配属された。さらに青年社会人は八班に、女子学生は一班に構成され、同様に国民文化研究会会員が各班についた。

合宿教室は後記の如き三泊四日の日程で行われた。以下、合宿教室開展の様子をやや詳しく記すが、各講師の講義内容についてはこの書物にその詳細が掲載されているので、ここではその印象を記すにとどめた。

第一日（八月七日）

「友よと呼べば友は来りぬ」嵐をついて我ら三百余名は集った。この混迷をきわめる時代の中に、われら学生、青年は「如何に生きるべきか」この切実の問題の解決を求めんと全国各地より、この霧島の地に集った。今こそ共に語るべき友を得たよろこびが皆の胸にあふれる。そ

8月8日(日) (第2日)	8月9日(月) (第3日)	8月10日(火) (第4日)
起床 朝の集い 朝食	起床 朝の集い 朝食	起床 朝の集い 朝食
「世界各国の思想 動向から見た日本 思想界の反省」 剛 評論家 村松	「事を論ずるには 当に己れの見地を起 すべし」福岡県立 修猷館高校教諭 小柳陽太郎	「合宿をかえりみ て」鹿児島大学教 授 川井修治
		全体意見発表
(和歌創作導入 講義) 熊本県立花園中学 校教諭 北島照明	「国を支える力」 亜細亜大学教養部 長 夜久正雄	感想文執筆と和歌 創作
記念写真撮影	班別輪読	班別懇談
登山 (昼食 携帯)	昼食	閉会式
	「日本にはなぜ天 皇が永続したか」 国民文化研究会理 事長小田村寅二郎	この後昼食 — 解散 —
入浴	班別討論	
「世界の転機と東 洋思想」 世界経済調査会 理事長 木内信胤	夕食 入浴	
夕食	(和歌全体批評) 福岡教育大学講師 山田輝彦	
質疑応答	慰霊祭	
懇談会(千葉三郎 先生を囲んで)	班別和歌相互批評	
消灯	最後の夜の集い	
	消灯	

「合宿教室」のあらまし（前田）

		8月6日（金）	8月7日（土） （第1日）	
第十六回 「合宿教室」 日程表	7:00—	合宿教室は、当初この日より、4泊5日間の日程で行われる予定であったが、19号台風による交通の寸断により、参加者の集合が遅れた為急遽、7日より、3泊4日間の日程に変更。	9時30分より、参加者の受付を開始。	
	8:00—			
	9:00—			
	10:00—			
	11:00—			
	12:00—			
	1:00—			開 会 式
	2:00—			昼 食
	3:00—			「日本にはなぜ天皇が永続したか」Ⅰ 国民文化研究理事長 小田村寅二郎
	4:00—			「思想的混迷から抜けだそう 一明治維新に学ぶ一」 神奈川県立横浜翠嵐 高校教諭 国武忠彦
	5:00—	参加者は、全国各地より、平常の2倍3倍の時間を費して合宿地に到着。	班別自己紹介	
	6:00—		夕食 入浴 散歩	
7:00—		「物を思い、感ずることと生き甲斐と」 国学院大学講師 戸田義雄		
8:00—	参加者は夕刻より深夜にかけて続々到着。	班別討論		
9:00—				
10:00—		消 灯		

の期待と緊張のみなきる中に開会式が始った。午前十一時であった。

△開会式▽

一同、力強く国歌を斉唱した後、「我らの祖国を守るために尊い生命を捧げられたすべてのみたま」に対して、一分間の黙禱を捧げた。その時の感動を私は次の歌に詠んだ。

乗り物の不便忍びて全国ゆ友ら集ひて式はしまりぬ

全国ゆ集ひ来ませる友どちと心一つに歌ふ君が代

友皆の声はしだいにたかまりて力強くも響きわたりぬ

国のため斃れし人も集ひ来て共に君が代歌へるごとし

続いて大学教官有志協議会の亜細亜大学教授夜久正雄先生が聖徳太子の「勝鬘経義疏」中の御言葉「『聡慧利根』とは耳に善く聴くを聡と曰ひ、心に明らかに察するを慧と曰ふ。聡察爽明なる之を利根と謂ふ。」を紹介され、「このお言葉から我々は深い御教示を受けます。人と語るには、まず人の言葉をよく聞き、それを通して、その人の心持をその人の立場になって察することが大切だということです。そこに人と共なる生が展開していくのです。この合宿では、どうかこのことを心がけて欲しい。」と、この合宿にとどまらず、人の世におけるつきあいの

基本をお話し下さった。次いで国民文化研究会の鹿児島大学教授川井修治先生は、一足先に来ていた学生と、嵐の中を力を合わせて準備された様子を話され、今ここに三百余名の友が集って合宿を行うことのできるありがたさを語られ、「我々が本気になって結束していけば期して待つべきものがある。」とおっしゃった。さらに学生代表として地元、鹿児島大学四年の定栄安治君が立ち、嵐をつけて皆が集ってくれたことに感謝し、「精魂を傾けて、この合宿生活に取り組みましょう。」と力強く結んだ。そのあと合宿運営委員長田村潔先生、（九州大学医師）指揮班長片岡健先生（熊本県立御船高校教諭）より諸注意があつて開会式は終つた。続いて早稲田大学四年の山口秀範君が立った。山口君は「私は過去二回、合宿教室に参加して、それまで感じ得なかつた『学問する喜び』を知りました。出来る限り、抽象的、概念的思考を排しつつ、正確な言葉を通じて友とつきあつて行こうとした体験は、今も私の胸に刻み込まれています。」と述べ、さらに「『国民同胞感』という言葉の本当の意味について真剣に考えて欲しい。」と述べて、問題点をあいまいにしたまま、人と話をあわせて合宿生活をおくることの如何に空しいかを訴え、合宿にとりくむ我々の心の姿勢を正した。

△講義▽

午後より講義に入り、国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生が「日本にはなぜ天皇が永続したか」と題して話された。講義はこの日と三日目の二回にわたって行われ、この日は先生



が合宿の最初にあたって、日本の歴史、伝統に学ぶものの避けることのできない最も本質的な問題を提起するという形で話された。先生は東洋文化が本格的に日本に入って来た第二十九代欽明天皇以降、今上天皇に至るまでの歴代天皇の践祚された御年令、退位された御年令、崩御された御年令、さらに御歌の御詠草数を一覧表にして示され、歴史事実に基づいて、観念的な「天皇権力者論」をきびしく論破された。そして記紀万葉の時代の天皇がたの御歌を拝誦された。我々も先生と共に拝誦し、古代の天皇の大らかで清く力強い大御心を偲びまつたのである。以上で先生の第一回目の御講義を終わり、つづいて神奈川県立横浜翠嵐高校教諭国武忠彦先生が「思想的混迷から抜けだそう―明治維新に学ぶ―」と題して、現代を風靡する歴史観の誤りを指摘され、幕末の日本に生き

た坂本竜馬、西郷隆盛、桂小五郎の姿をあきらかにされつつ、日本の国を大切に思い、苦闘したこれら先人の力なくして明治維新はあり得なかつたことを具体的な史実にもとづいて切々と訴えられた。この時の感動を友らは次の如く歌に詠んでいる。

東京大 伊藤 哲朗

思はずも手を握りしめ胸のうちを語る御声はさけんばかりに

早大 山口 秀範

孝允の苦しき胸内語るるわが師のみ声はひたにふるへき

幕末の志士の心はそのままだに師の御心ゆ伝はりて来ぬ

夕食後、国学院大学講師の戸田義雄先生が「物を思い、感ずることと生き甲斐と」と題して話された。先生は、わが国及び西洋の文献を引用されつつ、考え方、感じ方の枠組をつくってしまふのではなく、ものがあるがままにみる素直な心をもつことの大切さについて語られた。とりわけ御講義の中で強調された「いのちあるものが、いのちあるものの為にいのちを捧げるところに本当のいのちの喜びがある。」という御言葉は、限りある生をうけた我々の生き方についての深い御教示であったが、日本の歴史の中で多くの先人が、このことを身をもって教えて下さっているのを思う時、我々はこの御言葉に身の引きしまる如き感動を覚えた。

△班別討論▽

講義にひきつづいて夜八時半より、班員同志の討論に入った。班員の一人びとりは、日々の生活においては求めることのできなかつた何ものかを求め、嵐をつけてこの合宿に集ったのである。今や共に語り得る友は自分の隣にいる。しかしながら、己が思いをうちつけに語ることには難しい。平素我々の行っている「話し合い」の仕方では己が思いを卒直に語り、友の言葉に真剣に耳を傾けることは出来ない。

「話し合い」に於いては、互いに共通点を見出し、何とか妥協しようとする姿勢に終始する。これ以上話しをすれば、相手を怒らせるかもしれないし、誤解されるかも知れないというところになると話しをやめて、互いに解り合ったことにしてしまう。あるいは、いかに現実とかけ離れていようと、理論的に整然とした意見のみが、多くの人々の賛同を得る傾向がある。話し合いがこのようなものである以上、一体誰が安心して己が真情をうちあけよう。開会式より今まで多くの先生方や友が真剣に語り合うことの大切さを説かれた。心をひらいて語ること、まごころのこもった言葉を口にする事と、又人の言葉をよくきき、その人の立場になって心持ちを察することの大切さを説かれた。われわれすべてはそれらの言葉を念頭において語ろうとつとめた。しかし口から出る言葉はいっしか自分の思いを卒直にあらわすのではなく、単に理論的、抽象的なものとなってしまう、討論は上すべりの空しいものとなってしまう。ここに

於て人と語ることの難しさを改めて痛感する。しかし皆がこの様に心をひらいて語れることを心がけていると、平素であれば、何気なく聞き流してしまう友の言葉に、精一杯の思いのこめられていることに気づくことも多かった。学園における平素の話し合いとは全く違った世界がここにある。その真実の言葉を通して真の友情は生れ出るのである。

亜細亜大 村上 勤

友どちの真心こもる言の葉にわが胸内のあつくなりゆく

討論は先生方の講義を中心に行われた。平素聞き慣れぬ先生方の御言葉に対し、まだどうしても納得出来ないと言る友、強い感銘を受けたと言る友、抵抗を感じつつも今まで自分の気づかなかつたことを指摘されてはっとしたと言る友、様々の言葉が交わされ、討論はつづけられた。皆が旅で疲れていることを考慮して十時と定められた消灯時を過ぎても討論はつづけられた。消灯後、蒲団に入ってから語り合う友が多かった。

第二日（八月八日）

△朝のつどい▽

合宿最初の朝は実によく晴れた。広場に集合した我々の正面には、明治天皇の御製、

日（明治四十二年）

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

を記した垂れ幕がかかげられ、右手には「嵐去り心も晴れて友ら集ひぬ」と書いた垂れ幕が皆の心をひいた。国旗掲揚の後、福岡教育大学三年、小林至君の指揮により、霧島の清しい空気を胸一杯に吸い、手足を十分に屈伸しつつ体操を行った。

九州大 岩下正幸

さしのぼる朝の光にかがやける日の丸の旗に胸ひきしまる

△講義▽

八時より皆の待ち望んでいた評論家村松剛先生の御講義が始まった。

先生は「世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省」と題し、その豊富な国外生活の体験に基づいて、日本人の伝統的なもの見方、考え方、敗戦後の日本思想界の混迷、アメリカ合衆国の占領政策、欧米の現状等につき、生き生きと語られ、現在の世界における日本の姿を明確に示され、最後に今、日本人のうけている様々の挑戦について語られた。そのうち「時間による挑戦」については、「今の一年は昔の四、五十年にあたる。こういう時代には弾力的な思考法が望まれる。」と前置きされながら、「それらに応ずる簡単な答えがあるわけではないが、日本人の祖先が積み重ねてきた、自然と人間に対する謙虚さを忘れずに生きることが大切です。」と語られ、我々日本人の生き方につき、大切な教示を下された。



（遠 足 に て）

△短歌創作▽

午後、我々はホテルから一里ほど離れた高原に遠足に行き、帰ってから各々、短歌を提出することになっていた。その前に熊本市立藤園中学校教諭北島照明先生による和歌創作導入講義が行われた。先生は、熊本の学生達と共に歌を詠んでおられる体験を通して、歌を詠むよろこびや、歌を通して心の交流が生れてくるよろこびを語られ、「今まで歌を詠んだことのない人も、どうかおそれずに、心を感じたことをありのままに歌に詠みこむ努力をして欲しい。」と訴えられ、先人の遺した歌を読んでいかれた。我々も先生と声を合わせて読んでいった。

御講義の後、直ちに遠足に出発した。目的地は、なだらかな草原で、丈の高い草の表面を風がさらさら音をたててわたって行く。眼前には錦江

湾に浮かぶ桜島の雄姿が望まれ、その頂きには、薄く雲がかかっている。友達はおもいおもいに草原に腰を下ろし、昼食のにぎりめしをほぼぼる。五七五七七と指をおりながら、苦心して歌を詠もうとしている友もいる。相撲を取り始めた友もいる。班別に記念写真を撮っている友達もいる。皆、霧島の清しい空気を十分に楽しんでホテルに戻ってきた。

△講 義▽

四時半より、世界経済調査会理事長木内信胤先生の御講義があつた。先生は「世界の転機と東洋思想」と題し、現在の世界と日本の情勢を事実にとつて説明され、特に日華、日韓協力委員会のこと、中共問題について深い洞察を交えながら詳しく講義された。そして「最近の内外情勢の問題の解決は、新文化の誕生にかかっています。その新文化とは東西文明の融合と称すべきものでありましょう。」と語られ、我々日本人が生きてゆく道を明らかにして下さいました。夕食後、先生の御講義に対する質疑応答が行われ、先生は一つ一つに丁寧に答えて下さつた。中でも「新文化とはどういうものですか。」との質問に対しては「解答を他に求めてはだめだ。まず自分が日々の生活の中で新文化、東西文化の融合を実現する努力を下さい。」と言われ、自分でつきつめて考えることをせず、安易に解答を他に求めがちな我々の姿勢を強く戒められた。先生の御講義を拝聴した感動を福岡教育大学の小林至君は次の歌に詠んでいる。

先生の日本の行くへを述べ給ふ話におもはず吸ひ込まれけり

スケールの雄大な話を聞き終はり握りこぶしの汗に気づきぬ

なお、衆議院議員千葉三郎先生が、七十七才の御高齡にもかかわらず、われわれの営みを見ようとしてはるばる合宿地にお越し下さっていたが、この日の夜、我ら一同に励ましの御言葉を述べて下さった。

第三日 (八月九日)

△講 義▽

合宿三日目の朝、福岡県立修猷館高校教諭小柳陽太郎先生が「事を論ずるには当に己れの地、己れの身より見を起すべし」と題して、幕末の志士吉田松陰と久坂玄瑞の交した書簡に基づいて講義して下さい。書簡にあふれる二人の思いは先生の御言葉を通して、我々に直に伝わり、あたかもそこに火花を散らして思いをぶつけあう二人の姿をみるがごとくであった。そして我々は、二人のこのつきあいこそが真実の人と人とのつきあいであることを納得した。表題の言葉は吉田松陰が久坂玄瑞に与えた実に厳しい言葉ではあるが、如何に生きるかを問う我々に与えられた大切な教示であり、課題である。

続いて、夜久正雄先生が「国を支える力」と題して講義された。先生は孝明天皇が幕末の動乱の中で御自らそのおもいをお述べになられた「御述懐一帖」を読んでいかれた。国のゆくす

えを案じ給い、御身を犠牲になさっても、只一念、国の平和と独立を願ひ給う大御心がこの力強い御文章から拝察された。そしてこの天皇の大御心に身命をなげうっておこたえた志士たちの遺歌に接した時、「国家の重大時期にあつて本当に国を支える力というものは、天皇の御心と国民の心の触れ合いの中から出てくるものです。」との先生の御言葉が、虚心に納得できたのである。

△班別輪読▽

班別輪読では、黒上正一郎先生の御著書「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」に取り組んだ。今合宿では十分な時間をかけることができなかつたが、昨日までの御講義で先生方の述べられた東西文化の融合という緊急の課題を考える時、東洋文化を批判綜合し給い、わが国に摂取し給うた聖徳太子について学ぶことは、今日特に深い意義をもつ。各班では、この文章の一字一句を大切にしながら、そこにこめられた思いをくみとることに全力を傾注した。

△講義▽

昼食後、小田村寅二郎先生の二回目の御講義が行われた。先生は平安時代以降の歴代天皇が、激動する歴史の流れのただ中で、その時々々の政治権力の掌握者から、さまざまの圧迫をお受けになりながらも、御皇祖のお志をついで、日本を「みち」のあきらかな国になさろうといかに苦闘されたかを歴史事実にもつてお話しになった。そしてその天皇方の御歌を通して、天



(深夜までつづけられた検討会)

皇がどういってお心持で、この世を生きてこられたかをたどっていかれた。天皇が、さまざまの波瀾にお会いになりながらも、国民の幸福のために、なんとかして皇室の伝統を守りつごうと、御自らを厳しく省みられながら生きてこられたことが、御製から拝察される。この御製を通して、天皇のお心に直接ふれるという体験によって我々は「過去の天皇は強大な権力で国民を押しつけてきた。」という考え方が、いかに浅薄で、事実とかけ離れているかに気づいたのである。そして先生が最後に訴えられた「人間が生きてゆく素直な道を率先して歩いてくださった方が天皇なのです。どうか事実を事実のままに見てほしい。そして、天皇のすばらしいお心を感じとる力を失わないでいただきたい。」という御言葉を、胸内ふかく留めたのである。

天皇の大御心に我ふれて思はず胸のつまる思ひす

福岡教育大 金沢明夫

いつの世も国民の上思はれし大御心の深きを知りぬ

早稲田大 開 克史

胸内の洗はるる如き思ひして師のみ言葉にじっと聞き入る

熊本大 松田信一郎

続いて行われた班別討論では期せずしてどの班も皆、小田村先生御講義のプリントをもとに歴代天皇の御製の拝誦を行い、天皇の大御心を偲びまつた。班員が声を一つに誦しまつる御歌の調べが各部屋から美しく響いた。

△和歌全体批評▽

皆の詠んだ歌は諸先生方による選歌と事務局の方々のお力により、一冊の歌稿に刷り上げられ、皆の手許に配布された。その歌稿をもとに夕食後、福岡教育大学講師山田輝彦先生が和歌全体批評をして下さった。先生は我々の歌のいくつかをとりあげられ、それを詠んだ友の心を歌の表現から察しながら、一首一首、丁寧に添削して、正確な表現に近づけて下さった。添削して頂いた歌からは、その中にこめられていた思いが不思議なほど生き生きと蘇ってくるのを実感することが出来た。先生の御言葉により、我々は思いをありのままに正確に詠みこむこと

のむづかしさと、それができた時のよろこびを自づと了解していったのである。

△慰 霊 祭▽

続いて「平時、戦時を問わず日本の国を守るために尊い生命を捧げられたすべての祖先のみ霊」をお祭りする慰霊祭が、国民文化研究会の関正臣先生の司会により行われた。祭壇に向かって我ら三百余名の整理した時、全てのあかりは消された。お祓いに代えて、国民文化研究会の福田忠之先生が三井甲之先生の遺歌「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」を二度朗詠された。その厳肅なしらべに建国以来、御国を守るために力をつくして、亡くなられた数多の祖先の人々への敬慕の念が胸のうちにあふれてくる。続いて全員黙禱を捧げ降神の儀を行う。今や全てのみ霊はこの地に集われた。祭壇に神饌を捧げ、明治天皇と今上天皇の御製を夜久正雄先生が拝誦される。天皇の国民を思い給う大御心の拝察される御歌のしらべに思わず胸があつくなる。続いて小田村寅二郎先生が祭文を奏上される。その後浜田収二郎先生に従って、皆で二礼二拍手一拝の礼法で礼を行い、「海ゆかば」を斉唱し、最後に昇神の儀が行われて慰霊祭は終わった。

み祖らのみ霊は、み空のかなたにもどっていかれたが、その思いは常に我らを見守り導いて下さるのである。

けふここに集ひ来ませる日の本のみ霊よ永遠に安らげくませ

九州大 天木和馬

国のためうせにし人を偲びつつ祭壇に向ひをろがみまつる

ここに慰霊祭において拝誦された明治天皇と今上天皇の御製、および奏上された祭文を記しておく。

△明治天皇御製拝誦▽

明治三十八年

冬 夢

窓をうつ霞のおとにさめにけりいくさの場にはにたつとみし夢

をりにふれたる

高粱の畑にこほれる霜ふみて仇さぐるらむつはもののもとも

旗

いくばくの身をくだきてかもろこしの山にかかげしはたてなるらむ

述 懐

わがこころやすらふひまもなかりけり世はさまざまのことしげくして

明治三十九年

凱旋の時

とくに
外国にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

をりにふれたる

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人の物語しつ

をりにふれたる

国のためかばねさらししますらをのたままつるべき時ちかづきぬ

△今上天皇御製拝誦▽

昭和二十年

(終戦時の御製)

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて
国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

折にふれて

海の外の際に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

昭和二十一年

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

八祭 文V

いまわれらは、南のはて近き、霧島山の集ひの丘べを祭りのにはと定めまつりて謹み畏み、魂喚ばひまつれるみ祖たちのみたまのみ前に、第十六回学生青年合宿教室参加者全員に代りて、小田村寅二郎謹み畏み敬ひ申さく、

ここ霧島のみ山は、われらが祖国、日の本つ国の神つ代の伝へに著しるけき、高千穂の峰につらなるところ、真昼間は、見はるかす眺めの中、雄にして絶佳、薩摩隼人の雄々しきたけき魂を育くみし原野をわれらが真下に望みつつ、大き入り海のまなかに、由緒ふかき桜島の煙り立つ景色を一望のもとに俯瞰し、清らかなる大気みちみつ中に、をちこちゆ集ひこしはらから、友らとともに幾日か過せば、すぎし日の颯風の荒れにしあとに苦しみし思ひ出も消え失せ、群山の濃き緑の美はしき色合ひに心ひかれつつ古へのみおやたちのみ心に、また、いまうつつに集へる友らの心にも通ひ合ふことを得ていまあらたに生くる力をわれらは若きも老いもともどもに身ぬちに覚えしめらる。

われらここに集へるものら、今日この時を選び、ささやかなれども、海の幸、山の幸くさぐさの品を、遠きいにしえゆ、今にいたるいくちとせのあはひ、みくのためにいのちささげ

し尊きみおやのみたまのみまへに、またわれらに先立ちて神あがりたまひし亡きはらから、亡き友らのみたまのみまへに、みたまなごめのみ祭り仕へまつりて告げまつらくは、この美はしき大和島根の遠き古より、今にいたりて、われらが国が独立の榮譽を守り続け、われらが国のやまとことばを榮えしめんがために、みおやらのこの世にありましし日の、きびしき、またおほらかなるみ心をしのびまつり、み祖らのみ心をしたひまつる心もしぬに、み国のとはのいのちを、うちひらきまもりたまへ、みちびきたまへと、足らはぬ心かたむけ祈りまつる。ここに集ひしわれらは、さかしらの言挙げをしぼしうち忘れ、神代ながらのしきしまのみちのまさみちふみわけゆかむと、みおやらのみあとしたひわれらはわれらのともしき身と心とを相寄せ相通はせ、学びのにはに、また、言論・文化・報道・政治・経済・実業のすみずみにまで、積りなす世のまがごとのことごとを、力の限り、打ち払い打ち払い、これらを正さずは、やまぬ思ひに心定めぬ。

天がけりまずみ祖たちのみたまよ、われら足らはぬ心のうちをうつしくみそなはし給ひ、み祖たちの雄々しく、またやさしく、そして清らけき志を、われらがうけつぎゆかんとつとむるを、みちびき守らせ給へ。み民われらもろともにもまめやかにわが大君天皇の大きみ心をしぬびまつり、もろともにも心あはせつ、まめやかに生きなむと誓ひまつるつたなき心のみ祖たちの心にみそなはし給へと、謹み敬ひかしこみ申す。

△班別和歌相互批評▽

慰靈祭の感銘を胸に各々班にもどり、和歌相互批評を行った。友の歌をよく読み、その表現を通して、その友の心持ちを察していく努力がなされ、時には歌にあらわれた作者の精神生活そのものが問題とされた。又自分の思いを的確にあらわす言葉を見つかることのできぬまま、字数をあわせるだけに終わっている歌については皆で、その友の思いを察しながら、できるだけ正確な表現に近づけようと心をくだいた。こうして、しだいに班員同志の心の交流が行われ、心を通いあわせるといふ人と人とのつきあいの基本を自づと学んでいったのである。

△最後の夜の集い▽

そして合宿生活最後の夜の集いに入った。三百余名が一堂に会し、坂東先輩の寄贈して下さったビールを飲みつつ、一人で、あるいは班別や大学別に、自慢の歌や、和歌の朗詠、尺八演奏など披露した。全員はすっかりうちとけ、会場には熱気が溢れた。最後に三井甲之作詩、信時潔作曲の「進めこの道」を力強く斉唱して散会した。散会後も各部屋から友達のうたごえがひびき、いつまでも合宿最後の夜を惜しんだ。

四日目（八月十日）

合宿最後の朝、川井修治先生が「合宿生活をかえりみて」と題して話された。先生は「共に

過して来た皆の心の底には、瑞々しい情意から出発しようとする気持ちがいとも備わっていたと感ぜられる。」と語られ、鹿児島大学のバリケード封鎖を身をもって解除された体験を通して、「これではだめだ」と実感したなら、即座に「どうするか」を決意し、それを胸の中において、しかるべき方法を探究し実行する生き方の大切なことを説かれた。

△全体意見発表▽

我々は今の世に得がたき友と四日間、心をつくして語り合うかけがえのない体験をした。その友ともあとわずかで別れねばならない。その別れの前に、この合宿での体験を通じて感じたことを、心の躍動を、是非とも皆に訴えたい。自分の思いを、生命を友の心に刻みつけてもらいたい。こういう皆の願いをうけて、ここに全体自由発言の時間が二時間設けられた。会場には真剣な、はりつめた空気がみなぎり、次々に発言がなされた。どの発言にも友の胸中の思いが自づと言葉になって発露されていることをひしひしと感じ、その一言、一句が我らの胸内ふかくしみ通った。次の友らの歌はこの時のあり様を甦らせてくれる。

長崎大 鈴木志郎

胸内に高まり覚え壇上におもはず我は駆けのぼりけり

九州大 小柳左門

壇上に登りて前を見すえつつ訴ふる友の口調激しき



(別 れ)

鹿原 博行

演壇で涙ながしてあやまれる友みつむれば胸あ
つくなりぬ

鹿兒島大 定栄 安治

一語一語心をこめて語り行く君の言葉の力強し
も

九州大 堀田 真澄

友どちの激しき言葉のはしほしにやさしき思ひ
のこめられてあり

全体意見発表の後、各々感想文を執筆し、思い
を和歌に詠んだ。そして閉会式が始まった。

△閉 会 式▽

国歌斉唱にひきつづき、国民文化研究会副理事
長浜田収二郎先生が「お互いに充実した時を過ご
すことができました。」と前置きされて、「日本
のながい歴史の中には一本のはっきりした道が通

っている。この道をふり返り、この道をすすめば一向に難しいことはない。」と情熱をこめて話された。そして参加学生を代表して鹿兒島大学の徳丸雅信君は「嵐が去ったあと、続々と全国の方が集って来てくれた時、私は胸の高なるのをおさえることができなかつた。」と語り、北島照明先生が御講義で紹介された防人の歌「葦垣のくまどに立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ」を誦みあげて「悲しみに流されず、それを乗りこえて行つたますらをの雄々しい心に学んでいきたい。」と力強く述べた。

いよいよ別れの時が来た。我々はこれより各々の大学や職場に帰り、それぞれの務めを果していく。しかし我々は個々ばらばらになるのではない。この合宿において我々は他と共なる生を体験した。我々は志を同じくする友らと共にあるのだ。このことを知り得たよろこびを大切に生きていこうではないか。

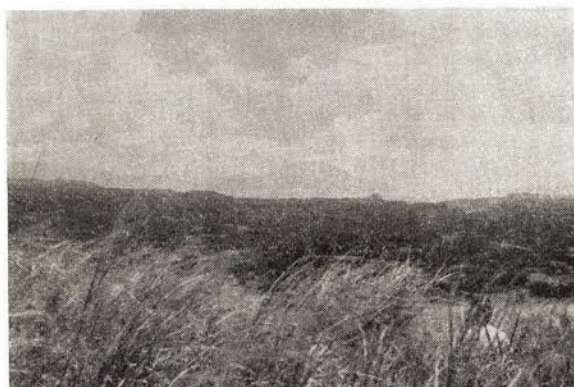
さよならと手をふる我らを見送れる君の眼に涙ひかれり

歌

集

——一年間の学生、

青年の作品より——



霧島より桜島を望む

△昭和四十五年秋から四十六年夏まで▽

肥薩線を行き、スイッチバックにて山を下るに、山あひに小さき駅あり

東京大 青山直幸

下りゆく列車目守りて微動だにせず立ち給ふ駅長のあり
駅員も姿勢を正し下りゆく列車目守りて身動きもせず
停車場に列車の入りて駅長の姿はいよよきびしく見ゆる
朝夕に掃きたまふらむこの駅のホームにちりのひとつだになし
しづやかにホーム離るる列車をば目守り給へり惜しむごとくに
山かげに消えゆく駅の人々のただなつかしく思はるるかな

「合宿教室」を目前にひかへ、毎晩友らの夢をみたり 早稲田大 山口秀範

今日もまた夢に出でたり友どちと合宿営み語らふ様の
何事か話題は定かならざるもただひたすらに語らひをれり
様々なおもひを抱きて霧島に集ふ友らと会はむ日間近か
次々と夢に出でたる友どちと心ゆくまで語らはむいざ

浅間追分原にて（上智大合宿）

上智大 北崎伸一

外套にからまるいばらかきわけてすすきの原をふみわけて行く
かたはらの岩の上に立てばはるかなる山のかなたに陽の入らむとす
夕陽入るかなたの山のどこまでもすすきの原をゆきたしと思ふ
山の彼方に陽の入るひととき一面のすすきの原の赤く輝く
さやさやとすすきそよぎて静かなる追分原の暮れゆかむとす

昭和十六年九月六日の御前会議の折、今上天皇が、明治天皇の御製

「四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」
を拜誦されしことを知りて

早稲田大 原川猛雄

天皇の御国の行末思はれし大御心の深きを知れり

御心をくだきたまへる御姿のまぶたに浮びて胸あつくなりぬ

輪読会の帰りに

早稲田大 古川忠

かの友の悩みしことはいたき程己が心に伝はりくるも

悩みたる気持を憶ひ一言でも言はむと思へど言葉いでこず

この次も来てくれるかと思ひつつ別れ告げたり寒き夜道に

「古事記」読後感想文を書きて

早稲田大 桑原清春

筆持つも言葉の出でぬくやしさに我いくたびか唇かみぬ
つたなかる我が文読みて先輩のよく書けたてふ言葉うれしき

上野駅に向ふ途中にて

東京大 伊藤哲朗

風寒き不忍池にシベリアの野を越え来しか鴨の群れをる
凍てつかむばかりの水に鴨の群の羽根ふくらませ漂ひてをり

富山の岸本先輩より戴ける法雲寺合宿記録「光志」を讀みて 九州大 前田秀一郎

お仕事の忙しき中をみ友らは一夜集ひて学び給へり

床につきてなほ語らるるみ友らの姿偲びぬ刷り文読みて

み友らの歌直さるる先輩のお声を現うつつに聞く心地しぬ

刷文にこめられしそのみ思ひを偲びつつ我は歌よみゆかむ

福永君夜を徹して発表の準備をし給ふ(熊本合宿にて)

友みなの寝入りし後にひとりして炬燵に入りて君は書よむ

聖徳皇の生き給ひたるみ世の様を友に伝へむと調べ給ふか

時をりは遠きを見遣るごとくしてノートに筆を走らせてゆく

いつしかに寝入りし我に蒲団かけかぜひきますよと声かけくれし

合宿地にて友を待つ（太宰府合宿にて）

九州大 小柳左門

裏山の木ずえならして吹く風のはげしくなりぬ夜の更くれば

風ふぶき雨降る中を未だ知らぬ道をたどりて友来ますらむ

窓につく露をぬぐひてぬばたまの外を見やれど灯見えずともしび

今か今かと待てども友は着きまさず外の嵐はいよよはげしきに

み友らと書読みをれば窓ゆすり風いや吹きぬ空を抜くがに

松田信一郎君の母君の葬儀に参列して

九州大 久々宮 章

眼をはらし肩落としたる君見れば慰めたくも言葉出でこず

母君のなくなられたる工場へ君は我らを導きてゆく

道すがら亡き母君の思ひ出のつぎからつぎへとあふれくるなり

今にして思へば母に仕残せること多かりと君は語りぬ

時来たりいざ発ちなむと思へども君を思へば去りがたかりき

あれこれとわれらがことを気づかへる君の眼に寂しさあふる

田所広泰先生の御本を読みて

九州大 吉田 哲太郎

読みゆけば国の行末思はるる熱き思ひの胸に迫りく
ひたすらに国を思ひて戦はれし気魄を我も受け継ぎゆかむ

岩本徹君を偲びて

福岡教育大 小林 至

南洲の遺訓の文を読む君の目は常に輝またきてありき

君が言葉少なけれども素直にて思ひこもりてすがしかりけり

心うつ南洲遺訓の言葉には君赤鉛筆の線を引きをり

君がいつも今の我がはづかしと言ひし言葉の胸に迫りく

南洲を慕ひて君は南の徳之島へとひとり旅だちぬ

何故に君は我らに語らずにひとり小島へ旅だち給ひし

南の月かけ清き海原に君が姿の失せ給ふとは

君ひとり胸にいだきし苦しさを我気づかざりしをすまぬと思ふ

君の書きし「至誠」の文字のはげしさは君が心の思ひなるらむ

我もまた君が思ひを偲びつつ誠の道を求め歩まむ

今はただ君がみ魂のやすらかにねむり給へと祈るなりけり

〔編者註〕 岩本徹君は福岡教育大学一年生、昭和四十五年夏の雲仙合宿教室に参加、その後

大学において研究活動に専念していたが、昭和四十六年二月八日、徳之島を尋ねて鹿児島を出港後消息を絶った▽

輪読会の帰り道にて

風強く雨降る中を友と我れ「進めこの道」を歌ひて歩みぬ
今からも共に励まむとの友の声に心満ち来てうれしくなりぬ
岩本の分まで我らはやらねばと我は答へたり友の言葉に
微力とも我ら力を合はせつつ誠の道を求め歩まむ

学生代議員会を見て

九州大 十時一郎

時のまに人の真心消えにけりヤジと怒号のどよめく中に
自治といふ言葉に酔へる人々にこの有様を見せてやりたし
かくのごと人の心のすさみゆけば我が日の本はいかになるらむ

前田君の和歌についての発表を聞きて（熊本合宿にて）

熊本大 松田信一郎

一首一首うた読みあぐる友の顔はいつしか赤き色にそまりゆく
心こめ歌を読みゆく君の声のつよくこころに伝はりて来ぬ
若くして自刃せられし先輩の歌読む君の声はふるへつ

さまざまの思ひを胸に逝き給ふ先輩ひとをもろともに偲びまつらむ

友よりの手紙を見て

鹿児島大 定栄 安治

旅終へて帰りてみれば友どちの文届きをり有難きかな
朝毎に竹刀を振りて元氣ぞとふ君の便りに楽しくなりぬ
合宿を楽しく待つとふ友どちと語らふ時のひたに待たるる

△霧島大合宿にて▽

君が代の高き調べの歌声は心にひびき胸のたかなる
福岡教育大 大槻 躬信

九州大 堀田 真澄

夜遅くかけつけ来ぬる友どちのいかにしてもてふ心のうれし
ひとたびは家へもどりてさらにまたかけつけしことおろそかならず
かくばかりそろひあひたる心もてこの合宿をみのらせゆかむ

熊本大 高岡 正人

友どちの語る言葉はつたなけれどその思ひたけく胸に迫りく
四日間共に学びし友どちと別れると思へばつらさ覚ゆる

涙ためすみませんといふ友達に拍手する手に力こもりく

神戸大 高橋敏人

台風のすぎて晴れたる大空にそびえてたてり高千穂の峰

中央大 佐野和利

合宿で学びし心の素直さを吾れはもちたしとこしへまでも

霧島神宮駅に友だちを迎へにゆきて

中央大 石井育英

汽車のつくそのたびごとに幕をもちて友らの来るやと案じつつ待つ

九州大 佐藤則夫

青草の繁りし原にたたずめば心地よき風吹きなでてゆく

早稲田大 藤井貢

見渡せばひのき木立ちのなみつづくそのさ緑のうるはしきかな

熊本大 折田豊生

よそよそしくふるまひ過ごせし友どちも一夜を越せば笑顔かはせる
一夜越して初めて友に声かくれば何とはなしに嬉しかりけり

声をそろへ御歌を読みし友どちの目はいきいきと輝きてをり
上智大 山口良男

夜おそく迎へてくれし友見れば長き旅路の疲れ忘れたり
亜細亞大 北原康国

合宿にさそひし友のまごころが今しみじみと胸につたはる
東京外語大 井上春雄

諸先生のご講義に接して
西南大 肱岡俊一

日の本を守り育てし師の君のみ教へとはに絶やさじと思ふ
秋田大 栗山隆

感動にむせびし涙忘れずに心満ちつつ我は帰らむ
中央大 岩上隆一

み友らと肩ならべゆくこの道のたのしき語らひわれは忘れじ
大合宿準備の折に天本君負傷す
九州大 木村秀晴

硝子戸の割るる音してかけつくれば血だらけになりて友の立ちたる

病院に急ぎ行きたる友どちは額の傷に五針も縫ふとふ
皆共に頑張りてこしに病院に待つらむ君が無念さを思ふ

力強き師の御言葉聞きをればおのづと身体の前にのりださる
熊木大 坂本精児

小田村先生の感想を聞きて
師の君の御言葉聞けばこの我にのたまふ如く思はれてくる
鹿兒島大 太田 勘

霧島の山に登りて眺むれば空の青さのいとすがすがし
熊木大 栗原 茂

少しでも早く行きたき心地して夜行列車に我は飛び乗る
福岡教育大 金沢 明夫

夜明けて霧島近くなりければ思ひははする合宿教室
霧島に着きし我らを迎へ来し友の心のありがたきかな

語りても語りつくせぬ君と僕時の少なさ惜しまるるかな
鹿兒島経済大 成尾 勇一

友達と飯くひをればさはやかな涼しき風の吹きて来るなり
九州大 吉田 哲太郎

北島先生の講義を聞きて

防人の心根ひたにつたはりて我が父母のしのぼるかな

熊本大 前川 深

師の君のすなほに見ろてふ言の葉をいつも心にとめおきゆかむ

鹿兒島大 出田 哲朗

小田村先生の御講義を聞きて

天皇の国民思はるる御心に日の本に生くる喜びを知る

早稲田大 富田 欣三郎

雲間より日射しもれきて嵐すでに過ぎし喜び胸にわきくる

亜細亞大 福岡 達

まどひつつこの合宿に來りしがさだかならねど道ひらけゆく

熊本大 田之上 正明

刑部直千国の和歌を読みて

いかばかりかなしかりけむますらはは涙あふれし妹が眼を見て
かなしみをのりこえてゆくますらをの雄々しき心我ももちなむ

鹿兒島大 徳丸 雅信

汗ばみて友と登りし霧島にそよ吹く風のこちよきかな

京都産業大 笹山 一義

朗々と声を合はせて読みゆける御歌の調べに心高まる

東京大 青山直幸

合宿で初めて知りし友達と別れを惜しみ語りあひたり

大分大 野尻哲雄

話しても話し足らざる思ひして友にふたたび語りかけゆく

法政大 伊藤 祐

ひとり走りふたり走ればそのあとを先を競いてみな走り出す
ゆるやかにカーブ描ける山道をわれもつづけり友らのあとに

九州大 久々宮 章

台風でくずれし土砂を除かむとはげみし友らの労苦偲ばゆ

早稲田大 藤 俊輔

霧島の駅頭に立てば友どちのバスを仕立てて迎へたまへる

岡山大 納所 実

村松先生のご講義をお聞きして

熊本大 福永好紀

師の著書を読みし時より一目なりとも会ひたき望みいまだかなひぬ

南国の澄みわたりたる青空に日の丸ひときははえて見ゆるも
亜細亜大 村田隆和

汗かきて着きし草原に腰おろし昼のむすびを口にほほばる
玉川大 川尻博宣

霧島のはるかに続く山なみをみれば心の澄みゆくおぼゆ
鹿児島大 小原芳久

遅れ来し友の元気な姿見てよくぞ来たたと肩たたきあふ
長崎大 西田伸二

霧島神宮駅にて
降りたちてなつかしき友の顔見ればうれしくなりてつかれ忘れる
鹿児島大 山本俊一

台風のさなかにありても友達は合宿準備に励みあるらむ
皇学館大 白江恒夫
友達のをちていまさむ霧島へ早くつきたしと心はやれり

霧島で親しくなりし友達と別るるつらさ身にしみにけり
東北大 後藤和文

日の本の絶ゆることなき伝統を心つくして守りてゆかむ

東京外語大 安納俊紘

土砂くずれ道ふさがりて通れずに引きかへすことたびかさなりぬ
九州大 大野英則

霧島のホテルにやっと着きし時友と二人で喜びあひぬ

日本大 熊倉幸一

心こめ語らるる師の御言葉に胸あつくなりじっと聞きぬる

九州大 十時一郎

合宿に来ざりし友に聴かせたしこの素晴しき御講義のあまたを

鹿児島大 仁多永夫

友どちの鋭き問ひの迫りくれば思はず我は考へこむなり
友どちの聞き入るまなこ見あぐればさらにつきつめ語らむとぞ思ふ
いかならむ事ありとても友どちと心通はせ励みてゆかむ

国武先生の御講義を聞きて

市民大学講座 浜田博子

国思ふますらをの心語らるる師は感極まりて御声つまりぬ

国思ひ生命を捨てし人々は我等と同じ年頃といふ

日本編物専門学校

高村 恒子

二日前はじめて会ひし友達と語りは尽きぬ霧島の夜

宮崎交通

船木 敏靖

みたまをばむかへまつりてまなことち散りにし父をしのびまつりぬ

航空自衛隊学校

村山 寿彦

霧島の山路より見る山々の木立の緑はあざやかにして

熊本・五福小学校教諭

豊田 幸弘

山裾にわづかに狭き田もありぬ人は耐へゆく火山灰地に

熊本・山鹿小学校教諭

瀬口 忠一

真心をけふより子らに伝へむと霧島山を下るはうれしき

熊本・清水小学校教諭

福富 二人

霧島の朝のしじまに上りゆく日の丸の旗のすがすがしきかな

熊本・南関南中学校教諭

徳永 宗正

霧島に集ひし友の言の葉に日本のこころ聞くぞうれしき

霧島で得たるよろこび子どもらにつたへむと思へば胸内おどる
久留米・南小学校教諭 山崎 寛

霧島神宮駅にて

はろばろと集ひきまししわが友のすがしき声をきくぞうれしき
久留米・高良内小学校教諭 末崎 利治

熊本・花園小学校教諭 東 正知

国思ふ心一途にあらしつき霧島山へいそげり我は
杜絶した道をのぼりてはるばるとたどり着きたる霧島の宿

熊本・豊水小学校教諭 福原 和富

「聞く」ことの術さへ知らでこの日まで歩み来し日の悲しかりけり

久留米・南筑高校教諭 西尾 金十郎

汽車おくれ夜半になりしに駅頭に迎ふる友のいとど嬉しき

久留米・牟田山中学校教諭 大坪 豊

溪流の深き響きを下にして友等と登る青葉の路を

むらぎもの心の迷ひ晴れにけり我が道直ぐに進み行かなむ

八代・八千把小学校教諭 橋本 洗心

おごそかなる慰霊の式に友しのび歌声かれて涙あふるる

熊本・城北小学校教諭 梅田 司

整然と植ゑ込まれたる杉苗木の伸びゆく姿のいともうるはし

南日本放送 平田 美雄

別れても文かはさむとのたまひし師の御言葉を胸にきざみぬ

高千穂相互銀行 中山 能道

合宿に集ひし友と語りたるこの喜びを忘れざらめや

宮崎交通 木部 城聖

ひと足先に山降りる友にいつの日かまた語らむと手をさしのべぬ

事前合宿に参加された方々を思ひて 鹿児島大 鈴木 由美子

鳴り狂ふ嵐の中に過ぎるる友を思へばわが胸いたむ

すなほなる心に語る友どちにつつまれし身の幸せをおもふ

上智大 角丸 泰子

真青なる大空のもとに日の丸のはためく姿うつくしきかな

台風を案じておられる川井先生にお会ひして 玉川大 佐原 深雪

赤き目に夜もいねられず合宿をいちぢに思はるる御心を感じ

師の君のやつれし様に合宿をいちぢに思はるるみ心をおもふ

あ　と　が　き

今回の合宿教室では小田村理事長による「日本にはなぜ天皇が永続したか」（本書では「天皇政治について」と改題）という講義が、当初三日目に予定されていたが、急遽予定を変更して、第一日目の冒頭に、その前半の講義が行われることになった。万言を費すも、所詮は天皇の問題に心を注ぐ覚悟をきめる以外に道は開けない。合宿運営者全体がそこにおもいをいたしたためであった。

天皇の問題を考えると、人間の間でいうことは人間のまごころのありようにおもいをひそめることである。何故なら万世一系の天皇の存続とは、万世一系にうけつたえられてきた「まごころ」の相続に外ならなかったからである。国民が天皇をお慕いしてきたのは、決して上からの強制によるものではなかった。天皇というみ位には人間のもつべき「まごころ」が連綿と相続されてきたことを、われわれ国民は身にしみて知っていたからである。それは決して一部の者が言うように、恣意による判断でもなければ単なる感傷でもない。それはまぎれもない歴史上の事実であった。それは歴代の天皇の御製をひもとけば誰しも納得出来ることである。

学問が事実から出発するものである以上、天皇の問題を考えると、この天皇方のお心と、それを信じてきた国民のおもいと、それを正しく見つめることは何にもまして大切なことではないか。天皇研究の第一歩が歴代御製の研究にあることはこの点からしても当然であろう。天皇の御存在をはじめから否定すべきものとして考え、その前提に立って天皇論を展開する方法こそ、感情論のそし

りを免れないであろう。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をもおひて

これは終戦の時に天皇がおよみになったお歌であるが、天皇政治とは具体的に言えば、かかる時
にあって、かくのごときお歌をおよみになる方を、国民の中心としていただいて来た政治だとい
うことである。

概念を操作することが学問であるという風潮の中にあつて、いまこそ事実そのものに肌をさらし
つつ、躍動する生命の中に学問をうちたてなければならぬ。かかる学問をきり拓くために本書が
その一つの道しるべともなれば、われわれのよろこびこれにすぎるものはない。

昭和四十七年四月

編集委員

山 田 輝 彦
小 柳 陽 太 郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	定価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五	A 5版 三〇四頁	〒1,000円 150円
憂国の 光と影 ―出所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇	B 6版 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書版)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	定価
1	古事記のいのち	夜久 正雄	四一・三・二五	二四六頁	〒二八〇円 八五円
2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一一・二五	二七九頁	非売品

11	10	9	8	7	6	5	4	3
続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	歐米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	五〇〇円 T一四五円	三〇〇円 T一五五円	四〇〇円 T一五五円	四二〇円 T一五五円	四二〇円 T一五五円	三二〇円 T一五五円	三二〇円 T一五五円	非売品

C 「合宿教室」レポート

13	短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—	山夜 田久 輝正 彦雄	四六・一二・一	三一六頁	三三〇円 T二五円
12	短歌のすすめ	山夜 田久 輝正 彦雄	四六・四・一	三〇九頁	三五〇円 T二五円

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5版 八八頁	一五〇円
2	福岡 (一二七)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5版 五三頁	五〇円
(2)	岡山	32	民族復興の根柢を培うもの	高木尚一・彪・石村暢五郎	新書版 一一三頁	一〇〇円
3	佐賀 (七二)	33	民族の明日を求めて	勝部真長・木下彪 森三十郎	新書版 二五〇頁	二〇〇円
4	阿蘇 (二六〇)	34	国民同胞感の探求	花田大五郎・中山優 野口恒樹	B6版 三六五頁	五〇〇円 T一〇円

13	12	11	10	9	8	7	6	5
霧 (三五三) 島	阿 (三三六) 蘇	雲 (二四〇) 仙	別府・城島 (二二五)	桜 (二〇二) 島	雲 (二〇二) 仙	阿 (二一五) 蘇	雲 (二〇八) 仙	雲 (二〇〇) 仙
43	42	41	40	39	38	37	36	35
日本への回帰 ―第四集―	日本への回帰 ―第三集―	日本への回帰 ―第二集―	日本への回帰 ―第一集―	新しい学風を興すために ―第三集―	新しい学風を興すために ―第二集―	新しい学風を興すために ―第一集―	続々 国民同胞感の探求	続 国民同胞感の探求
木内 竹山 信胤 道雄・高谷 覚蔵	木内 房雄・太田 耕造 信胤	戸川 恆存・木内 信胤 福田 尚	岡内 潔・花見 達二 信胤	木内 秀雄・広田 洋二 信胤	木下 道雄・木内 信胤 山 広居	黒岩 恆存・木内 信胤 福田 一郎	津下 秀雄・木内 信胤 小林 正章	木内 信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎
新書版 三二四頁	新書版 三〇七頁	新書版 三一〇頁	新書版 二九五頁	新書版 二九八頁	新書版 二九八頁	新書版 二四八頁	B6版 三二五頁	B6版 四三三頁
〒三〇〇円 一一五円	〒三〇〇円 一一五円	〒三〇〇円 一一五円	〒三〇〇円 一一五円	〒三〇〇円 一一五円	〒三〇〇円 一一五円	〒二〇〇円 一一五円	〒五〇〇円 一一〇円	〒五六〇円 一一〇円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

第十四回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5版 一三六頁
第十三回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5版 一一八頁
第十二回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5版 一二〇頁
第十一回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5版 一〇四頁
第十回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第九回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三九・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第八回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三八・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第七回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三七・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第六回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三六・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第五回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三五・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第四回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三四・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第三回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三三・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第二回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三二・一〇・二〇	A5版 八〇頁
第一回「合宿教室」参加者感想文集	国民文化研究会編	三一・一〇・二〇	A5版 八〇頁
15 雲 （四九一） 仙	日本への回帰 —第六集—	小林 秀雄・木内 信胤	新書版 二六五頁 三〇〇円 〒二二円
14 阿 （四〇三） 蘇	日本への回帰 —第五集—	岡 潔・木内 信胤 木下 道雄	新書版 二九五頁 三〇〇円 〒二二円

第十五回「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘—	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5版	二二八頁
第十六回「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5版	一二六頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5版 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	浜川 井修二郎	四四・一一・二九	A5版 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
歌よみに与ふる書・他四編	正岡 子規 （国民文化研究会発行）	新書版 一二二頁	一五〇円 一五五円

天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 (斑鳩会発行)	新書版 一〇七頁	(品切)
今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書版 一五七頁	二三〇円 一七〇円
明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書版 八五頁	二三〇円 一七〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新編 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集— 日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A 5 頁版 (上) 八五七頁 (下) 九一二頁	上・下各 三〇〇〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書No. 1 「古事記のこころ」の翻訳)	(訳者)G. W. ROBINSON THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTURAL STUDIES	B 6 頁版 二〇八頁	七〇〇円

H
月
刊
誌

月刊 「国民同胞」	誌 名
昭和三十六年十一月創刊 昭和四十七年四月現在一二六号	創 刊 ・ 号 数
B 5 八頁版	版 ・ 頁 数
〒 二二〇 二〇円	定 価

— 日本への回帰 —
(第7集)

昭和四十七年四月二十日発行 定価 三〇〇円

〒一一五円

編 者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小 田 村 寅 一 郎

発 行 所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル
振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします

